『さア、此奴は何か物になりさうだ』とネヅダーノフは思つた……併しそのフイチユエフは實際は手におへない無賴漢だといふ事が分つた。健康な思ひ切つて力强い男たる彼――は實際に於て何一つ仕事の出來ない男だと云ふ理由から、土地管理組合から持地を沒收された程の男であつた。

『俺は出來ない！』深い內心の嗐きと長々と引張つた溜息とをもつてかうフイチユエフは啜り泣くに違ひない。『俺は仕事が出來ない！殺してくれ！でないと俺は自分で死ぬんだ！』そして揚句の果ては施しを求め廻る――パンの皮を買ふべき半ペンニイを求め廻る……終にはリナルドー・リナルヂニーの畫布から脫け出した顏だ！

工場に居る手合も矢張りネヅダーノフには何の役にも立たなかつた。凡てそれ等の輩は恐ろしく元氣のよいものか恐ろしく陰氣なものばかりであつた……そしてネヅダーノフは彼等と少しも和合する事が出來なかつた。彼は此の事に就て長い手紙を友人シーリンへ送つた。ひどく自分の不能を歎じ、且つそれを自分の憐れな敎育と厭はしい藝術的氣分とに歸した！彼は傳導事業に於ける自分の働きは口ですることではなく、書かれたる生きた言葉を以てする事だといふ唐突の結論に達した。けれども彼の企てた論說は出來上らなかつた。彼が紙の

上に書き現はさうと欲した事の凡ては、調子にも言語にも同じく虛僞な不自然なそして矯飾的な或物の印象を彼に與へた。

再度まで――あゝ怖るべし！彼は知らず知らず詩や或は懷疑的な個人的な表白に迷ひ込んで居たのだ。彼は斷然意を決し――信賴と親密の異常な表號として！――此の事をマリアンナに語つた……そして無論彼の有する文學的性癖に對してではなくて、寧ろ彼の陷つてゐる道德的疾病に對して彼女の同感を見出して、再び彼は驚かされた。而も彼女も矢張その疾病は親しく知つて居るのであつた。マリアンナは彼と同じく凡ての藝術的な事物に對しては全然反對の側に立つてゐた。それでありながらマルケーロフを愛せず又これと結婚しなかつた理由は實は彼に藝術的な性質の跡だもないといふその事にあつたのだ！マリアンナは、勿論此の事實を自分自身にさへ認める勇氣はなかつた。併し吾々に最も力强いものは吾々自身にとつて半信半疑の秘密として殘つてゐる所のものである事は明らかなのだ。

かくて幾日かはゆる〳〵ときまりなく、併し佗しくもなく過ぎて行つた。

何かしら妙なことがネヅダーノフのうちに起りつゝあつた。彼は彼自身に對し、彼の活動に對し、否寧ろ彼の不活動に對して不滿を抱いてゐた。彼の言葉には殆ど絕え間なく苦い喰

ひ入る樣な自責があつた。けれども彼の心靈には――何處とも知れないが極めて深い奥底に――一種の幸福と、ある平和の感じがあつた。それは田園の靜けさと、新鮮な空氣と、夏と、善い食物と、それから安逸な生活の結果であつたか、又は彼が今や一生の中始めて一婦人の精神と密接に接觸した、その甘さを味つてゐたといふ事實から生じたのか――それは言ひ難い事であらう。併し實際に於て彼は友人のシーリンに向つて――而も眞面目に――不平を訴へるやうな事をしながらも、矢張彼の心は輕かつた。が、その心の狀態も唯だ一日の中に慌だしく且荒々しく、打ち壞されてしまつた。

其の日の朝彼はワシリー・ニコエヰチから一通の通牒を受取つた。その通牒で、彼は次の訓令を待つ間に前述のソローミン及び舊弊な信者とよばれたゴリューシュキンといふS――に住んで居る商人と急に交りを結び、折合をつけて置くやうにといふ命令をマルケーロフ諸共受けたのであつた。此の通牒はネヅダーノフを烈しい動搖の狀態に陷らしめた。彼は彼の不活動に對する叱責をその中に讀む事が出來た。始終言葉の上でばかり暴威を逞しうして居た苦しい念が更に彼の心のどん底から湧き起つてゐた。

カルロミエーチエフは非常に心を攪き亂されながら食事にやつて來た。『考へても見給へ、』

と彼は殆ど落涙せんばかりの聲で叫んだ、『何て怖ろしい事だ、僕が今新聞で讀んだのは。僕の友人が、親愛なるミハイルが、セルビアの公爵がベルグレードで或る惡漢の爲めに殺されたのだ！吾々が彼等に對して斷乎たる抑壓を與へなければ、ジャコビン倶樂部員や革命者はこんな事をやるんだぜ』。シブヤーギンは『何卒私の考へを述べさせて下さい』と云つて、此の忌はしき殺人は恐らくジャコビン倶樂部員の仕事ではない、『彼等はセルビヤに居るとは思はれない……併しカルロミエーチエフは何事も聽き入れないで、前と同じ涙ぐんだ聲で、殺された公爵はどんなに自分を愛して居たか、どんなに立派な鐵砲を自分に呉れたか！など云ふ事を話し出すのであつた……次第に岐路に入り込み乍らそして愈々益々憤激し乍らカルロミエーチエフは外國のジャコビン倶樂部員の事から、內地で出來た虛無主義者或は社會主義者の事に論じ及び果は全くの暴論にまで陷るのであつた。兩方の手で大きな白い卷パンを握んで、そしてそれをスープの皿の上で半分に引裂き乍ら『カッフェ、リッシュ』に於ける眞の巴里っ子そのまゝの型で、彼は何者にもあれ又何事にもあれ是れに反對する凡ての人を壓潰したい、粉々になるまで挽いてやりたいといふ熱望を發表した。『時こそ來れだ』と彼は匙を口の處へ持つ

て行き乍ら言つた。『全く時こそ來れだ！』と彼はシエリー酒を注がす爲めに杯を召使の方へ差出しながら繰返し言つた。彼はモスクワの大新聞記者を恭々しげに引き合に出した――そして Ladislas notre bon et cher Ladislas（ラヂスラス、我が善良にして親愛なるラヂスラス）――の名が絶えず彼の口に上つた。そして始終彼は、彼等諸共突き刺すぞとでもいつたやうにネヅダーノフを見守つた。『さあ、これこそ君に對してする事なのだぞ！』かう彼は言つて居るやうであつた。『これを受けろ！僕は君の事を言つてるんだぞ！而もそれに類する事がもつとあるんだ！』とう〳〵、ネヅダーノフはそれに堪へ兼ねて駁論を初めた。彼の聲はどうも少し不明瞭で嗄れてゐた――勿論怖れの爲めではない。彼は新らしい時代の希望と主義と理想とを擁護し初めた。カルロミエーチエフは直ぐ樣高い聲で應答した――彼の憤怒はいつも假聲で表白される――そして彼は惡口を初めた。

シブヤーギンは嚴然としてネヅダーノフの肩を持つた。ワレンチーナ・ミハーロウナも主人に同意した。アンナ・ザハローウナはコーリヤの注意を奪はふと勤めた。そして帽子の下から四方八方へ憤怒の視線を投げてゐた。

マリアンナは化石した樣になつて坐つてゐた。

併し二十回も繰り返されたラヂスラスの名を聞くに及んでネヅダーノフは沸然と色を成し、卓に一撃を加へて叫んだ。『立涙な大家だ！そのラヂスラスとかは何んな種類の人間だか僕等は知らないが！彼れ、生れ落ちるから雇ひ上げられた傀儡だ。それ以上の何者でもないのだ！』

『あア――あ――あ――だから――それは』とカルロミエーチエフは憤激の餘り口訥りながら涙聲で云つた……『君は甘んじて伯爵のブラゼンクラムブや、コフリヅーキン公爵のやうな地位の人の尊敬を享けるやうな人を引合に出すとは何事だ！』

ネヅダーノフは肩を聳かした。『全く一大推擧。コフリヅーキン、おべつかりの熱心家――』

『ラヂスラスは僕の友達だ、』とカルロミエーチエフが叫んだ。『彼は僕の仲間だ……そして僕は――』

『愈々以てそれは貴方の爲めによくない事です、』とネヅダーノフが遮つた。『貴方が彼の思想にかぶれて居られるといふ事になるのです。そして僕の說明は均しく貴方にも當て嵌る事になるのです』

カルロミエーチエフは憤怒のあまり蒼くなつた。

『な、何んだ！わ、笑つて居る！君は――君は――直ぐなるんだ――』

『何を貴方は僕となさり度いと仰有るのです、すぐに？』とネヅダーノフは反語的な鄭重さを以て再び遮つた。

二人の喧嘩は、若しシブヤーギンがその發端に於て妨害をしなかつたら、いつ果てるとも知れなかつた。聲を高くして、そして何れを勝ちとも言へない樣な態度を裝ひながら――政治家の權威、若しくは家長の威嚴を以て――彼は穩かに主張した。此の席上でかゝる放恣な言論は少しも聽き度くないといふこと、禮節と善良な敎養の域を脫してゐないといふことが分りさへすれば（此處で彼は紋章の指輪を欲めた食指を上げた）いかなる種類の信念も之を尊重すべきであるといふ事が自分の昔からの掟（彼は彼のこの神聖な掟を自分自ら改正した）であつたといふ、事とは云へ一方ネヅダーノフ君の言は彼の年輩にはあり勝ちな事ではあるが、その中に放恣な點があると云ふ事を非難せぬわけには行かぬし、又一方敵陣にある人物に對するカルロミエーチエフ君の苛刻な攻擊にも、例へそれが公衆の安寧を思ふ熱心さの餘りとは云へ、贊成する事の出來ないところがあるといふ事などを彼は詢々と說いた。

『我が屋根の下には、』かう彼は話を結んだ。

『シブヤーギン家の屋根の下にはジャコビン黨も居なければ傀儡もゐない、居るものは唯だ一度互に了解し會へば握手に終らざるを得ない樣な善良なる人間ばかりなのです！』

ネヅダーノフとカルロミエーチエフとは共に沈默した。けれども二人は握手しなかつた。彼等が互に了解するの時期が明らかに來なかつた。否反對に彼等はかくも烈しい相互の憎惡を感じた事はこれ迄には斷じてなかつたのだ。

晩餐は不愉快なきまりの惡い沈默に終つた。

シブヤーギンは外交上の珍談を試みやうとした。が、中途で諦らめてきつぱり罷めてしまつた。マリアンナはぢつと皿の上に目を据えた。彼女はネヅダーノフの言葉によつて起された同情の念をば外に顯はさうとはしなかつた――がそれは斷じて卑怯の爲めではないのだ！　それはシブヤーギン夫人に對して裏切つてはならぬといふ義務を何よりも先づ感じたからであつた。彼女は夫人の突き刺すやうな、執拗い視線が自分に注がれてゐるのを感じた。事實シブヤーギン夫人は彼女の上に彼女とネヅダーノフとの上に眼を据えつけてゐるのであつた。彼の不意の爆發は最初此の敏感な貴婦人を驚かした。と、やがて彼女は思ひがけなく一點の光を認めたやうに思つた。彼女はその爲めに思はず知らず『あゝ！……』と呟いた位だ。

彼女は急にネヅダーノフが彼女から流れ去りつゝあるのを見定めた—此頃まであれ程までに彼女の把握の中にあつたネヅダーノフが。こんな風で何事かゞ起つたに違ひないと云ふ事が彼女に解つた。……それは果してマリアンナか？さうだ、勿論それはマリアンナであつた：：彼が彼女を引きつけたのだ……さうだ、そして彼は……

『處置しなければならない』かう彼女はその回想を終つた。その間カルロミエーチエフは憤怒で息を塞らしてゐた。そして二時間の後に骨牌をやり出した時ですら「通過」とか「買收」とか云ふ言葉を彼は胸を痛め乍ら口にするのであつた。彼は「それを超越してゐる」と云つた樣な態度を裝つては居たものゝ、彼の聲には傷いた感情の嗄れた顫音が聞かれた。シブヤーギンは唯獨り心からその全景を嬉しがつて居た。彼は起らんとする暴風を靜める爲めに彼の能辯の力を示す機會を得たのである……彼はラテン語を知つて居た。そしてヴアヂルの Quos 一は彼の慣用語であつた。暴風雨を鎭むるネプチユーンに自分を擬らへる事は彼の心が承知しなかつた。彼は寧ろ一種の同情を以て自分を考へたのだ。

十五

廳てネヅダーノフは自分の部屋へ退いて、堅く戸を閉した。彼は誰にも——マリアンナを除く外は誰にも會ひ度くなかつた。彼女の部屋は家の最上層を眞二つに横斷して居る長い廊下の盡頭にあつた。ネヅダーノフはたつた一度それもほんの一寸の間彼女の部屋に居た事があつた。併し彼が今彼女の部屋の戸を敲いても彼女は怒りはしまい、寧ろ彼と語り度いとさへ望むであらうと云ふ考がふと彼の心を打つた。時刻はもう遲く、十時ぐらゐであつた。シブヤーギン夫婦はあゝ云つた晩餐の後なので彼の邪魔をする必要などは感じて居なかつた。そして相變らずカルロミエーチエフと骨牌を弄んでゐた。ワレンチーナ・ミハーロウナは二度までマリアンナをさがした。彼女も亦晩餐が濟むと直ぐに姿を隱したからであつた。

『マリアンナ・ウイケンチエウナは何處です？』

と彼女は初めはロシア語で次にフランス語で、特に誰れに言ふとはなく、非常に驚いた時などに人々がよくやるやうにどちらかと云へば壁の方へ向いて尋ねた。が、直ぐに亦勝負に夢中になつた。

ネヅダーノフは部屋の中を一二度彼方此方と歩き廻つた。それから彼は廊下傳ひにマリアンナの部屋の戸口へ行つて靜かに叩いた。何の應もなかつた。彼は今一度叩いた、戸を檢査

した…錠が下りてゐるやうであつた。けれども彼が自分の部屋に戻つて机に向つて坐つたか坐らぬうちに、彼の部屋の戸が微かに軋つた。そしてマリアンナの聲が彼の耳に入つた。

『アレキセイ・ドミートリッチ。私の處へゐらしたのは貴方でしたの？』

彼はいきなり跳び上つた。そして廊下へ走り出た。マリアンナは蠟燭を手にしながら、蒼ざめて、ぢつと身動きもせずに戸口に立つてゐた。

『さうです　僕…』と彼は囁いた。

『御一緒にまゐりませう、』と彼女は答へた。そして廊下に沿ふて歩んだ。併しその盡頭に達する前に立ち止まつて彼女は手づから低いドアを押し開けた。ネヴダーノフは狹い、殆どがらんどうの部屋を見た。『私達は此處に這入つた方がいゝんですよ、アレキセイ・ドミートリッチ、此處なら誰れも邪魔する人もないでせうから。』ネヴダーノフは從つた。マリアンナは蠟燭を窓闕の上に下ろしてネヴダーノフの方を振り向いた。

『貴方が私に會ひ度いと仰有る理由は私存じて居りますのよ』と彼女は口を切つた。『此家にお住ひなさるのは貴方には隨分おつらい事でせう。そしてそれは私にも矢つ張りさうなんですわ。』

『さうです。僕は貴方に會ひ度かつたんです、マリアンナ・ウイケンチエーウナ、』とネヴダーノフは應へた。『併し貴女と偶然知己になつてからは此處にゐるのも私には辛くはありません』

マリアンナは意味深けに微笑した。

『有難うよ、アレキセイ・ドミートリッチ。併しどうでせう、此の恐ろしい事件の後でもなほ此家においでにならうといふお氣がありまして？』

『あの人達が僕を此家に置いてくれようとは思はれません。暇を出すでせう！』

『御自身から暇をお貰ひになりませんの？』

『自分で？…否。』

『どうして？』

『それが知り度いんですか？　それは貴女が此處にゐらつしやるからです』

マリアンナはうなだれた。そして部屋の中へ前よりも少しばかり深く歩み入つた。

『それにまだ、』ネヴダーノフは續けた。『僕は此處にゐなくてはならない責任があるのです。貴女は何も御存じない——けれども僕は何もかも貴女にお話したいと思ひます。又御話すべ

き筈だと思ふのです』

彼はマリアンナの側へ歩み寄つてその手をとらへた。彼女はそれを振り離しもせずに、唯ぢつと彼の顔を見入つた。『聽いて下さい！』

と彼は急遽な力强い衝動を感じて叫んだ。

『僕の云ふ事を聽いて下さい！』

そして部屋には二三脚の椅子があるにも係らず腰掛けもしないで依然としてマリアンナの前に突立ち彼女の手を握つたまゝ、衝動的な亢奮と、自分ながら思ひもよらぬ能辯を以て、ネヅダーノフは彼の計畫や意向や彼がシブヤーギンの申込を受けた理由や彼自身の系累や知己や過去の事や彼が常に秘して誰れにも明らさまには語らなかつたさま〳〵の事迄も一切話した！　彼は自分が受取つた手紙の事、ワシリー・ニコラエーヰチのこと、その他のあらゆる事――シーリンのことまでも彼女に語つた！　彼は惜氣もなく又少しの躊躇もなく急き込んで話した。彼は一切の秘密を前以てマリアンナに打明けなかつたといふことで自らを責めてゃも居るやうであつた。そしてそれについて彼女の赦を求めてゃも居るやうであつた。彼女は熱心に貪るやうに彼の云ふ事を聽いてゐた。最初の間は彼女は當惑してゐた……けれど

もその感情は直ぐに消失せた。感謝、自負、歸依、決意、それらを以て彼女の心は滿ち溢れてゐた。彼女の顏と眼とは輝いてゐた。彼女は一方の手をネヅダーノフの手の上に置いて居た。そして唇はうつとりとなつて開いてゐた……彼女は見る間に驚くべき美しさを增して來た！

と、つひに彼は話を止めて、彼女をながめた。そして恰も初めて見るやうにその顏を見た。その顏は同時に彼に對して以前よりは非常になつかしくそして非常に親しく思はれた。彼は深い、長い溜息を洩らした……

『あゝ！　僕は何もかも貴女にお話して好い事をしました！』――彼の唇は此れ丈けの言葉を辛うじて發することが出來た。

『えゝ、まあ、ようこそ、ようこそね！』

と彼女も矢張り小聲で繰り返した。彼女は思はず知らず彼を眞似たのであつた。實際のところ彼女の聲が矢張彼女の思ふ通りにならなかつたのであつた。

『と申しますのはねえ、』かう彼女は續けた。『私は貴方の御心の儘になるといふ意味なんですの、私貴方のお仕事のお役に立ちたいと思ひますわ。必要な事なら何でも致しませうし命せられた處には何處へでも參らうと覺悟してゐますわ。私はいつも心を傾けて貴方の……その

事を慕つてゐたのですわ。』

彼女も默つた。今一言で感動の涙が溢れ落ちたであらう。彼女の强い天性の凡てが忽ち蠟の如く柔かくなつた。活動に對する渴望、犧牲、即座の犧牲に對する渴望――それが彼女を支配したところのものであつた。

人の足音が廊下に聞えた――忍びやかな、速い輕い足音だ。

マリアンナはつと身を反らし、手を放した。彼女は直ぐに樣子を變へて、警戒した。何となく輕蔑するやうな、何となく大膽な或るものが彼女の顏に現はれた。

『此の場合私達を探索してゐるのが誰れだか私には解つてゐます』と彼女は、一語一語はつきりと廊下まで響き渡るやうに聲高く言つた。『マダム、シブヤーギンが私達を探索してゐるのです…だけど私そんな事はちつともかまひません。』

足音は止んだ。

『それではどんな事を？』マリアンナはネヅダーノフの方を向き乍ら言つた。『どんな事を私致しませうか？　何んな風に御加勢しますの？　言つて下さい…直ぐ言つて下さい！　どんな事を致しませうか？』

『どんな事』とネヅダーノフは言つた。『僕は未だ知りません…僕はマルケーロフから一通の手紙を受取つたのです。』

『何時？　何時ですの？』

『今晩。僕は明日彼の男と一緒にソローミンに會ひに工場へ行かなくちやならないのです。』

『さうです…さうです…彼の人は立派な人です、マルケーロフは。あの人は本當の友人です。』

『僕のやうにですか？』

マリアンナはネヅダーノフの顏を眞正面にながめた。

『いゝえ…貴方の樣ではない』

『どう？…』

彼女は急に顏を背けた。

『あゝ！　貴方は私にとつてどんなものにおなりですか、又今の今私は何を感じてゐますか貴方はお分りにならないのでせう？…』

ネヅダーノフの胸は激しく鳴つた。思はず知らず俯向いてしまつた。彼を愛する此の少女

—彼哀れな無宿漢たる—彼を信じて身を任せた此の少女、彼に服從し、同じ目的に向つて彼と共に進むべく覺悟した此の少女—此のいぢらしい少女—マリアンナは、此の瞬間ネヴダーノフにとつて此世の善にして眞なるあらゆる物の權化—彼が未だ覺えたこともない母と姉妹と妻との凡ての愛の權化—祖國と幸福と奮鬪と自由の權化!—であつた。

彼は頭を擡げた、そして彼女の眼が再び自分に注がれてゐるのを見た・・・

あゝ、その清く貴い眼光がいかに彼の靈の中に浸み込んだであらう!

『それで、』と彼ははつきりしない聲が口を切つた。『僕は明日行かうとしてゐます・・・そして歸つて來たら、マリアンナ・ウイケンチエーウナ』——(彼はふと、此の形式的な呼名を用ひるのは妙だと思つた)——『僕は僕が發見したことや決定された事をお話しませう。今後とても僕のする事考へること、あらゆることは貴女に第一番にお知らせしませう・・・・マリアンナ。』

『あゝ我友!』とマリアンナは叫んだ。そして再び彼の手を握り締めた。『では私も同じ御約束を致しますわ、ね、あなた』

此の最後の言葉は何の苦もなく易く彼女の口を洩れた。他の言葉であつてはならぬやうに。

に、長い間の親密な交友の「あなた」でゝもあるやうに。

『手紙を拜見してもいゝんですか?』

『こゝにあります、こゝに』

マリアンナはその手紙をざつと讀み通した。そして殆ど恭しくと云つても好いやうな風に眼を上げて彼を仰ぎ見た。

『あの人達はこんな重大な任務を貴方にお任せするんですのね。アレキセイ?』

彼は返事の代りに彼女を見て微笑した。そして手紙をポケットの中に入れた。

『妙ですよ』と彼は言つた。『なぜと云つて、僕達は互に愛を知らし合つた——互に愛してゐる—それで居てお互の間にそれに就ての言葉は唯の一言も出さなかつたのですものね!』

『何の必要がありませう』とマリアンナが囁いた。と、突然彼女は彼の首に飛びついて、頭を彼の肩に押付けた・・・併し彼等は接吻さへもしなかつた—彼等はそれを平凡なそして稍恐るべきことゝ思つた—で、二人は互に兩手を再びしつかと握り締めてからすぐに別れた。

マリアンナは例の空いて居る室の窓闕の上に置いた蠟燭を取りに戻つた。そして其時に限つて當惑に似た或るものが彼女の心に起つた。彼女は蠟燭の火を消して、眞暗な廊下をする

すると足早に歩み乍ら自分の部屋へ戻つた。着物を脱ぎ眞暗なまゝの中で寢床へ這入つた―彼女は幾分氣が樂になつたやうに感じた。

十六

翌朝ネヅダーノフは目を覺まして、前夜の事を想ひ出しても少しのきまり惡さも感じなかつた。却て彼は遠い以前に實際爲なければならなかつた或事を今になつてやつと爲し遂げでもしたやうに一種の穩やかなそしてまじめな幸福を以て滿されて居た。シブヤーギンから二日間の暇を貰つてネヅダーノフはマルケーロフの家へ行つた。シブヤーギンは彼の外出をしぶ〳〵乍らも直ぐに許してくれた。出立する前にネヅダーノフは都合よくマリアンナと話をする事が出來た。彼女も矢張氣恥かしくも極り惡くも感じて居なかつた。彼女は落ちついたはき〳〵した樣子で彼を眺めた。そして平然たる態度で彼をクリスチャン、ネームで呼んだ。彼女は唯彼がマルケーロフの家で何事を聞くだらうといふ事に對して心を躍らして居た。そして何もかも話してくれるやうにと彼に賴んだ。

『そりや無論のことです、』とネヅダーノフが答へた。

『だが要するに、』と彼は考へた。『何故吾々は妨害されるのだらう？　吾々の交では個人的な感情は……第二位の役を演じて居た――それにも拘らず吾々は永久に結合してゐる。目的の名に於てか？　さうだ、目的の名に於てだ！』

かうネヅダーノフは思つた。併し彼は幾何の眞理が、そして幾何の虛僞が彼の想像に含まれてゐるかを疑つては見なかつた。

彼はマルケーロフが相變らず倦怠した、氣むづかいし心の狀態にあるのを見出した。彼等は兎も角も晩餐をすましてそれから例の古い馬車に乘つて（彼等は百姓から二番目の曳馬を雇つた。それは今迄決して馬具を付けられた事のない仔馬であつた―マルケーロフの馬は相變らず跛を引いてゐた）ファレイエフといふ商人の大きな製綿所へと出發した。そこにソローミンが居るのであつた。彼は好奇心を湧かした。彼は頃日色々と噂されて居た一人と密接な知己になることを熱望した。ソローミンは彼等の訪問を待ち設けてゐた。やがて二人の旅客は工場の門で止まつて彼等の名前を通じた。時を移さず彼等はその「機械監督」に占められた見窄らしい狹い小屋へ導かれた。彼はその建物の主翼に部屋を持つて居た。職工の一人が彼を連れにと走つて行つた間に、ネヅダーノフとマルケーロフとは窓際へ寄つて邊りを見

廻した。工場は一見隆盛な有樣で仕事が有り餘る位の狀態であつた。絶え間ない活動の活潑な騷々しい響、機械のじゆう〳〵いふ音やがた〳〵いふ音、織機のきい〳〵と軋る音、紡車のぶん〳〵と廻る音、革紐のばた〳〵いふ音などが四方八方から傳つて來た。又手押車や桶や荷物を積んだ車などが見えつ隱れつ動いてゐた。さま〴〵の事を指圖する高い喚き聲や鐘や汽笛の音が響いて來た。腰の周圍に帶を卷きつけた襯衣姿の職工や、革紐で髮の毛をぐるぐる束ねた印着の女工などが忙しげに通つて行く。馬具を附けられた馬が曳かれてゆく……其處に極度まで緊張した數千の人間の勞働から發する煩劇な噪音があつた。あらゆる事物が規則正しい合理的な遣方で全速力を以て運轉した。けれども其處には體裁又は綺麗といふことに對して何等の試みもしてないばかりか、いづこいかなるものにも清潔といふものゝ影だにも見られなかつた。寧ろ反對に至る處怠慢と不潔と汚穢の印象を起すものばかりであつた。此處に破れ窓があるかと思へば彼處では壁土が剝がれ板目が弛み、戸があんぐりと開いたままになつてゐる。虹色をした粘土の膜で覆はれた大きな黑い水溜が中央の廣庭の眞中にある。向ふには幾個かの取棄てられた煉瓦が轉がつてゐる。蓆や帆布の屑や、箱や、繩のちぎれなどが泥の中でのたくつてゐる。尨毛の痩せた犬が吠えもせずに其處いらをうろつき廻つて

ゐる。垣根の隅つこには太鼓腹をした髮の毛のむしやくしやした、頭から足まで汚物だらけの四つ位の小供が全世界から見棄てられでもしたやうに頼りなげに泣いてゐる。その傍には同じ汚物を浴びた一疋の牝豚が斑點のある仔豚等の敷藁の中でキャベツの莖をためつすがめつしてゐる。繦縷々々のリンネルが綱の上で靡つてゐる。そして到る處何といふ匂ひ、何といふ惡臭のある事だらう！　實際露西亞の機械場だ。獨逸のでも佛蘭西の工場でもない。ネヴダーノフはマルケーロフの方をちらりと眺めた。

『僕はこれまでソローミンの大した技倆に就て盛に語られたのを聞いてゐるが』と彼は口を切つた。

『どうも、ね、實を云ふと此の不整頓には寧ろ驚かされたのだ。夢にもこんなだとは思はなかつたよ』

『不整頓ではない、』とマルケーロフは恐ろしい顏をして答へた。『これが露西亞人のだらしないところなんだ。それにも拘らず此處は數百萬を繰廻してゐるのだ！　而も彼は舊い遣方に實際上の必要に、所有主その人に應じて行かなくちやならないのだ。ファレイエフが何ういふ人物だといふ事に就て君は多少の意見を有つてるだらう？

『少とも。』

『モスクワ第一の吝嗇者だよ。Bourgeois ―それが彼に適當した言葉だ！』

その瞬間にソローミンが部屋の中へ這入つて來た。ネヅダーノフは工場同樣彼に對して亦失望せざるを得なかつた。一目見たばかりではソローミンはフイン人かそれとも寧ろスウエーデン人の樣な印象を人に與へた。彼は丈高く、痩せて居て肩幅が廣く、眉も睫毛も薄かつた。彼は長くて黃ろい顏、低くて廣い鼻、頗る小さな靑ばんだ眼、穩やかな表情、大きな突出した唇、同じく大きな白い齒、ぼや〳〵した胎毛で覆はれた割れた腭を有つてゐた。彼は職人か火夫の樣な裝をしてゐた。身には囊のやうなポケットの附いた古い厚上衣を着込み、頭には皺くちやになつた油綿布の帽子を被り、頸には毛織物の頸卷を卷きつけ、それから足にはタールを塗つた長靴を穿いてゐた。彼は手ざわりの惡さうな農夫の上衣を着た四十位ゐの一人の男を從へてゐた。その男は異常に動き易い、無賴民の樣な顏容をし、鋭い眞黑な眼を有つてゐた。そしてその眼で直ぐにネヅダーノフの樣子を細かに調べ上げて、いきなり部屋の中へ這入つた……マルケーロフとは旣に知つてゐる間柄であつた。彼の名はバーウエルと言つた彼はソローミンの片腕であると言はれてゐた。

ソローミンはあわてずに二人の訪問客へ近寄つて、一言も發せずに硬い骨々した手で二人の手を握り締めた。彼は机の抽斗から一個の密封した小包を取り出し矢張り無言のまゝそれをバーウエルに手渡しした。とバーウエルは直ぐさま部屋を出て行つた。やがて彼は伸をし咳拂ひをした。そして頭から帽子を取るなり、それを投り出して置いて、ベンキで塗つた木のベンチに腰を下した。そしてマルケーロフとネヅダーノフとにも同樣な長椅子を指し乍ら言つた。『どうぞお掛けなさい。』

マルケーロフは先づソローミンをネヅダーノフに紹介し、再びネヅダーノフと握手をした。と、マルケーロフは『目的』に就て語り出した。そしてワシリー・ニコラエヰッチの手紙の事を言つた。ネヅダーノフはその手紙をソローミンに渡した。彼が一行一行眼を動かし乍ら細かく注意して讀んでゐる間、ネヅダーノフは彼を見守つた。ソローミンは窓の側に坐つてゐた。丁度傾きかゝつた太陽は日に焦けて少しく汗ばんだ彼の顏と薄い塵まみれの彼の髮毛との上にきら〳〵した光を投げてゐた。金色の筋が髮毛の上に浮き出て見えた。手紙を讀んでゐる間彼の鼻の穴は息が出たり入つたりする度に顫えてゐた。そして彼の唇は言葉を一つ一つ形づくりでもするやうに動いてゐた。彼は手紙を强く握り締め兩手で以て幾分高くそれを捧げ

てゐた。凡てかういふ風なことが理由は分らぬがネヴダーノフを喜ばした。やがてソローミンは手紙をネヴダーノフに返して微笑した。そして再びマルケーロフの言葉を聽きにかゝつた。マルケーロフは語りに語つた。がつひに彼は止めた。

『どうしませう、』とソローミンが口を開いた。そしてどちらかと云へば嗄れた、しかし若々しく力强いその聲が又してもネヴダーノフを喜ばした。『僕の處では全く都合が惡い。君の宅へ行きませう。五哩足らずですから。馬車で來られたのでせうね？』

『さうです。』

『結構……それぢや僕もお伴が出來ませう。一時間で僕の仕事が終へますから、その後は自由です。お話しませう。君も差閊へがないんですね？』——彼はネヴダーノフに言つた。

『明後日までは。』

『それや結構。夜は一緒にマルケーロフ君の宅に泊らう。いゝかね、セルゲイ・ミハーリッチ？』

『訊くまでもない！　勿論宜いとも。』

『ぢや、僕は直ぐに仕度しやう。ほんのもう一寸身裝をさつぱりさせれば好いんだから』

『だが工場はどんな調子に行つてるかね？』

とマルケーロフは意味ありげに訊ねた。

ソローミンは目を外らした。

『一緒に話すことゝしやう、』と彼は再び言つた。『一寸待つてくれ給へ……直ぐ戻つてくるから……どうも忌れたことがあるやうだ。』

彼は出て行つた。もしネヴダーノフの彼から受けた印象が感じの善くないものでゞもあつたとしたら、ネヴダーノフは恐らくかう心にも思ひ、マルケーロフにも言はずにはゐられなかつたであらう。『彼の男はごまかすんぢやないか？』と。併しながら斯ういつた問題はてんで思ひも浮ばなかつたのだ。

一時間の後、丁度宏大な建物の部屋々々から、あらゆる階段の上に、そしてあらゆる入口に、職工の喧ましい群衆が雪崩を打つて吐き出される時、マルケーロフとネヴダーノフとソローミンとが乘つた一臺の馬車は門から往來へと驅けり出た。

『ワシリイ・フエドティッチ！　あれはやるんですか？』門までソローミンを送つて來たバーウエルが背後から叫んだ。

『否、少し待て、』……ソローミンが答へた。そして『夜業のことを言つてるのだ』と彼は仲間に説明した。

彼等はボルジオンコーウオに着いた。そしてどちらかと云へば形式的に夕食をしたゝめた。それから卷煙草に火が點せられ談話が始められた。それは果てしのない、夜の更けるのも知らぬ露西亞人の談話の一つであつた。かう云ふ同じ形の同じ調子の談話は餘處の國の人の間には滅多に見られない。とは云へこゝで又ソローミンはネヅダーノフの期待を滿たさなかつた。彼は際立つて寡言であつた……彼は殆ど始終默つてゐたと言はれ得る位寡言であつた。併し彼は注意して耳を傾けた。そして時に彼は批評又は註釋など入れる事があると、それは察しの好い重みのあるそして頗る簡勁なものであつた。革命が露西亞に於て手近に迫つてゐるのをソローミンの信じてゐないといふ事が分つた。併し乍ら彼の意見を他に強ふるといふこともせずに彼は彼等の計畫を企てるのを止めやうともしなかつた。

そして遠方からではなく彼等の傍で仲間として彼等をながめて居た。彼はペテルブルグの革命家と至極親密であつた。そして幾分の同情をも彼等に寄せてゐた。彼も自身その人々等の一人であつたからである。けれども彼は此の人々の運動に對しては本能的に冷淡な態度を

採つてゐた。その人々なしには『君等は何事も成すことが出來ない、而も尙その人々は永い準備を要する、そしてそれはその人々の態度に於てゞもなく又その人々の手段によつてゞもないのだ。かう云ふ考から彼は僞善的にでもなく、又變心的にでもない態度で、徒らに自分自身及び他人を滅ぼすまいとする分別ある人のやうに人々の傍に差控へて居た。

併しながら傾聽することだけは……傾聽しないといふ理由はない、寧ろ出來得べくんば知らうとまでせずに居られぬのが人間である。

ソローミンは補祭の子に過ぎなかつた。彼には五人の姉妹があつて皆村の僧侶或は補祭に嫁して居た。併し彼は、確乎した、眞面目な父の承諾を得て神學校を退き數學を學び初めた。そして特別な熱心を以て機械學に心を傾注した。彼は、ある英人の事業に加つた。その英人は父親のやうに彼を愛するやうになつた、そして彼にマンチエスターに行く傳手を與へてくれた。其處で彼は二年間を暮し英語を學んだ。彼がモスクワの商人の工場に這入つたのは近頃のことである。そして彼は英國で學んだやり方で部下の者に對しては何事にかけても几帳面である事を主としては居たが、それにも拘らずひどく慕はれてゐた。

『あれは吾々の仲間だ』と彼等はいつも言つてゐた。彼の父親も至極滿足してゐた。父は彼

のことをいつも『非常に確乎した奴だ』と言つて居た。が、その子が結婚しやうとしないのを唯一つの不滿としてゐた。

マルケーロフ邸に於ける眞夜中の會話の間ソローミンは前にも言つた通り、殆ど沈默してゐた。併しマルケーロフが職工に對する彼の期待に論じ及ぶと、ソローミンは例の如く簡潔に露西亞に、吾々と一緒にゐる職工は外國にゐるのとは違ふ——彼等は最も溫順な部類に屬する人間であるといふ事を陳べ立てた。

『それでは百姓は？』とマルケーロフが訊ねた。

『百姓？　目下彼等の中には吝嗇な金貸のやうな奴が可成り澤山ゐる。これからも年々增えて行くだらう。併し彼等は唯自分達の利益ばかりしか知らないのだ。その餘の者は氣弱で盲目で無學だ。』

『それぢや何處に吾々は求めるのだね？』

ソローミンは微笑した。

『搜し給へ。そしたらやがて見付かるだらう。』

彼は殆ど絕えず微笑してゐた。そしてその微笑に、彼自身の人となりのやうに非常に無邪

氣なものであつた。が、無意味なものではなかつた。ネヅダーノフに對しては彼は全く特殊な態度を採つてゐた。此の若い學生の心にはある一種の興味、殆ど優しみの情とも云ふべきものがめざめて居たのだ。

此の同じ眞夜中の談論中ネヅダーノフははからずもかつとなして、怒號り出した。ソローミンは靜かに起ち上つて、大股に歩いて部屋を橫ぎりネヅダーノフの頭の背後に開け放しになつてゐた窓を閉めた……。

『風邪を引いてはいけない、』と彼は辯者の當惑したやうな顏容に答へるつもりで卒直に言つた。

ネヅダーノフは彼が何ういふ風な社會主義的思想を彼の監督する工場に導き入れやうとしてゐるか、又どういふ風に勞働者に利益の配當を得せしめるやうに爲やうと企てたかと云ふ事に就いて訊ね初めた。

『ねえ、君、』とソローミンは應へた。

『吾々は一個の學校と一個の小さな病院とを建てた。が、必然吾々の所有主はそれに對して熊のやうに藻掻いたに違ひないのだよ！』

唯一度ソローミンは本氣に激昂して、力强い拳を以て卓を擊つたのでその上にあつたあらゆる品物が、インキ壺の側に横つてゐる四十封度の分銅までがたがたと震えたくらゐであつた。彼は勞働者組合の、ある法規上の不正、壓制的な待遇……に就て豫て聞き及んでゐたのであつた。

ネヅダーノフとマルケーロフとが如何に『行動すべきか』『如何に彼等の計畫を實行すべきか』に就て論じ初めた時もソローミンは矢張り好奇心を以て、敬意を表しさへして傾聽してゐた。けれども、彼自身は唯の一語も發しなかつた。此の會話は四時まで續いた。彼等は何うしても論じないでは居られなかつたのだ！　マルケーロフは他の事に交えてかの不撓不屈の旅人キスリヤーコフの事、益々面白くなつて來たその手紙の事を密かにほのめかした。彼はネヅダーノフにその手紙中の幾つかを見せるといふ事、手紙は非常に長くて讀み易いといふ方の字でもないから家に持つて行つてもいゝと云ふ事を約束した。處がそれどころの話ではなくその手紙の中には非常な博識の程が覗はれた。それには詩もあつた。つまらない事ばかりではなくて、立派な社會主義的傾向を帶びてゐるものであつた！　マルケーロフはキスリヤーコフから軍人の事、副官の事、獨逸人の事に話し及んだ。果ては彼の砲兵論に迄言及んだ。

ネヅダーノフはハイネとビョルネとの間の葛藤に就いて、ブルードホンに就て、藝術上の寫實主義に就いて語つた。ソローミンが矢張り微笑しながら氣の利いた語一つ言ふでもなく、傾聽して、傾聽してそして、默考してそして煙草を吸ふてゐる間、彼は事の根柢に横たはるものをば誰よりもよく了解したとでもいつたやうな樣子をしてゐた。

四時を打つた……ネヅダーノフとマルケーロフとは疲れて殆ど滅入り込みさうになつた。が、ソローミンだけは平然自若として ゐた。友達は別れた。その前に彼等は傳導事業の事で商人ゴリユーシキンに面會しに明日町へ行くといふ約束を交はした。ゴリユーシキンその人は極めて熱心な男で而も其の上改宗を望んで居たのだ！　ソローミンは、ゴリユーシキンに態々面會する價値があるかどうかといふ疑を發した。けれども彼は後でそれだけの事をする價値があるといふ事に同意した。

十七

使者が彼の妹のシブヤーギン夫人からの手紙を持つて來た時には、マルケーロフの家の客は未だ眠つてゐた。手紙はワレンチーナ・ミハーロウナからこまゝ〳〵した家庭の出來事を色

色と書き並べてよこしたものであつた。彼の借りて來て居る書籍を返してくれとも書いてあつた――そして不圖思ひ付いたやうな體で添書にして新事件の「面白い」一片が書いてあつた。それは、彼の以前の戀人であつたマリアンナが家庭教師のネヅダーノフを戀してゐる――そして家庭教師の方もマリアンナを戀してゐると云ふ事についてゞあつた。ワレンチーナ・ミハーロウナは自分が何も冗談にこんな事を繰返してゐるのではない――自分は現に自分自身の眼でそれを見、自分自身の耳でそれを聞いたのだと、そんな事も書いてあつた。マルケーロフの顏は夜のやうに暗くなつた……けれども彼は一言も發しなかつた。彼は使者へ書籍を渡してやるようにと云ひ付けた。そしてネヅダーノフが階段を降りて來るのを見ていつもと少しも變らずに『お早う』と言つた――約束して置いたキスリャーコフの信書の包を渡しさへした。尤も彼はネヅダーノフと一緒に立ち止まつて居るやうな事はしないで、『種々な事の見廻りに』とて出て行つた。ネヅダーノフは自分の部屋へ戻つて、例の手紙に目を通した。その若い傳導者は彼れ自身に就て、又彼の狂熱的活動に就て頻りに語つてゐた。彼自らの叙述に依れば彼は先月中に十一箇所の地方を經廻り、九つの町と二十九の村と五十三の小村と一つの農場とそして八つの工場とを見舞つた。十六夜といふもの彼は乾草置場の中で明

かした。厩の中や、牛小舍で夜を明かした事もあつた（彼は括弧して、蚤には冒されなかつたと記してゐる。）彼は泥小舍の中へも這入り勞働者の堀立小屋の中へも這入つた。至る處で彼は話をしたり、說敎をしたり、小冊子を配布したりした。そして途々報告を集めた。或る事實は即座に書き留め、又或る事實は最新式の記憶術を以て覺え込んだ。彼は十四通の長い手紙と二十七通の短い手紙とそして十八通の覺書とを書いた。そしてその四つは鉛筆で一つは血で、一つは煤と水とで書いた。そして彼が凡て斯ういふ事をした理由は時代の規律正しい氣風を體得してゐたからである。クキンチン・ジョンソンやカーレリアスやスウエルリッキーやその他の文筆の士乃至統計家に倣つたからである。次に彼は再び彼自身に就て、彼の幸福な運勢に就て語つてゐた。そして如何にして又如何なるものをつけ加へて自分がフーリエーの熱情說を完成したかを彼は語つてゐた。

彼は自分が『床岩』に達した第一人者であると云ふ事、『痕跡を殘さずしては世を去らない』人間であると云ふ事、二十三才の少年にして既に人生と科學の凡ての問題とを解決したことを自分ながら驚いてゐるといふ事、更に自分は露西亞を顚倒せしめる人間であるといふ事、『露西亞を震撼せしめる！』といふこと、等を揚言してゐた。Dixi !! と彼は行の終りに附

け加へた。此のDixiといふ言葉は屢々キスリヤーコフの文句に現はれるもので、常に二個の感嘆符を伴ふてゐた。手紙の一つに社會主義風の詩が一つ書いてあつた。一人の少女に話し掛けた體になつてゐて、次の樣な言葉で始まつてゐる。

『余を愛する勿れ、思想を愛せよ！』

ネヅダーノフは內心驚いた。キスリヤーコフ君の自慢に驚いたといふのではなく寧ろマルケーロフの正直な單純さに驚いたのである……併し彼は引きつゞいて考へた。『贅澤は眞平だ！　キスリヤーコフ君だつて何かの役に立つこともあらう』

三人の友達は皆朝茶を飲みに食堂へ集つた。併し前夜の議論はもう彼等の間に繰返されなかつた。一人も談じたいといふ意を持つて居なかつたが、ソローミンだけは平然として沈默してゐた。ネヅダーノフとマルケーロフの二人はたゞならぬ心持でゐた。

茶が濟んで彼等は町へと出かけた。マルケーロフの老僕は扉棚に腰掛けながら例の氣落ちした眼で彼の舊主人を見送つた。

ネヅダーノフが知己にならうといふ商人ゴリユーシキンといふのは富裕な藥種問屋——フエードシア宗派の舊い信者——の子であつた。

彼は自分の力で親の財產を增やしはしなかつた。それは彼が露西亞人の謂はゆるjouer（遊人）、露西亞型のエピキユーリアンで、隨て商賣をする柄ではなかつたからである。彼はどちらかと云へば頑丈な四十男で顏は痘痕があつて醜く、小さな豚のやうな眼付をしてゐた。彼は非常な早口で、まるで自分の言葉に躓くやうにして語るのであつた。手で身振りをしたり、足をぶら〳〵させたり、かと思ふと突然くす〳〵笑ひ出したり……總じて阿呆で非常に虛榮心の强い飾し家といつた印象を人に與へた。彼は自ら開化した人間だと思つてゐた。

それは彼は獨逸製の衣服を着て居るし、愛想は好いし、ごみ〳〵したどさくさの中に住んで居ながらも金滿家に知己はあるし、劇場には常に出入するし、下等な寄席の女優をば「保護して」やるし、又それ等と無類な自分免許の寢言のやうな佛蘭西語で話をするし、といふ處からであつた。人氣を取らうといふ渴望が彼の一番の煩惱であつた。世界を通じてゴリユーシキンの名を轟かしたい！　嘗てはスワロフ將軍やポーテムキン將軍がそれをした、何で今カビトン・ゴリユーシキンがし得ない事があらう？　陋劣な天性にさへ打ち勝つて、彼の獨りよがりの云ひ草のやうに彼をして在野黨（彼は最初此の外國語を單にポジションと發音したが後でよく覺へ込んだのである）に投ぜしめ又虛無黨との聯絡に引入れしめたのは正に此の慾

情があつたからに外ならぬのだ。彼は最も極端な意見をも自由に口走り、彼自身の舊弊信者の信仰を笑ひ、四旬齋に肉を食べ、骨牌を弄び三鞭酒を水のやうに飲んだ。が彼は決して紛議を醸さなかつた。それは彼が常に言つてゐる通り、『俺は何處でも必要な場合には、あらゆる權威を買收することが出來る、あらゆる穴ぱ縫付けられる、凡ての口は閉される、凡ての耳は塞がれる。』その爲めであつた。彼は鰥夫で、子がなかつた。彼の妹の子供等がびく〳〵した卑しさで彼の周圍に付き纏ふた……けれども彼はいつも彼等のことを未開な田舍者や野蠻人扱ひして容易に目もくれなかつた。彼はどちらかと云へばだらしなく打棄り放しにされた大きな石造の家に住んでゐた。或る部屋の諸道具は皆外國製のものばかりであつた——又他の部屋にはペンキ塗の椅子が數脚とアメリカ革の長椅子が一脚よりなかつた。繪畫は至る處に懸けてあつたが、その凡てが——眞赤な色をした山水とか石竹色の海の景色とか、モーレルの「接吻」とか、さては赤い膝や肘を持つた肥えた裸體美人とかいふやうな——無殘な塗り畫きのものばかりであつた。ゴリユーシキンは家族は有たないが、非常に澤山な家僕や種々な種類の從者を家に置いてゐた。それも寛仁な心から彼等を置いたのでなく、矢張り權力に對する慾望から置いたのであつた　或る種の衆庶を彼が命令の下に置いて彼等の前で見えを張り

たい爲めであつた。『吾が家來、彼は誇り度い氣分でゐる時には、彼等のことをいつもかう呼ぶのであつた。彼は決して書物を讀んだことがなかつたが、併し學問上の言葉に對してはすばらしい記憶力を有つてゐた。

例の若い人達は書齋の中でゴリユーシキンを見出した。長い上衣を着け卷煙草を口にしながら彼は新聞を讀むやうな風をしてゐた　彼等を見ると彼は直ぐに飛び上つて無闇に騷ぎ立てた。賑くなつたり、飲食物を直ぐに持つて來いと喚いたり、問題を訊ねたり、笑つたり——何もかも一緒くたにして騷ぎ立てた。マルケーロフとソローミンをば彼は知つてゐた。ネヅダーノフとは初對面であつた。彼の學生であるといふことを聞いてゴリユーシキンは、又笑つた。そして再び彼の手を握つた。そして言つた。『結構！　結構！　吾々の同勢が增えてくる……學識は明るいが無學は暗い。私は學問といふものは少しもないが、それでも眼識は有つてゐる——それが私が成効した理由ですよ！』

ネヅダーノフはゴリユーシキンを神經質で落着かぬ男だと心に思つた——實際その通りであつた。『氣をつけろ、兄弟カピトフ！　泥の中にこけ落ちない樣に氣をつけろ！』これが誰れであつても彼が初めて遇つた人に對して起す最初の考へであつた。けれども直ぐに彼は

吾れに歸つた。そして同じせか〳〵した、舌の廻らぬ、しどろもどろな言葉で、ワシリー・ニコラエウイチに就て、彼の性格に就て、傳導會（彼は此の言葉を餘程甘く覺えてゐたが併しゆつくりと一音々々はつきり發音した）の必要に就て語り出した。更に彼れ、ゴリユーシキンは最も信頼するに足る一人の立派な新補充兵を見つけ出した時の事に就て語り、今や時機は迫つてゐるといふ事、準備……刄針の準備は出來てゐるらしいといふ事に就て語り出した（刄針といふ處で彼はマルケーロフをちらりと眺めた、がマルケーロフはびくともしなかつた。それからネヅダーノフの方へ向き直つて、彼は偉大な通信者キスリヤーコフその人にも劣らぬ妙味を以てお手前譽めをやり出した。彼は自分が愚昧者の階級をば久しい前から見棄てゝゐるといふこと、下等社會（此の言葉も彼は確かり覺えてゐた）の權力をよく知つてゐるといふこと、資金を殖やす爲めに商賣を放棄して銀行業を初めたのは事實だが、それは唯だ前述の資金をば共同運動の幸福を助けんが爲め、いつ何時なりともそれを準備して置けるやうにしたい爲めばかりであるといふ事、そして彼れゴリユーシキンは實際に金錢に對して此の上ない侮蔑の念を持つてゐる！　といふ事を語つた。此時下僕が一寸した飲物の支度をして這入つて來た。そこでゴリユーシキンは勿體ぶつた咳拂を一

つして、何か一杯おやりなさいとすゝめた。そして自分に先づベッバーブランデーを一杯ぐつと呑み乾した。

客も相伴した。ゴリユーシキンは醃鰯の大きな數片を口の中に詰め込んだ。そして鯱張つた樣子で酒を飲みながら『さア、皆樣、上等のマソンを一杯さア』と言つた。

彼は更にネヅダーノフに對して、何處から來たか、そして何處にどの位滯在してゐたかなどと訊ねた。そして彼がシブヂャーギンの家にゐると聞いて叫んだ。『私はその紳士を知つてゐる。よろしくない！』それからS……州の地主は凡て公共心を有たぬのみならず彼等自身の利益を了解することすら出來ないといふ事を論據として彼等を罵倒し初めた。唯、奇妙なことには、彼の言葉は强かつたに拘らず、その眼が少しも落着かずにきよろ〳〵してゐた、不安の色がその中に見出されたのであつた。彼は果して何ういふ人物であるか、又彼はどういふ風に彼等の役に立つのか、その事がネヅダーノフには、さつぱり解らなかつた。ソローミンは相變らず默つて居た。そしてマルケーロフはネヅダーノフがとう〳〵、何處か具合が惡いのかと訊ねた程に頗る陰氣な顏をして居た。それに對してマルケーロフは何處も具合の惡い事はないと答へた。それは普通人々が、何物かゞあるけれどもそれは君の知る限りでないとい

ふ事を解らせやうとする時答へるやうな調子であつた。ゴリユーシキンは又しても誰彼となく罵倒し初めた。が、やがて言葉を轉じて時代の若い人達を讃め出した。『さう云ふ才能のある連中が彼は揚言した。『目下私達の中に現はれつゝあるのだ！　さう云ふ才能のある！　あ……』

ソローミンは彼が語つたかの信頼するに足るといふ青年は何人か、そして何處から彼を掘り出して來たかといふ質問を以て彼の言葉を遮つた。ゴリユーシキンはくす〳〵と忍び笑をして、『あ、今にわかります、今にわかります、』と二度繰返して言つた。そしてソローミンの工場に就てその所有主たる「惡漢」に就て、根掘り葉掘り訊き初めた。それに對してソローミンは然りとか否とかいふ一綴りの言葉で受け答へした。やがてゴリユーシキンは皆にシャンペンを差してやつた。そして體を屈めて口をネヅダーノフの耳の處へ持つて行つて囁いた。

『共和政治の爲めに！』そして唯一息に呑み乾した。ネヅダーノフはチビチビと啜つた。ソローミンは朝酒は飲まないと云つた。マルケーロフは腹立たしげに思ひ切つて、盃の最後の餘瀝まで呑み乾してしまつた。彼は癇癪の蟲に食ひ込まれてゐも居るやうであつた。『此處で僕等は時間を浪費してゐる』彼はかう云ひさうに見えた。『而も論議すべき眞の事柄には到達

しないで』……彼は卓に一擊を與へて嚴乎として叫んだ。『諸君！』そして今にも何か語り出さうとした……。

併し此の瞬間、狐のやうな顏容をして肺病患者のやうな樣子をしたおべんちやら者らしい一人の男が、身には南京木綿の商人服を着け兩手を翼のやうに擴げて部屋へ入つて來た。一同に對して腰を屈めながら彼はゴリユーシキンに小聲で何事かを傳へた。『直ぐに行く』

とゴリユーシキンは性急に答へた。『皆さん』と彼は附け加へた、『私は皆さんのお許を願はねばなりませぬ……此のワシヤが、私の番頭がほんのちいちやい事件を持ち込んで來ましたので、』（ゴリユーシキンは小さいを故意と滑稽のつもりでかう發音したのだ）『それが爲めどうしてもかうしても一寸の間中座致さねばなりません。が併し、お願ひです、皆さん、今日三時には御一緒に御飯を食つて下さいませんか。それから私達はずつと自由になりませうで！』

ソローミンもネヅダーノフも何う返事して宜いか分らなかつた。がマルケーロフは顏にも聲にも同じ嚴酷さを表はしながら直ぐに答へた。『勿論　御馳走になりませう。遠慮したら却つて滑稽千萬でせうから。』

『大きに有難う存じます』とゴリューシキンは口早に言つた。そしてマルケーロフの方を向いて言ひ足した。『一千ルーブルは何んな場合でも目的の爲めに捧げます……御疑念には及びません！』

斯う云ひ乍ら彼は誠意の標として母指と小指とを突き出しながら右の手を三度振つた。

彼は入口まで客を送つて行つて戸口に立ちながら呼ばはつた。『三時にお待ちして居ります！』

『待つてゐて下さい！』とマルケーロフだけが應へた。

『ねえ諸君』とソローミンは三人共往來へ出るや否や云つた。僕は馬車に乘つて工場に歸らうと思ふ。食事まで何をするのかね？　何もしないで時間を空費するのかね？　それに實際わが有爲な商人は……僕には思はれるのだ……毛を取るにも乳を搾るにも適しないと云ふ昔話の中の山羊の樣な奴だからね』

『まあ多少の毛は取れるだらうよ』とマルケーロフは荒々しく言つた。『唯た今若干の金を約束して居つたぢやないか。それとも彼の男は君には餘り快くないと云ふのかね？　吾々は毛嫌ひしてはいけない。吾々はむか〳〵する程機嫌をとられて居るのでもないからね』

『僕は胸くそが惡いんぢやないよ！』とソローミンは穩かに言つた。『僕は唯自分が出席して何か役に立つ事があるかどうかと一人で問ふて見てゐるのだ。』彼はネヅダーノフの顏をチラッと見て微笑しながら言ひ足した。『居殘らう、是非とも。諺の通り善良な仲間と一緒なら死ぬことでも快いものだからね』

マルケーロフは頭を擡げた。

『その間公園へ行かう。氣持の好い天氣だ。民衆を眺める事が出來るんだ。』

『大によからう。』

彼等は歩いた。マルケーロフとソローミンとは前に、ネヅダーノフは二人の後から。

十八

不思議なのは彼の心の狀態であつた。最近二日の間に斯くも多くの新らしい感じと、かくも多くの新らしい顏に彼は接した。……生れて始めて彼は一人の少女に接近し、その人を彼は紛ふ方なく戀した。かの事の發端に參加し、その事に紛ふ方なく彼の全精力を捧げた……さて、彼は喜んでゐたか？　さうではない。では彼はぐづ〳〵したり、物怖ぢしたり當惑したり

してゐたか？　いや、慥かにさうではない。では少くとも彼は、奮闘が近づいた時に期待さるべき全生命の緊張、戰闘線の前列に促進させるやうな衝動を感じつゝあつたか？　さうでもない。では彼はその主義を信じたか？　彼自身の戀を信じたか？『あゝ呪ふべき藝術的氣質！　懷疑！』と彼の唇は聽取れぬ程の小聲で言つた。絶叫することも熱狂することもなく物言ふにさへこの倦怠を、この嫌厭を覺えるとは何うしたことか？　さう云つた狂熱を以て彼を塞息せしめやうとするその内心の聲は一體何ういふものなのか？。それはさうとしてマリアンナ、あの高尚な忠實な心の友、あの純潔な情の深い天性、あの人並すぐれた少女、あの女は彼を戀しなかつたか？　彼女と會ひ、彼女の親交と戀とを獲たことは無限の幸福ではなかつたか？　更に今も今彼の前に歩いて居る此の二人、まだそれほど深く知らないが、それで居て強く引寄せられるやうに感じて居る此のマルケーロフ、此のソローミン、彼等は露西亞氣質露西亞生活の立派な典型ではないか、隨て亦彼等と知り彼等と友人になるのは矢張幸福ではないか？それならば此の定かならぬぼんやりした心の底に喰ひ入るやうな氣持は何の爲めか？　何うした又何故の喪心なのか？『若しお前がくよ〳〵物事を思ひ煩ふ厭世家であるなら、』彼の唇が再び囁いた。『とんだ忌はしい立派な革命家をお前は造るだらう！　お前は詩を

作つたり、澁面を作つたり、お前自身の瑣々たる思想やあらゆる種類の煩瑣な事に專心沒頭して居なくてはならない。けれども少くともお前の病的な神經質な移氣や短氣を男性的な憤怒信念のある人の忠實な怒と取り違へてはならないぞ！　おゝハムレット、ハムレット、如何して御身の靈魂の陰影から逃れよう！　何事に於ても——自分自らを卑下する厭はしい享樂に於てさへ　御身の後塵を拜まうとする此の心を如何して止めよう！』

『アレキセイ！　おい君！　露西亞のハムレット！』彼は突然、自分の冥想の反響でゝもあるやうに、聞き覺えのあるきい〳〵聲で斯う誰やらが叫ぶのを聞いた。『僕の前に見えるのは君かね？』

ネヴダーノフは眼を上げた。そして喫驚しながらバークリンを見た！——全くの田舍風を裝ふて、身には肉色の夏衣を着、頸の廻りには襟飾もつけないで綠色のリボンを附けた大きな麥藁帽子を頭の後に押しやり、そしてワニス塗の短靴を穿いたバークリンを見たのだ！

彼は直ぐにネヴダーノフの側へ跪を曳き乍らやつて來て彼の手を握り緊めた。

『何よりも先づ、』と彼は初めた。『公園の中ではあるが、僕は昔からの通りに、君に抱きついて……接吻しなくちやならぬ……一度、二度、三度！　それから君は、僕が今日此處で君に會は

なかつたにした處で、明日は確かに會つたに違ひなかつたといふ事を承知して貰ひたい。僕は君の寓所を知つて居たし、それに實はあの事で此の町に來てゐるんだからね……まあ兎に角僕が此處に來た理由は後程語す事にしやう。それから僕は君の連れの人達に紹介して貰ひたいもんだ。此の人達がどんな人達だといふ事を簡單に話して呉れ給へ。そして僕の事も此の人達にね。お互の樂しみはそれからにしやう！』

ネヅダーノフは友達の要求に從つて、マルケーロフとソローミンの名を彼に告げ、更に二人の職業や、住所や、自分の爲した事等について話した。

『素敵！』とバークリンが叫んだ。『ところで私は皆さんを此の狂はしい群衆から遠ざかつた——と云つてさう大した群衆でもないが、——兎に角私の冥想の時に坐るある奥まつた腰掛へ御案内しませう。自然の美を樂しみにね。其處の眺めと來たら驚くべきもんです。總督の家、二つの棒縞塗りの張番所、三人の警吏、それから一疋ならぬ犬！　だが私がこんなに根氣よく諸君を喜ばしてあげやうとして云つて居る言葉に餘り驚いてはいけません せ！　私は、友達仲間からはロシア人の智機の代表者だと云はれてる男なんですからね……それが又疑もなく私の跛たる所以なんでしてね。』

バークリンは友達をその『奥まつた腰掛』へと案内した。そして先づ手初めとして二人の乞食女を逐つ拂つて、彼等をそこへ坐らせた。若い人達は『思想の交換』をやり初めた。そのやり方は大抵の場合どちらかと云へば冗長に失する嫌ひがあつた。別ても始めての會合に於てさうであつた。何時も特別な無駄な仕事であつた。

『待つた！』とバークリンはネヅダーノフの方を向きながら急に叫んだ。『僕は如何して自分が此處へ來たかといふ事を君に説明して置かなくちやならん。君も知つてる通り僕は夏になるといつでも妹を連れて何處かへ出かけるのだ。君が此の町の近處へやつて來たと知つた時に僕は實に此の町に二人の驚くべき人物——僕達の母方の縁者に當る夫婦者の住んでゐるといふ事を思ひ出したのだ。僕の父親は小商人だつたがね』——（ネヅダーノフは其事を知つてゐた。併しバークリンは他の二人の爲めにそれを説明したのだ）——『母親は貴族の出だ。ところでその夫婦が僕達に會ひに來いと毎年のやうに言つてよこしたと云ふもんさ！　其れでだ！　僕は思ひ出したんだね……その事をさ。彼等は最も親切な人達だ。妹のためにはどんなにもして貰へるわけさ。これ位善い事があるもんかね。そこで僕達はやつて來たといふもんだ。處が實際僕の思つた通りさ！　云つて見やうのないほど好いんだ！　だが君どんな人間

達だと思ふ！　どんな人間達だと思ふつてことさ！　全く君も知合になつて見るべき必要があるよ！　一體君は此處で何をしてゐるんだね？　何處で御飯を食べるつもりなんだ？　何うして又君は凡ての場處の中から特に此處を選んで來たんだい？』

『僕達はゴリユーシキンといふ男……此處の商人と食事をすることになつて居るんだ』

とネヅダーノフが答へた。

『何時に？』

『三時。』

『君がその人と會はうと云ふのは……その……その……』バークリンは仔細ありげな眼光をソローミンとマルケーロフに向けた。ソローミンは微笑してゐた。がマルケーロフの顏は益益陰鬱になつた……

『さア、アリヨーシャ、此の人達に言つてくれ給へ……共濟組合の暗號とでもいつた樣なものでも使つて……やつてくれ……僕を警戒する必要はないといふことを告げてくれ給へ……僕は君達の一人だ……君達の仲間の……』

『ゴリユーシキンも矢張り吾々の一人だ、』とネヅダーノフが言つた。

『ところでだ、僕は素敵な考を有つてゐるんだ！　三時迄は未だ隨分と間がある。どうたこれから行つて僕のその緣者を訪ねることゝしやうぢやないか！』

『まあ、君はどうかしてるね！　何うして僕達にそんな事が……』

『いやその事に氣を揉まなくつたつて好いぢやないか！　皆僕が引受ける。まあね、そりや正に一個のオアシスなんだ！　政治學などの影もさしてゐなければ、文學の影もない。近代的と名のつくものは何一つ浸入してはゐない。妙に不格好な風の、今時何處にだつて？　見る事の出來ないやうな小舍だ。匂そのものまでが古代的だ。人間も古代的なら空氣も古代的……如何見たつて何もかも古代的なものばかり、カセリン二世髮粉、箍骨、十八世紀！　まあ一寸想像しても見給へ、いづれも同じ高齡の、しかも皺一つない夫婦者をさ。丸つこく肥つた、しやれものゝ小ちやい人達をさ。申分のない小さい鶏鵡の夫婦だ。それで又賢愚の別なく誰に對しても同じこと優しい。際限なくやさしいのだ！　それで居て僕に向つて言はくさ、『際限のない優しさは時としては道德的感情の缺亡に伴ふ』ものだとさ……が併し僕は唯だ吾々の小さい老人達は優しさの精神そのものであるといふ事を知つてゐるだけだ！　子供を有つた事がない。幸福な罪のない人達だ！　町では彼等の事を幸福な罪のない人達だと言つてゐ

る。二人とも一樣に竪縞の寬衣のやうなものを着てゐる。それが又頗る地の善い織物だ。今時さういつたものは迚も見る事が出來ない。二人は恐ろしく似通つて居る。唯だ細君の方は頭にモップ、キャップを被つてゐるが夫の方はスカル、キャップを被つてゐる。それも矢張りモップ、キャップのやうに一種の緣飾りがしてあるが唯だ後者には紐がない。その區別がなかつたら、てんで何方が何方だか見分けがつかぬだらう。夫の方に髯がないから尙更さうだ。名前はフオミシユカにフイミユシユカだ。見せ物にしたら確かに木戸錢を拂ふべきだと思ふね。二人は並外れた愛し方で愛し合つて居る。それであり乍ら誰でも訪ねる人があると、それこそ『嬉しいこと、宜うこそ！』だ。おまけに愛想の好い事と來たら素敵だ！　彼等は君達を樂します爲めにあらゆる、ごたいさうもない技巧をさらけ出すに違ひない。唯だ一つの要件がある。それは煙草を飲んではならぬ事だ。といふのは彼等が禁煙黨だからといふのではなく煙草の爲めに彼等は逆上してしまうからだ……ねえ、彼等の時代には誰れも煙草を飲まなかつたんだからね。それに又彼等は二人とも金絲雀に我慢がならんのだ。何故と云ふにその鳥も矢張り彼等の時代には殆ど居なかつたからね……何しろ大きな功德だ。好いだらう！　如何だ？　行くかね？』

『實際、僕には分らない』とネヅダーノフが言つた。

『待つた、僕は未だ言ひ盡さなかつた。その二人の聲はすつかり同じだ。君が眼を閉ぢて聽いたら何方が物言つてるか分るまい。たゞフオミシユカの方がほんの少しばかり話が判然して居る。さア諸君、君等は將に大事件に取りかゝらんとしてゐられる——恐らく大變な爭鬪でせう……何故諸君はその荒ぶる大海に身を投じられる前に、一寸でも水に漬つて見ないんですか……』

『溜り水にですか』とマルケーロフが口を入れた。

『若しさうだとした處で何でせう。成程、溜り水だ。併し新鮮だ、純潔だ。草原の中に池がある、それを通ずる流れとてはないが決して腐敗する事はない。何となれば底の方から泉が湧いて出るからである。そしてわが老夫婦も矢張り彼等の胸の底にはさういふ泉を藏してゐる。そして此上もなく純潔だ。つまる處、諸君にして一世紀乃至一世紀半の昔に住んでゐた人間の狀態を知り度いと思はれるなら、須く僕についてゐらつしやい。さうでないと直ぐに或る日或時が到來して——それは二人には同じ時間たるべく定まつてゐる——そして吾が鵬鵡の棲木は取り外され、古代的なものが凡て彼等と共に終を告げることになるだらう。そ

して不格好な小舍は取毀たれ、その場所には、僕の祖母がよく言つてゐた、人の手細工のある處にはいつも一面に生えるもの――即ち蕁麻や牛蒡や蓟やにが蓬や酸模の類がはびこつてしまふのだ。往來そのものが跡を絶ち、住む人は移り變り、あのやうな物は何一つ、又と再び何時の時代にも見る事が出來なくなるだらう！』

『成程！』ネヅダーノフが叫んだ。『直ぐに出かける事にしやう！』

『私も賛成します。大に喜んでね。實際、』とソローミンが言つた。『それは私の領分ではないが併し面白い。そしてバークリン君が若し吾々の訪問の爲めに誰れも氣を惡くすることはないといふ事を實際保證する事が出來たら、それなら……まあ……』

『御心配には及びません！』バークリンが立代つて叫んだ。彼等は誰だもう夢中になるでせう。たゞそれ丈けだ。此の場合に何の儀式も要らない！　敢て言ふが彼等は幸福な罪の無い人達だ。吾々は彼等に歌はせやう。それはさうと君は、マルケーロフ君は矢張り賛成ですか？』

マルケーロフは腹立たしげに肩を聳やかした。

『僕は一人で此處に居殘る氣はありません！　連れて行つてくれ給へ、どうぞ。』

若い人々は座を起つた。

『君は其處に怖ろしい紳士を連れてゐるね。』

とバークリンはマルケーロフを差してネヅダーノフに囁いた。『蝗……蜜なしで蝗を食つてゐる浸禮教徒のヨハネの肖像そのまゝだ！　併し彼の人は』彼はソローミンの方へ首を傾けてみせて言ひ加した。『愉快な男だ！　何といふ愉快さうな笑顔だらう！　僕は今思ひ知つたあのやうに莞爾してゐる者こそ本當に他に立ち優つた人間だ――自分ではそれに氣附かないでね』

『あのやうな人が外にゐるだらうか？』

とネヅダーノフが訊ねた。

『澤山はゐない、併し若干はゐる』とバークリンは答へた。

十九

フオミユシユカと、フイミユシユカ、或はフオマ・ラウレンチエヰチとエウフイミヤ・パウローウナ・スポーチエフとは共に純粹な露西亞系の同じ血族に屬してゐた。そしてS――町では先づ最も古い住民であるとされてゐた。

二人は非常に早く結婚した。そして餘程の昔町の郊外に在る彼等の祖先から木造の家に腰を据えたきり決して他に移ることなどせず、又如何なる點に於ても彼等の生活の樣式又は習慣を決して變へることをしなかつたのであつた。「時」は彼等にとつては、ぢつと立ち止まつてゐるやうに思はれた。「新奇な事」は何一つ彼等の「オアシス」の境界を横ぎらなかつた。彼等の財産は多いといふ方ではなかつたが、彼等の小作人共に解放前の昔と同じく生きた家畜や食用品を一年に數回彼等に貢いだ。期日には村の長老が地代と莊園の森の中で射たと思はれる山鷄の一雙とを持つてやつて來た。わけても山鷄は實のところ久しい以前からゐなくなつてゐたのではあるが、それにも拘らず、何とかして持つて來て呉れたのである。彼等は客間の戸口で長老にお茶を振舞ひ、緬羊皮の帽子を一つと綠色の洗皮の手套を一對とを與へて、彼の祝福の言葉を述べるのが常であつた。スポーチエフ家は昔の農奴時代に於ける如く奴僕が澤山居た。立襟と小さい鋼の扣鈕の附いた非常に地の好い短上衣を着た老僕カリオビッチはずらずらした調子で『御飯の仕度が出來ました』事を告げたり、全く昔風の姿勢で女主人の椅子の背後に突立つたまゝぼんやりして居たりした。食器棚が彼の受持であつた。彼は『種々の藥味や小荳蔻や檸檬』などを監督した。そして『農奴と云ふ農奴が皆自由を得たといふこと

を彼の男は聞かなかつたのだらうか？』といふ疑問に對し彼はいつもかう應へた。『確かにもう彼奴等はいつまでもさういふやうな馬鹿げた囈語を言うて居るだらう。何でも土耳古人の中に自由と云ふものがあるといふ事は十分本當らしいが、併し俺は、有難い事にはそんな事には一切お構ひなしだ。』ブフカといふ矮人の小女は饗應の爲めに置いてあつた。それから年寄つた保姆のフシリエウナは頭に大きな黑い頭巾を被つて食事の席へ這入つて來ては濁つた聲でその時々の世間話を一々話した。――ナポレオンのこと、千八百十二年のこと、基督反對者のこと、さては白い黑人のことなどを話した。さもなくば、膀を片手で支へて、悲しさうな態度をしながら自分の見た夢やその夢占や骨牌でためした自分の運命やに就て物語るのであつた。スポーチエフの家はその町の凡ての他の家とは全く趣を異にしてゐた。それは何處からどこまでも櫛の木造りで眞四角な窓のある家であつた。冬の爲めの二重窓が一年中決して取り外される事がないのだ！　そしてあらゆる種類の小さな控室や廊下や、物置や押入や、それから欄干のついた中二階や丸い場處の上に建てた凹間や、それからあらゆる種類の小さな裏屋敷や地下室などが備はつてゐた。家の前には小さな柵があり、背後には庭があつた。庭にはあらゆる種類の外屋、穀倉、穴倉、氷室などがあつた……兎に角彼等にとつては申分のな

い巣であつたのだ！　が、凡てさう云つた風な外屋には澤山の品物が蓄へてあつたかと言ふにさうではない。中には實際崩れかゝつてゐるのさへあつた。併し兎に角昔のまゝので保存されてあつた。スポーチエフは年寄つた灰色のむしや〳〵毛の馬を二頭しか有たなかつた。一頭は年の故で一面に白い斑點が出來て居た。彼等はその馬を「不動」と呼んでゐた。せいぜい月に一度、その馬は町全體の評判となつた程に突飛な裝をさせられた。その馬具は前面を切斷した地球儀のやうなものに象どられて居て、裏には所々疣のやうな大きな斑點のある外國製の黄色な織物が付けてあつた。その織物の最後の碼はエリザベス女皇時代にウトレヒト又はリヨンに於て織られたものだ！　スポーチエフ家の馭者も矢張非常に年寄つた男で鯨油や松脂の匂でぷん〳〵してゐた。彼の髯は眼の直ぐ下から生えて居り、眉毛は小さい瀧のやうな格好に垂れ下つて髯と出會つてゐる。其の男は又何事をするにも非常に細心で鰊煙草一と撮吸ふのに五分間、帶に鞭を挿すのに二分間、それから「不動」を裝はせるだけに二時間以上もかゝると云ふ風であつた。名をペルフイシュカと言つた。スポーチエフ夫婦は自分達の乘つてゐる馬車が少しでも上り坂に來ると定つておびえて（彼等は下り坂の時でもおびえたのである）馬車の革紐にしがみつき、二人共大聲で『神樣馬をお許し下され――馬を……サミ

ユエル樣の御力で、どうぞ私達を……私達を羽のやうに輕く、羽のやうに輕くして下され！……』と繰返すのであつた。

スポーチエフ夫婦は町の誰彼から脫線した人として、殆ど氣の違つた夫婦とされてゐた。そして實際彼等自身も自分達は今時の生活とは接觸してゐない人達なのだといふ事を自覺してゐた……と云つて彼等はその事をば大して苦にしてゐるでもなかつた。彼等は彼等自身が生れて、育つてそして結婚生活を營んで來たその時代の風習に膠着してゐたが、たゞ一つその時代の生活法の特色で彼等の身にからみ付かない事があつた。それは彼等が生れてから以來未だ嘗て何人をも罰せず未だ嘗て何人をも鞭うたなかつた事である。若し彼等の下僕で泥棒とか酔漢とかいふのつぴきならぬ者に墮落するやうな者のあつた場合にでも彼等は丁度惡い天氣にでも我慢するやうに先づ暫くは我慢の出來るだけ我慢して見る。

そしていよ〳〵いけないとなつて始めて其奴を除くなり、他の主人の處へ廻してやるなりするのだ。彼等の言葉を借りて云へば『暫く他の人から後の面倒を見て貰ふ』のであつた。けれどもさういふ不祥事の起るのは極めて稀であつた。若しさういふ事があると、それは彼等の生涯に一新紀元を劃する程であつた。例へば『それは大層な昔の事、アルドシュカと云

ふ惡漢が家にゐた』とか『自分達が祖父の狐の尾の附いた毛皮の帽子を盗まれたのは』とかいふ案配であつた。ところがスポーチエフ夫婦はさういふ時代の帽子をまだ持つてゐたのであつた。けれども古い時代の最も大切な特色で、今一つ彼等に於て見る事の出來なかつた事があつた。それはフイミユシユカもフオミユシユカも大して宗教心を有つて居なかつた事である。わけてもフオミユシユカに至つてはヴオルテールの言葉を揚言して憚らぬまでになつて居た。フイミユシユカは又教會の人物に對して死ぬほどの恐怖心を抱いてゐた。彼女の經驗に依ると、教會の人々は毒眼を有つてゐる人々であつた。

『坊さんが私を訪ねて來たと思つて御覽、』彼女はよくそれを言つた。『そこで私が振向いて見ると乳脂が酢になつたやうな有樣さ！』で、彼等は教會へは滅多に行かなかつたが、天主教風に精進して居た。結局卵や乳酪や牛乳を飲食して居たのだ。それが町中に知れ渡つて、無論善い評判もされなかつた。併しながら彼等の善性はよくあらゆる非難に打勝つ事が出來た。そしてあのスポーチエフの變人夫婦を見ろと笑はれたり、あれは氣違ひだ、馬鹿だと云はれたりしてはゐたが彼等は實際それにも拘らず尊敬せられてゐたのだ。さうだ、彼等は尊敬されてゐた……しかも誰あつて彼等を訪ねるものがなかつた。が、それとて彼等にとつては大し

た苦痛ではなかつた。彼等が二人一緒にゐる時は決して怠屈を感ずる事はなかつた。隨つて又彼等二人は離れるやうな事もしなければ他の相手を求めるやうな事もしなかつた。フオミユシユカもフイシユシユカも未だ一度も之と云ふ病氣をした事はない。が、若しも彼等の何れかゞ少しでも氣分の惡い樣な事があると何方も菩提樹の花を煎じて飲んだり、胃に溫め油を擦りつけたり又は熱い牛脂を足の裏に滴したりして直きに癒つた。彼等は毎日同じ風にして一日を暮らした。遲く起きて、乳鉢の形をした小さいコップで朝のチヨコレートを飲んだ。

『茶といふものは』と彼等はいつも揚言した。『私達の時分から流行り出したのですよ』彼等は互に向ひ合つて腰掛け、何方かゞ話をしたり（彼等は常に何かと話の種を見出したのだ！）「面白草紙」とか「世界の鏡」とか「アオニード」とかいふものから抜讀したり又は紅いモロツコ皮で裝訂した金緣の小形な古いアルバムを覗いたりした。此のアルバムは題銘に錄されてゐる通り嘗てはベルブ・ド・カビリーヌ夫人といふ人の持て居たものである。何うして又何時此のアルバムが彼等の手に入つたか彼等自身もそれを知らない。それには若干の佛蘭西語の詩と澤山の露西亞語の詩と散文の拔萃が型の如く書いてあつた。例へば次の樣なシセロに關する短かい感想があつた。『如何なる意向にてシセロはかの收稅官の役目を始めしか。そ

れに就きて彼は次の如く說けり――彼がこれまで敬はれ來たりし所以はあらゆる地位に於ける彼が感情の潔白といふ事なりき。彼はそを證さんとして神に祈れり。彼はそが尊き完成の爲めに最も神聖なる縛めもて己が身を縛めたり。かくてその志の爲めに彼シセロは唯だに法の禁ずる快樂に耽らざるを苦とせざりしのみならず、萬人に依つて缺くべからざるものとして保たれたりし輕き鬱散さへも斷ちたりき』此の文句の下には『饑飢と寒氣のシベリアに於て綴らる』と云ふ事が書き添へてあつた。それから更に善い標本は『タージス』と題する詩であつた。その中に次の樣な句があつた。

『動きなき平和はすべての物を領せり、
露は太陽の光を受けて輝き、
清凉の氣は自然に充ち渡り、
今し新らしき生命の日こそ初まりぬれ！
チルジスのみ唯獨り胸驚かされて、
いとも寂しく、いとも悲しく嘆き傷む。
彼れがいとしのアネタは遠く去にけり、

彼女なくして何物かよくチルジスの心を喜ばし得べき。』

それから又千七百九十年に訪ねて來た或る船長の即興詩は「五月六日」と日附がしてある。

『いかでわれ忘るべき、
汝、あいらしき小村よ！
吾はとこしへに思ひ出づべし、
樂しかりしかの時よ！
汝が貴き主の家の廣間にて
わが受けし情の、あはれ、いかばかりなりけむ！
忘れがたきはかの樂しかりし五日の朝夕、
讃へんにも言葉なきかのたふとき團欒！
あはれ、老いたる、はた若きあまたのをみな子達よ。
さてはかの面白かりし人々よ』

アルバムの最後の頁には詩の代りに胃痛や痙攣や腸蟲に對する藥の處方書が書いてあつ

た。スポーチエフは十二時にきちん〳〵と食事したが、いつも古風な御馳走ばかりであつた。凝乳煎餅、酸い胡瓜のスープ、鹽辛い甘藍の鹽漬、燕麥粥、果漿のプデン、糖蜜、湯煎にした家禽に蜜を入れて製した蕃紅花や乳卵糕を添へたものなどが主であつた。食後には彼等は晝寢をした。それも丁度一時間、それより長くはしなかつた。起ると再び互に向ひ合つて坐つた。そして越橘の含利別や又時には「四十分間」と稱する沸騰水を飲んだ。がその殆ど全部を瓶の外へ吹き出さしてしまつた。それは老人達を非常に喜ばしたのであるが、カリオビッチには非常に迷惑であつた。

彼は『そこいらぢう』を拭かなければならなかつた。で、彼は食事方や料理番に對して永い事ぶつ〳〵言ひ續けた。彼等こそ此の飲料の發明に對する責任者だと認めたからである：：『中に何ういふ善いものが這入つてるだか知らねえが、道具を臺無しにするばかりだ』かう彼は云つた。と、やがて又スポーチエフは何かを讀み初めるか又は矮人ブフカの諧謔に笑ふか或は昔流行した歌のデュエットをやるか（二人の聲は全く同じで、高くて、弱く何方かと云へば震えてゐる嗄れ聲であつた——晝寢の直ぐ後には殊にさうであつた——それで居て多少人を魅するやうなところも無いではなかつた）又は骨牌を弄ぶかした。骨牌はいつもなが

ら同じ古いやり方でクリッページとかピクエットとか又は甚だしきは二度休のあるポストンなど云ふ風なものであつた！　それが濟むと今度は湯缸が現はれる。晩の茶が初まる……彼等はそれを時代精神に從つて行つたのだ。その癖彼等は常にそれを一の缺點であると考へ、此の『支那の藥草』の爲めに人々が著しく虛弱となりつゝある事を思つて居た。が、概して彼等は現代を非難して、舊時代を稱揚すると云ふやうな事はしない方であつた。彼等自身は生れてから以來決して他の生活法を採らなかつたが、その代り他の人々が違つた生活を營む事に對しては、彼等の生活法を變へる事を要求されない限り、譬へそれが自分達のより以上のものであつても容易くそれを許すのであつた。七時になるとカリオビチが夕飯の給仕をした。その調進するはやし料理が冷めて酸いのも止むを得なかつた。九時になるともう高い棒縞の羽蒲團がフオミユシカとフイミユシユカのむつちり肥えた小柄な體軀を柔かく包んでゐるのであつた。

そして安らかな眠が彼等の瞼の上に上るのにもさう時間がかゝらなかつた。古い家の中のあらゆるものが聲をおさめた。麝香の薫の唯中にランプが輝く。蟋蟀が鳴く。かくて心優しい、奇妙な、無邪氣な老夫婦は深い眠りに落ちるのであつた。

パークリンは自分の妹を世話してゐる此の二人の偏人、彼の所謂（鸚鵡）の處へ自分の友達を案内したのであつた。

彼の妹は怜悧な娘で容貌も惡くはなかつた。

彼女の眼は立派であつた。併し彼女の不幸な身體の缺點は彼女の心を壓潰した。あらゆる自信と歡喜とを、彼女から奪つた。彼女をうたがひ深いものにし、意地惡いものにさへした。彼女の名前が亦不幸にもスナンヂユリヤと言ふのだ！　パークリンはそれをソフィアと改めさせやうとしたが、彼女はスナンヂユリア――丁度駝背に相當した名だ、と言ふのでその奇妙な名に執着した。彼女は音樂が上手で、ピアノを巧みに彈いた。『私の長い指のお蔭で』と彼女は多少苦々しさを加へて言ふのであつた。『駝背はいつもかういふ指を有つてゐるのね』

訪問者達は恰もフオミユシユカとフイミユシユカとが食後の晝寢から起きて越橋水を飲んでゐるところへ來合せた。

『吾々は十八世紀に踏み込みつゝあるのだ』とパークリンが大きな聲で云つた。

間もなく彼等はスポーチエフ家の閾を跨いだ。

案の定彼等はその廣間の中で、髮粉を塗つた騎士や貴婦人の黑く切り出した半面影像で覆はれた、低い青つぽい屏風の蔭でまのあたり十八世紀に接したのであつた。ラヴアターに依つて紹介された半面影像畫は前世紀の八十年代にロシアで非常に流行したものである。かくまでの多人數の訪問客――四人でしかないが――が突然現はれたので、此の浮世離れた家の中にも非常な騒ぎを惹き起した。靴や素足の慌てふためく音が聞えた。女の顏が一ッならずひよくりと現はれては消えた。或者は締め出された。或る者は唸つた。ある者は忍び笑した。或る者は震え聲で『あつちへ行け、おい！』と囁いた。

とう〳〵カリオピッチが見窄らしい短上衣を着て出て來た。そして「客間」に通ずる戸を開きながら聲高に呼はつた。

『ようこそ、サムソーニチ樣並に皆樣がた！』

老人夫婦は僕婢等に比べてその慌て方が餘程少なかつた。四人の大の男が客間の中へ浸入して來たので彼等は客間の廣さが丁度工合よかつたにも拘らず少々當惑してゐた。が併しパークリンは取り敢へず色々な奇怪な文句を使つてネヅダーノフ、ソローミン及びマルケーロフの三人を順々に紹介して、いづれも「冠を被つた人」ではなくて、善良な穩かなたゝの人間で

ある旨を告げて彼等を安心させた。

フオミユシユカとフイミユシユカとは「冠を被つた人」――即ちお役所の――人に對して特種な嫌惡の念を抱いて居た。

兄に招かれて這入つて來たスナンヂユリアはスポーチエフ老夫婦よりは一層とりのぼせ、一層固苦しくなつた。老夫婦は客に向つて異口同音にお掛けなさいと言つた。それから何をお飲みか――お茶か、チヨコレートか或はジヤム入の沸騰水かと訊ねた。彼等は客が商人ゴリユーシキンの家で中食してからまだいくらも時間のたゝないと云ふこと、それからやがて又其處で食事をする事になつてゐるから何にも欲しくないといふことを聞いて別にそれ以上強ひもしなかつた。そして彼等は二人とも寸分違はぬ遣り方で小さな兩手を小さな體軀の上へ折重ねて話を始めた。

初めのうち談話はどちらかと云へばだらけてゐた。が、間もなく活氣づいて來た。バークリンはゴーゴリの書いたものゝ内で有名な、かの滿員の敎會に首尾よく這入り込んだ市長と、それから是れも同じく首尾よく市長の口に這入り込んだばいの話をして盛に老夫婦を喜ばした。彼等は頰に涙が流れ落ちるまでに笑つた。彼等は又二人共少しも違はぬ笑ひ方で笑つ

た。突然な叫聲を發したかと思ふと、終には咳き入つてしまつて、顏中をくゝくわつと熱くした。

バークリンは概してゴーゴリから引用する話はスポーチエフの樣な人間に對しては極めて有力な、痙攣的とも云ふべきほどの効果を與へる事を承知してゐた。が併し彼は彼の友達に此の二人を見せてやらうと思ふほどには此の二人を喜ばさうとは思はなかつたので、ぢきにその戰法を變へて老人等に氣が安まるやうに活氣づくやうにと仕向けた。

フオミユシユカは彼の秘愛の彫刻を施してある木製の嗅煙草の盆を持つて來て見せた。その表面には畳ては種々な樣子をした三十六の人物の姿が分明と現はされてゐた。併しそれはとつくの昔にもう消え失せてしまつて居たのであるがフオミユシユカは今にそれを見て、一見分けることが出來た。『御覽』と彼は言つた。『其處に一人窓から覗いてゐる人物がありますの。分りますかね、頭を突き出して居ませうがな……』

が、爪の突き出た丸つこい指で彼の指し示すその場處には何にもなくて、盆の蓋の他の部分と少しも變らず滑らかになつてゐた。それから彼は彼の頭の上に懸けてある油繪に客の注意を求めた。それは雪の平野を横切つて一生懸命に疾驅する雪白の駿馬とそれに跨つた一人の獵夫と、いづれも側面から書いた繪であつた。その獵夫は青い色の吹流しを附けた白羊毛の

高い帽子を被り、天鵞絨で緣を取つた駱駝の毛の陣羽織を着、金で刺繍を施した帶を締めてゐた。絹絲で縫取した手袋が帶に狹み込んであつて、銀と黑とを鏤めた一本の短劒がその帶に吊されてゐた。年が非常に若くて、體軀の肥大なこの獵夫は、一方の手に紅い總で飾つた大きな角笛を携へ又一方の手には手綱と鞭とを掴んでゐた。馬の脚は四本とも空を飛んでゐた。而もその足の一本一本に畫家は丹念に蹄鐵を描き、爪まで立派につけてあつた。『それからまあ御覽なされ』とフォミュシュカは同じ丸つこい指で馬の脚の背後の白い地の上にある四つの半圓形を指差しながら言つた。『雪の中の足跡——こんなもの迄書き入れてありますわ！』だが、その足痕がたゞ四つとは何ういふわけか——それ以上一つもその背後の方に見られない——その點に就てはフォミュシュカは一言も發しなかつた。

『そこでねえ貴方、これは私でござりますよ』と彼は一寸息をついてからしとやかに笑ひながら言ひ加した。

『えッ！』ネヴダーノフが叫んだ。『貴方は獵をなすつたんですか？』

『致しました…だがその後久しく致しません。一度馬が勢一杯に駈けてゐるときに私は投り出されて kurpy に怪我をしました。するとフイミュシュカがえらく驚きましてな…それ

かちと云ふもの出したがらないのです。それで私はそれ以來びつたり獵を止めてしまひました。』

『どこを貴方は傷めたと被仰るんですか』とネヴダーノフが訊ねた。

『kurpy にですよ』とフォミュシュカは聲を低くして繰返した。

客は互に顏を見合せた。誰れも kurpy の何たるかを知らなかつた。少くともマルケーロフはコーカサス人かサーカシア人の帽子に附いてゐる、むしやくしや毛の房が kurpy と云ふのだといふ事を知つてゐた。けれどもフォミュシュカがそれを傷めると云ふ事は確かにあり得ないことだ！　それにしても彼が了解した言葉の意味を、ありのまゝ老人に訊ねることは他の人以上に彼にはむづかしかつた。

『さてそのやうにお前さんが見せびらかしやつたからには』とフイミュシュカが突然口を出した。『私も見せて上げませう』

彼等が bonheur du jour「幸福の日」と呼んでゐる古風な小形の書檯——細い彎曲した脚がついて居て、中高の蓋が背後の方で摺まれる樣に出來てゐる——から彼女は橢圓形の青銅の枠に嵌つた水彩の密畫を取り出した。それは四歲ぐらゐの全裸體の小供が箭筒を肩にし、

胸の周圍に青いリボンを纏ひ、小さな指の先で箭の尖を吟味してゐる處を現はしたものである。その小供は髪の毛が非常に擘れて居て、にこやかな、いくらか藪睨みな小供である。フイミュシュカはその畫を客に示した。

『それが私でございます！』と彼女は言つた。

『あなた？』

『はい、私でございます。幼い時分のな。佛蘭西人で私の父の處へよく參つた一人の繪師がゐました――立派な繪師でした！　その人が私の父の誕生日に畫いてくれたのでございます。その人は何といふ立派な佛蘭西人でございましたらう！　其後もよく私共へおいでになりました。何でもその方がゐらつしやるのを見てゐますと、お辭儀と一緒に足ずりをして、それから心もち足を空で震はしながら這入つてゐらして、貴方のお手に接吻なさるのでしたつけね。そして出てゐらつしやる時は今度は御自分の指に接吻なすつて、前後左右にお辭儀をなさるのでした！　それは〳〵氣持の好い佛蘭西人でございましたよ！』

彼等はその畫家の作を賞讃した。バークリンはどこやらに似たところがあるとさへ言つた。

と、今度は、フオミュシュカは現今の佛蘭西人に就て語り初めた。そして現在の佛蘭西人は凡て惡人に違ひないといふ意見を述べた！

『何うしてです、それは、フオマ・ラヴレンチエーヰチ？』

『はて、まア第一何ういふ名前を此頃あの人達がつけてるか御覽なされ！』

『何ういふ例へば』

『まあ、例へばノーザン＝チエント＝ローラン、（ノーゼント・セーント・ローレーン）何れもお定まりの惡漢の名ぢや！』

フオミュシュカは唐突に訊ねた、『巴里の今の天子樣はどなてでございますな？』

彼等は『ナポレオン』だと告げた。と、それは彼にとつては驚きと苦しみであるらしく見えた。

『どうかしましたか？』

『でも、もうあの御方は大變な老人の筈ですものな』

と彼は云ひかけて、迷惑さうに周圍を見廻しながら止めた。

フオミュシュカはフランス語は極く少しゝか知らなかつた。が、ヴオルテールは飜譯で讀

んだ。(寢床の枕の下に置いた秘密の箱の中に彼はCandideの翻譯の寫本を入れて置いた)併し彼は時折『夫れは、あなた、fausse parquet です』「疑はしき」「僞の」といふ意味で)といふ樣な辭句をふいと挿む事があつた。それには多くの人々が笑はされた。が、それでも終に或る學識ある佛蘭西人から、それは千七百八十九年までフランスで用ひられた古い議會式な言葉であるといふ事を說明されて止めた。

話が佛蘭西や佛蘭西人の事に及んだのを見て、フイミュシュカは彼女の頭に蟠つてゐたある一つの事に就いて訊ねて見やうといふ勇氣を振ひ起した。彼女は初めそれをマルケーロフに訊ねやうかと思つたが、その人が頗る意地惡に見えたので、ソローミンに訊ねることにした……が、否! と彼女は思ひ直した。

『彼は朴訥な人だから屹度佛蘭西語を知るまい』それで彼女は自然ネヴダーノフに話しかける事になつた。

『ねえ貴方、是非一つ敎へて頂きたいと思ふことがございますので』と彼女は始めた。『御免なさいまし! 私の從弟のシラ・サムソーニチがな、貴方本當ですよ、私の樣な婆や古臭い頭の者を兎角馬鹿に致したがるのでしてな』

『何うしてまた?』

『まあ、ね、誰でも佛蘭西の言葉で「それは何ですか」といふ問をかけたいと思ふなら"Ke-se-Re-se-la?"と云はなくてはなりませんでせうか?』

『さうですね』

『それでは"Re-se-Re-se-la"とも言へますかな?』

『さう、さうは言へますね』

『では唯だ"Re-se-la"と云ふだけでは?』

『さうです、さうも言へます。』

『それでは皆同じ事でせうかな?』

『さうです。』

フイミュシュカは深く考へ込んで居たが、やがて兩手を差し上げて

『それぢやシリユーシュカ』と彼女はつひに云つた。

『私が間違つてゐました。お前さんが本當でした。だけどあの佛蘭西人つて! くだらない奴等だ!』

バークリンは老人達に何か短い小唄を歌つて聞かしてくれと頼み始めた……彼等は二人とも笑つた。そして何うしてさういふ考が彼の頭に生じたかを怪しんだ。それでも彼等は直ぐに承諾した。が、たゞスナンヂュリアがハープシュードに坐つて伴奏を勤めるならばといふ條件附である。つまり彼女がどんなものが好いか知つて居る筈だからと云ふのであつた。初めは誰も氣がつかなかつたが客間の隅に小形なピアノが据えてあつたのである。スナンジュリアはそのピアノに坐つて少しばかり彈いて見た……斯樣な齒のないやうな酸味のある、萎びた、亂れた音調をネヅダーノフは聞いた事がなかつた。併し老人達は早速歌ひ出した。

『惱みをば思ひ知れとや』

フオミユシユカが始めた。

『戀に隱れし惱みをば、
思ひ知れとや　神はこの
戀の心をたまひけむ』

『戀になやめる胸もちて、』

とフイミユミシユカが應じた。

『誰か此の世に悲しみと
惱みに遇はぬ者あらむ』

『いかであるべき！　いかであるべき！』

とフオミユシユカが受けた。

『いかであるべき！　いかであるべき！』

とフオミユシユカも繰返した。

『なやみと戀は裏表、
いつまでも！　いつまでも！』

二人は一緒に歌つた。

『いつまでも！　いつまでも！』

フオミユシユカは獨りになつて歌つた。

『ブラボオ！』とバークリンが叫んだ。『それは一番目の歌だ。今度は二番目のを。どうぞ』

『承知しました』とフォミュシュカが答へた。『たゞ、スナシヂユリア・サムソノーウナ、顫音は何うだね？　私の歌の後には顫音がなくちやいけない』

『かしこまりました』スナンヂユリアが答へた。『何卒御遠慮なく顫はせて戴きます』

フォミュシュカは再び始めた。

『悲しみと惱みを知らで誰かよく
戀を知れりと云ふものぞ。
戀して誰か嘆かざる
泣いて再び嘆かざる？』

すると今度はフォミュシュカが歌つた。

『悲しみに胸は安けきひまもなし。
大海原の船ごと。
あゝ何故の戀ごゃろ。

『苦痛の爲め！　苦痛の爲め！　苦痛の爲め！』

とフォミュシュカが叫んだ。そして顫音を出す時間をスナンヂユリアに與へる爲めに次を歌ふのを待つて居た。

スナンジユリアは顫音を彈いた。

『苦痛の爲め！　苦痛の爲め！　苦痛の爲め！』

とフイミュシュカは繰返した。

それから又二人一緒に、

『神よいざ、取り上げたまへ、我が心、
今一度！　今一度！　今一度！
今一度！　今一度！　今一度！』

と歌つたそして其歌は更に新たの顫音ともつれ合つた。

『ブラヴオ！　ブラヴオ！』マルケーロフを除いて皆叫んだ。そして拍手さへ與へた。

『だがあの人達は氣がついて居るかしら。』とネヅダーノフは拍手が止むと直ぐに考へた。

『自分達が一種の道化役を演じてゐるといふ事に？　恐らく氣がつくまい。いや或は氣づいて居るのかも知れん。』何も惡い事はない。誰もそれが爲めに害を被るものはない。自分達

は實際、人を樂しませてゐるのだ！」と云ふやうな事を思つてゐるのかも知れぬ。だから適當に見れば彼等は正當なのだ。いかにも正當なのだ！』

こんな風に考へた結果、彼は急に改まつて彼等に感謝の挨拶をした。が、それに對して彼等は椅子も離れずに唯だほんの輕い會釋らしい事をしただけであつた……併し此の瞬間何でも寢室か女中部屋に充てゝあるらしい隣の部屋からたゞならぬ囁き聲や騷ぎ廻る音が長い間してゐた後で、矮人のプフカが年寄つた乳母のワシリエウナに伴はれて現はれて來た。プフカは仕切りなしに怒鳴つたり、道化た眞似をしたりした。乳母は暫くの間はそれを靜めるやうにして居たが、やがて自分の方から煽り立てるやうにした。

永い間氣むづかしさうな顏をしてゐたマルケーロフは（ソローミンに至つては寧ろいつもよりは餘計に莞爾になつた位であるが）此時鋭くフォミユシユカの方へ振り向いた。

『僕は貴方の開化した理知と一緒にして、』と彼はがさつな態度で口を切つた、『貴方の事を考へるんぢやありませんでした、（貴方はヴォルテールの崇拜者だ、さうでしたね）それが此の樣な憐憫の相手となるべきものに依つて――つまり不具者の事です――慰まれるなんて』その時彼はバークリンの妹の事を思ひ出したので、漸う口を噤む事が出來た。フォミユシユカは

赧くなつて、ぶつ〳〵口の内で云つた。

『なに、その、私がさせたのではありません……彼女が自分で――』

するとプフカは眞正面からマルケーロフに喰つてかゝつた。

『何だつてそんな考がお前さんの頭の中に這入つたんでせう』と彼女は舌の廻らぬ聲で叫んだ。『私等の御主人を惡く云ふなんて途方もねえことだ。此の御方には私の樣な哀れな不幸者を庇つて下さるのぢや、お邸へ引取つて、飲み食ひするものを當てがつて下さるのぢや。だからお前さんは私を羨まなくちやならんわけだ。お前さんはどうも人の幸福を羨む人らしいね。お前さんは一體どこから生れ出た人だい？　眞黑けな、甲虫みたいな髯を生やしたこのやくざもの奴が』此處でプフカは彼女の肥つた短い指で相手の髯の形を作つてみせた。ワシリエウナの齒の拔けた齒齦が笑ふので顫へてゐた。その嬉しさうな叫び聲は次の間までも響き渡つた。

『勿論僕は貴方を審判する事は敢て出來ない、』マルケーロフはフォミユシユカに言葉を向けた。『不幸な者や不具な者を保護するのは善い行だ。併し遠慮なく言ふと、他人を害しないまでも自分の安逸と飽滿に溺れて贅澤に生活して居ながら、同胞を救助する爲めには一指も動

かさないで居ると云ふのは大した價値のある事ではない。僕は一個として全くの處さういふ風な善行には何等の價値をも與へないのです！』

こゝでブフカは耳も聾せんばかりに怒鳴つた。彼女はマルケーロフの言ふことは一言も解らなかつた。併し此の「眞黑けな奴」何かとほざいて居やがる…何と云ふほざき方をしやがるのだ！　かう彼女は思つたのであつた。ワシリエウナも矢張りよくも解らない事を何やら呟いてゐた。と、フオミユシユカは小さな兩手を胸の上で折り重ねて、妻の方へ向いて、『フイミユシユカや、ねえお前、』と殆ど泣き出しさうになつて言つた。『此の旦那の被仰るのをお聞きかね？　お前と私とは罪人なのだよ…惡漢なのだよ。僞善者なのだよ。私達は贅澤に溺れてゐる。オー！　オー！…私達は町中へ引き出されなくてはならない…そして私達の生活の爲めに箒を手にして働かなくちやならない。オー、ホー！　ホー！』そのやうな悲しい言葉を聞くとブフカは前より一層聲高に怒鳴つた。フイミユシユカの眼は皺んだ。口の兩端が垂れ下つた。彼女は自分の胸の思を一度に洩らしてしまはうとでもするやうに深い息を吸ひ込んでゐた。

そんな風で若しバークリンが遮らなかつたなら、どんな事になつたかも知れなかつた。

『此れはまあ、何と云ふ事だ？　一體全體』彼は片手を振つて、聲高に笑ひながら口を切つた。『諸君は自分で恥かしいとは思はないのかね。マルケーロフ君は、ほんの一寸した冗談を言はうとしたのだ。處が先生あんな頗るきつい顏をしてゐるので、それが妙に角立つて聽えたのだ。そこでお前さんがそれを眞に受けたと云ふわけだ！　それで澤山だ！　エフイミヤ・バウローウナ、ね、僕達はもう直ぐに出かけなくちやならない。それで、解つたでせう？　お前さんは別れる前に一つ吾々の身の上を占つてくれなくちやならん…お前さんはその方にかけちやなか〳〵の偉物なんだからね。妹！　骨牌を持つておいで！』

フイミユシユカは夫の方をちらと眺めた。夫は全く心を取り直して穩かに坐つてゐた。彼女も氣を取直した。

『骨牌、』と彼女は言つた。『でも私はすつかり忘れてしまつたんですよ。貴方、まう餘程永く手にしませんものでな』

併し彼女は自ら古い怪しげなオンブルカードの包をスナンヂユリアの手から取り上げた。

『どなたの身の上を申しませう？』

『それや無論皆のをさ。』とバークリンは言つた。そして更に口の内でこんな獨り言を言つ

た。『何と云ふ動き易い老人だらう！　君達は何うでも好きな通りに彼女を變へる事が出來るのだ……全くの可愛い婆さんさ！　皆のをだよ、お老母さん、皆のをだよ』と彼は聲高に言葉をついだ。『僕等の運命と性質と將來を占つて貰ひたい……何もかも云つて聞かして貰ひたいんだ！』

フイミュシュカは骨牌を切り初めたが、突然彼女はそれを投り出した。

『骨牌を使はなくてもいゝ！』と彼女は叫んだ。『私はそれがなくても皆さんの性質を知つて居ます。そして運命だつて矢張り性質の通りです。あの方は、さア』（彼女はソローミンを指した）『冷談で、いつも變らない人。あの方は、さア』（彼女は指をマルケーロフの方へ向けて顫はした）『烈しい危險な人だ……』（ブフカは彼の方へ舌をペロリと出した）『貴方は』（彼女はバークリンをながめた）『貴方には言ふ必要はない。貴方は御自分で御存じでゐらつしやる。お天氣屋さんでゐらつしやるわな！　それから此のお方は』（彼女はネヴダーノフを指して躊躇した。）

『何です？』と彼は言つた、『言つて下さいどうぞ。何んな人間です私は？』

『貴方はさあ、何んな方でせう？……』フイミュシュカは靜かに言つた。『貴方は人に憫れまれる――それでおしまい』

ネヴダーノフは身顫した。

『憫れまれる？　何うしてさうでせう』

『まあ！　おいとしい方ぢや――それでおしまい』

『だが、何うしてゝす？』

『あれ、理由でございますか！　私の眼がさう私に申します。貴方は私を馬鹿だとお思ひになりますか？　まあ、これでも私は貴方よりは賢いつもりでございますよ。何しろ……私は貴方をおいとしいと思ひますよ……それが貴方の御身の上でございますよ！』

皆は沈默してゐた……彼等は互に顔を見合せた。が、矢張り默つてゐた。

『それでは、さよなら』とバークリンは叫んだ。『長居し過ぎて退屈させました。恐縮です。丁度皆さんがお歸りの時刻だ……僕は途中までお送りする事にしやう。さよなら。御親切な招待で有難う御座んした』

『さよなら、さよなら、又お出で下さいまし、堅苦しくなさらないで』とフオミュシュカとフイミュシュカとは一つ聲で云つた……それからフオミュシュカは突然疊句のやうなものを歌ひ

出した。

『御機嫌よう』

『御機嫌よう』とカリオビッチは全く思ひがけなく低音部の聲で唸るやうに云つて、若い人人の爲めに戸を開けた。

そして彼等四人の者は突然その不格好な小家の前の街道へと飛び出した。折から彼等は窓の處でブフカがきい〳〵聲を出してゐるのを聽いた。『馬鹿者共……』と彼女は怒鳴つた。

『馬鹿者共！……』

バークリンは聲高に笑つた。けれども唯一人應ずるものはなかつた。マルケーロフは一人一人を順々に檢べた。何等か憤怒の聲の出づるのを待ち設けてゐもゐるやうに……

ソローミンだけは獨りで例の微笑を浮べてゐた。

二十

『さアさア、』とバークリンが一番先きに話し出した。『僕等は今迄十八世紀に居たのだ。今度は全速力で二十世紀へ案内し給へ……兎に角ゴリユーシユキンは大に開けた人間だから十九

世紀の中に數へるのは宜しくない』

『え、君は彼の男を知つてゐるのかい』とネヅダーノフが訊ねた。

『世界到る所彼の盛名に滿ち滿ちてゐるさ。ところで僕が今「案内し給へ」と言つたのは、僕も君達と一緒に行き度いと云ふ事なんだ』

『何うしてそんな事が？　だつて、君は彼の男を知つちやゐないだらう、知つてるのかい？』

『大丈夫！　君だつて吾が鸚鵡を知つてたかね？』

『だつて君が僕等を紹介したちやないか！』

『いかにも、だから君等は僕を紹介し給へ。君等は何の秘密も僕に對して持つことは出來ない。それにゴリユーシユキンは開つ放しの心を有つた男だ。屹度彼の男は新規なものを見る事が好きだらう。それに此のS……町では遠慮がましいことが禁物になつてるんだからね！』

『さうだ』とマルケーロフが呟いた。『成程此處の人間は無遠慮らしい』

バークリンは首をゆすぶつた。

『それは大方僕に對することだらう……宜しい！　僕はその叱責を被る價値があつた。だが

一寸、僕の新らしい知己たるマルケーロフ君、君の怒りぽい氣質が君に吹込んだその陰氣な考へは暫らく控へ給へ！　就中――』

『では君、僕の新らしい知己たるバークリン君』とマルケーロフは力を込めて遮つて、『言はしてくれ給へ……僕は警告のつもりで云ふが、どんな時でも僕は冗談なんかに少しの興味も覺える人間ぢやないよ。わけても今日はさうだ！　それに第一如何して君は僕の氣質なんかを知つてゐるね？　顏を見合つたのも、ほんの一寸ではないか――而も今度が始めてだと思ふが』

『そら、そら、その通り意地惡くなり給ふなつてことさ。さう口汚く罵り給ふなつてことさ。君がそんなにしなくても僕は君を信ずるよ、』とバークリンが言つた。そしてソローミンの方を向きながら『おい君、』と彼は叫んだ。『あの慧眼のフイミユシユカが冷やかな人だと言つた君――慥かに君の身邊には一種爽快の氣が漂うて居るよ――まあ兎に角言つてくれ給へ、僕は誰かに對して何か不愉快な事を爲やうといふやうな又は見境もなく冗談を云はうといふやうな氣を少しでも有つてゐたいらうか？　僕は唯君達と一緒にゴリユーシユキンの處へ行くといふことを仄めかした丈けだ。それに又僕は元來が惡氣のない人間だ。マルケーロフ君が

怒つた顏するのは僕の罪ぢやない』

ソローミンは先づ一方の肩を聳かしたが、すぐその後から他の一方を聳かした。それは彼が如何答へて善いか直ぐには心を決し兼ねた時いつもする癖であつた。

『何も惡い事はない、』と彼はとう〳〵言つた。『君は誰に對しても害を與へる事は出來ない人間だ。ね、バークリン君。君はさうしやうとも思はないだらう。それに何だつて君がゴリユーシキンの家へ行つてはならぬといふ事があらう？　吾々は恐らく君の從兄弟の家での通り愉快に且つ有益に時を過すことだらうよ』

バークリンは彼の方へ指を動かした。

『あゝ！　君にも惡意があるんだね、併し君も矢張りゴリユーシユキンの家へ行かうとしてゐる、さうだらう？』

『いかにも僕は行かうとしてゐる。何の道今日は敗北た』

『さアそれでは、en avant, marchons(前へ、進め、)二十世紀へ！　二十世紀へ！　ネヴダーノフ、君は進歩した人間だ、先導し給へ！』

『宜しい、さア來給へ。唯だ、同じ樣な冗談をあんまり屢々繰返し給ふな。君は一體吾々の考

へを恐れて、無暗と自分の物を出し過ぎるよ』

『いつでも御意のまゝになりませう』とバークリンは快活に言ひ返した。そしてかう言ひ返すや彼は躍進ではなくて、跛進的に前へ急いだ。

『愉快な奴ぢや、頗る、』とソローミンはネヅダーノフと腕を組んで彼の背後から歩きながら言つた。『萬が一――斷じてないが――吾々が皆シベリアへ送られるやうになつても、其處には吾々を喜ばせる人間があると云ふわけだ！』

マルケーロフは皆の背後から默つて歩いてゐた。

軈て商人ゴリユーシユキンの家では「當世風な」晩餐を仕度する爲めにあらゆる手數がかけられてゐた。魚のスープの極めて脂濃いそして極めて氣持の惡いのが拵へてあつた。種々な溫い夾肉麭餅や調味の細切煑肉が調理されてあつた。(ヨーロッパ文化の絕頂に立つ人としてのゴリユーシユキンは、舊敎の信者ではあるがフランス風の料理に贊成してゐる、そして不潔の廉を以てある倶樂部を解雇された一人のコックを雇入れてゐた。)就中最も特筆すべきことはシャンパンの數瓶が氷の中から取り出されて、而もそれに更に氷が入れられて居た事であつた。

主人公は無暗とせかくしたり、くすくす笑つたりする獨特な無作法な癖を演じながら若い人々を迎へた。彼はバークリンの豫言通り彼を見て大喜びであつた。彼はバークリンの事を訊ねて『あの人も吾々の一人でせうな？』と云つた。そして答も待たずに叫んだ。『いや、勿論さうなくてはならない！』それから彼は何うとかした――如何な事だか知れたもんぢやない！――慈善的な事業の爲めに常に彼を惱ましてゐる「變人」の知事の處から歸つて來たばかりだといふことを皆に語つた……が、ゴリユーシユキンが知事の處で招待された事を喜んでゐたのか、或は又進歩した若い人々の面前で首尾よく彼を罵り去つた事の方を喜んでゐたのか到底わからなかつた。やがて彼は兼て約束して置いた新入黨者を彼等に紹介した。が、その新入黨者といふのは顏のすべくした、病身らしい小男にしか過ぎなかつた。彼は朝の內の用事を帶びて這入つて來たのであつた。ゴリユーシユキンはその男を番頭のワーシャとして彼を呼んだ。『此の男はしやべる事はあまり上手ではありません。』

とゴリユーシユキンは五本の指を同時に彼の方へ差向けて言つた。『併し胸も魂も吾々の目的の爲めに捧げてゐます』ワーシャは唯だもう腰を屈めたり顏を赧くしたり、瞬きしたりそしてげらくゝ空笑ひをしたりするより外はなかつた。此の男か修養のない鈍物であるのか、

それとも極々の惡漢か不埒者であるかと云ふ事は、これまた、到底不可解の事に屬するのであつた。

『兎に角まあ御食事を、皆さん、御食事を。』

先づ側棚にある食慾を促す物を隨意にしたゝめてから、彼等は食卓に附いた。スープが濟むと直ぐゴリユーシユキンはシャンバンを命じた。シャンバンは凍つた塊になつて瓶の口から杯の中へと滴つた。『吾々の……吾々の事業の爲めに！』局外漢の面前で警戒してゐなくてはならぬといふ事を知らせやうとするものゝ如くゴリユーシユキンは下僕等の方を向いて眴ぼせしたり默頭いたりして叫んだ。新入黨者のワシャは相變らず沈默を續けてゐた。そして椅子の最も端つこに腰かけてゐて、彼の保護者が言ふ樣な心も魂も捧げてゐるといふ彼の信念には少しも相應しない卑劣な振舞をしてゐた。彼は無暗矢鱈に酒をあふつた！……だが、他の人達はよく話し合つた。それも主として彼等の主人役がよく話した——それとバークリンと。殊にバークリンの方がよく話した。ネヴダーノフは內心荒立つてゐた。マルケーロフはひどく憤激してゐた。仕方は違ふがスポーチエフ家の時と同じ樣に憤激してゐた。ローミンは注意して傍觀してゐた。

バークリンは獨りで興に乘つてゐた！　彼の痛快な話がびどくゴリユーシユキンを喜ばせた。その「小つぽけな跛の奴」がその隣に腰かけてゐるネヴダーノフに彼の散財に對する最も殘酷な批評を囁き續けてゐるといふ事は一向に知らないで居たのだ！　彼は彼こそ保護されてもよい間抜けらしい人間だと實際に考えて居た……そして半ばはそれが爲めに彼を好んだのである。若しバークリンが彼の隣に腰掛けていもゐたなら彼は指でもつて彼の肋骨を突くか肩を敲くかしたであらう。その格で彼は卓越しに彼の方へ眴ばせしたり低頭いたりして見せた……併し彼とネヴダーノフの間には第一にマルケーロフが暴風雨雲のやうに坐つて居り、其次にはソローミンが坐つてゐた。それにも拘らずゴリユーシユキンはバークリンが何か云ふ度毎に痙攣的に笑つた。腹の上を敲き、青味がゝつた齒齦を露出しまでして、話のまに笑つた。バークリンは直ぐに彼の望みの事を見てとつた。そしてあらゆる物を罵倒し始めた。(それは彼にとつて頗る快適な仕事であつた)——あらゆる事物とあらゆる人間を罵倒し始めた。保守黨、自由黨、官吏、辯護士、裁判官、地主、地方會議、地方集會、モスクワ、ペテルブルグ！

『さやう、さやう、さやう、さやう、』とゴリユーシユキンは口を容れた。『如何にも、如何にも！

早い話が此處の市長は、全くの驢馬だ！　助からぬ愚物だ！　私は何かと彼の男に話したが……併し一言も通じない。彼の男は又吾が知事と同樣だ！」

『君の方の知事は馬鹿ですか？』とバークリンが訊ねた。

『彼奴は正しく驢馬ですよ！』

『君はいつか氣付きましたかね。その男がぶう〳〵言つたり、ひゆん〳〵言つたりするのに』

『何です？』とゴリユーシユキンは一寸まごついて訊ねた。

『はあて、君は知りませんか？　露西亞ではわが偉大な文官等はぶう〳〵言ひ、それから偉大な軍人等は鼻からくん〳〵物を言ふのです。が、ぶう〳〵言つたり、くん〳〵云つたりするのを一緒にやるのは一番高い地位の人間丈けでさア。』

ゴリユーシユキンは涙がはふり落つるまで笑ひこけた。

『さうです、さうです、』と彼は吶つて云つた、『彼奴は鼻聲で物を言ふ……彼は軍人です！』

『へん、此ののろまめ！』とバークリンは心の中で考へてゐた。

『あらゆる事物が吾々の眼には腐つて見える、諸君の欲する處へ進み給へ』とゴリユーシユキンは少し經つてから叫んだ。『あらゆる事物が腐つてゐる、あらゆる事物が！』

『最も尊敬するカピトン・アンドレーイチ、』

とバークリンは同情する樣な調子で言つた――（彼は丁度ネヅダーノフにかう囁いてゐる處であつた、『何だつてあんなに腕を周圍へ動かし通しでゐるだらう、上衣の腋下が窮屈すぎでもするやうにさ』）――『最も尊敬するカピトンアンドレーイチ、全く君、半端な處置は現在何の役にも立たないんだよ！』

『半端な處置！』とゴリユーシユキンは突然笑をやめて獰惡な表情を裝ひながら叫んだ。

『現在に於てはたゞ一事あるのみだ。それを根柢から引拔く事だ！　ワシャ飲め。野良大飲めッ！』

『この通り私は飲んで居りますよ、カピトン・アンドレーイチ』と番頭は盃をぐつと飲み乾しながら答へた。

ゴリユーシユキンも亦一杯引かけた。

『彼奴が爆發しないのは如何したことだらう？』とバークリンはネヅダーノフに囁いた。

『それをするのは實行にありさ』とネヅダーノフが應じた。

併し醉つてゐるものは番頭ばかりではなかつた。酒氣は次第に皆の體軀に廻つた。ネヅダ

ーノフもマルケーロフもソローミンまでも次第に談話の中に引き引れられた。

先づ最初に、ネヅダーノフは自分の性格を保持しないことに對して、何事も實行しないことに對して、一種の侮辱と一種の苦痛を身に感じながら今や徒らに言論を弄ぶ事を止むべき時、「實行」すべき時の到來したことを主張し始めた——彼は『今や正に岩床に到着した！』事を仄めかしさへした。それから彼は自家撞着してゐることも識らずに、彼等の頼みとするに足る實在要素の何であるかを摘示せよと訊ね始めた——彼自身は何物をも見ることが出來ないのだと揚言し始めた。社會に同情なく、人民には理解がない。

彼は勿論何の答を得なかつた。與へらるべき答がなかつたからではない、各自が今はたゞ自分自身の爲めに話つてゐたからである。マルケーロフは持前の單調な、いかにもだるさうな、怒氣を含んだ聲でうなりつゞけて居た。（『まるでキャベツでも剉んでゐるやうだ』とバークリンは言つた）全く彼の言つてゐることは少しもはつきりしなかつた。『砲兵』といふ言葉が一寸跡切れた間に聞き分けられた……彼は恐らくその編制上に見出した缺點に論じ及ぼしてゐたのであらう。獨逸人と傳令使とが亦卷添を喰つてゐるやうであつた。ソローミンさへ猶豫に二つの遣方があることを說いた。即ち猶豫してそして何事をも成さぬことゝ、事物を

推し進めながら猶豫することがそれである。

『漸進的と云ふ事は吾々にとつて何等の効果もない』とマルケーロフは陰氣に言つた。

『漸進的と云ふ事も是迄は上から致された』とソローミンは說いた。『吾々は下から行はうとしてゐるのだ』

『駄目だ、畜生、それぢや駄目だ！』とゴリユーシキンは狂暴に切り込んだ。『吾々は即刻實行しなければならぬ、即刻だ！』

『實際、君は窓の外に跳び出し度いのか？』

『跳び出すのだ！』ゴリユーシキンは喊いた。『僕はやる！　それでワシャもやる！　僕が言つたら奴は跳び出すのだ！　ワシャエ、？　跳ぶだらう、跳ばないか？』

番頭は三鞭酒を一杯飲み乾した。

『貴方のお供なら何處へでも致します、カピトン・アンドレーイチ。私はその事に就ては二度と考へ直す事は致しませぬ』

『それで澤山！　俺は羊の角の中にお前を拗ぢ込んでやらう』

やがて醉漢の言葉の中に「お定りのごたくり」として知られたことが始まつた。力强い叫

喚喧囂の聲が起つた。

靜かな穩かな秋の空にくる〳〵と渦を卷きながら降り交ふ先驅の雪片のやうにゴリユーシキンの家の食堂の熱した雰圍氣の中では言葉が互に飛び交ひ、轉び合ひ、衝き合ひ初めた――あらゆる種類の言葉――進歩、政府、文學、租稅問題、敎會問題、婦人問題、法庭問題、古典主義、現實主義、虛無主義、共產主義、國際的、僧侶的、自由的、資本的、行政、編制、社團、果ては結晶といふ言葉さへも取り交されたのだ！　ゴリーユシキンを熱中せしめたらしいのは正に此の喧囂であつた。事の眞の要點は彼にとつては玆に存する樣であつた…彼は勝ち誇つてゐた！

『さア來た！　控へて居れ、さもないと殺すぞ！……カピトン・ゴリユーシキンがやつて來た！』番頭ワシャはとう〳〵酩酊して自分の皿に對して鼻嵐を吹きかけたり、べら〳〵しやべつたりする程になつた。かと思ふと突然氣でもふれた人のやうに叫んだ『一體「Progymnasium」の意味は何だい？』

ゴリユーシキンは突如として起ち上つた。そして野卑な兇猛と自惚の表情に、人知れぬ疑懼の念を抱いてゐるやうな、更にその上驚怖をさへ抱いてゐるやうな感情の表情を交へた一種妙な表情をした眞赤な顏を振り仰がせながら彼は賊いた。『俺はもう千圓犧牲にしやう！

ワシャ、それを直ぐに出せ！』これに對してワシャは低い調子で應へた。『素張らしくおやりだ！』

青ざめて汗をにじませたパークリンは（一時間の最後の四分の一の間彼は番頭と飲みつくらしてゐた）自分の席から跳び上つて兩方の手を高く頭の上に揚げながら調子外れに叫んだ『犧牲！　と言つたな、犧牲と！　おい、それは神聖な言葉の下落だぞ！　犧牲！　誰も汝の足下などへ行くものはないぞ、誰も汝の命ずる任務を果すべき力を持つものはないぞ、少くとも此處にゐる吾々の中にはゐないぞ――それだのに此の無骨者は、此の下劣な金囊はその眼れ上つた利得に見とれてやがる、たつた一掴の金を撒き散らす、それで犧牲呼はりだ！　それで感謝を求める、月桂冠を待ち設けてゐる――陋劣な野郎だ！』ゴリユーシキンはそれを聽かなかつたか或はパークリンの言ふことが解らなかつたか、又は恐らくその言葉を冗談と思つたであらう。彼は又しても喊いた。『さうだ！　一千ルーブル！　カピトン・アンドレーイチの言葉は神聖だぞ！』彼は忽ちポケットへ手を突き込んだ。『さア見給へ、此處に現金がある！　そら、それを懷中し給へ。そしてカピトンを記憶し給へ！』彼は興奮のある點へ達するや否やまるで小供のやうに自分の事を第三者の地位に置いて語るのが常であつた。ネヅダ

ーノフは酒のにじんだ着物にぶつけられたその手形を拾ひ上げた。その後は何等の言ふべき事もなく且つ夜も既に更けてゐたので彼等は皆起ち上つて、帽子を取つた。そして出かけた。

外氣の中へ出ると彼等は皆眩暈を感じた。就中バークリンがさうであつた。

『さて、吾々はこれから他處へ行くんだね』

と彼は多少の困難を覺えながらも分明發音しやうと力めた。

『君達は何處へ行うか知らないが』ソローミンが答へた。『僕は家へ歸るんだ』

『君の工場へか？』

『さうだ』

『今頃、夜中に、歩いて？』

『何事がある、此處には狼も山賊も居やしない、それに俺は何ともないから歩ける。夜歩くのは涼しいよ』

『併し、君、三哩だよ！』

『よろしい、四哩だつて何だ。さよなら、諸君！』

ソローミンは上衣のボタンを掛け、帽子を眼深に被り直して卷烟草に火を點じた。そして街路を大跨に歩き出した。

『だが吾々は何處へ行くのかね？』とバークリンはネヅダーノフの方を向いて言つた。

『僕は彼の處へ行くのだ』彼はマルケーロフを指差した。マルケーロフは腕を胸の上に組み合せてびくともせずに立つてゐた。『僕等には此處に馬と馬車がある』

『あゝ、そいつは結構……ぢや僕はねえ、坊つちやん、オアシスへ行くんだ。フオミユンユカとフイミユシユカの處へさ。それから君は僕の言ひ度いと思ふ事を知つてゐるかね、坊つちやん。彼處に狂人が居れば此處にも狂人がゐるつて事さ……あの狂人は、あの十八世紀の狂人は二十世紀のよりは露西亞の中心に近づいてゐる。さよなら、諸君。僕は醉つてゐる、怒つてくれ給ふな。一寸一と言云はせてくれ給へ！　世の中に僕の妹のスナンヂユリヤより深切で善良な女はゐないよ。彼女が何んなものだといふ事は諸君にも分つたらう――駝背だ、そして彼女の名前はスナンヂユリヤといふのだ！　その名前は此の世ではいつも何ういふ事になつてゐると思ふ！　併し彼女の名前としては全く相當したものだ。セント・スナンヂユリヤといふのは誰だか御存じかね？　監獄を見舞つて囚人や病人の傷を治した德望のある婦人

だ。ぢやさよなら！　さよなら、アレキセイ――憫まれる男！　それから自ら士官と稱する君……ウフ！　人間嫌のお方！　さよなら！』

彼は彼方へぐらり、此方へぐらりと跛引きながらオアシスの方へと足を引擦つて行つた。マルケーロフとネヅダーノフとは馬車を殘して置いた立場を捜して馬を附けるやうに命じた。そして半時間の後には彼等は大道を驅つてゐた。

二十一

空は低い雲に覆はれてゐた。眞の闇夜ではなく、前方には轍の跡が路上に浮き上つて見へてはゐたけれども、右や左のあらゆる物はひとしく影の中にあつた。そして離れ〴〵になつた物象の輪廓は大きな闇の斑點の入り亂れた中に一緒に融け合つてゐた。それは薄暗い、安心のならぬやうな夜であつた。濕つぽい疾風となつて吹き荒ぶ風は、雨の香と廣い麥畑の香とを送つた。地界標となつて居る槲の木の森を過ぎて、横道へ轉じなくてはならぬ際に、彼等は馬車を驅るのに一層の困難を覺えた。狹い岐路は時として全く失はれるのであつた……取者は馬の歩みをます〳〵徐くした。

『路を失はなければいゝが、』とその時迄默つてゐたネヅダーノフは口を切つた。

『いや、路を失ふことはない！』とマルケーロフが答へた。『二つの不幸が一日の内に到來しはしないよ。』

『どうして、最初の不幸は何だつたかね？』

『何だつたつて？　でも吾々は空しく一日を費してしまつたぢやないか――君はそれを何事とも思はないかい？』

『さう……勿論……あの畏ろしいゴリューシキンの奴！　吾々はあんなに酒を飲むんぢやなかつたね。僕は今頭が痛い……恐ろしく』

『僕はゴリューシキンの事を言つてるんぢやない。彼奴は兎に角幾何の金を吾々に投じたのだから、吾々の訪問は少くとも何物かを得たのだ！』

『ぢや君はパークリンが彼の……謂ゆる鸚鵡の處へ吾々を案内したことを悔んではゐないのかね？』

『それには悔むべき事はちつともない……かと云つて喜ぶべきこともない。僕はあんな瑣々たることに利害を考へるやうな連中の一人ではない……僕はそんな不幸に就て言つてゐるん

ぢやない』

『それぢや何だね？』

マルケーロフは何の答もしなかつた。彼は體を包みでもするやうに隅つこにちこまつて居て一寸此方へ顔を向けたばかりであつた。ネヅダーノフは彼の顔をはつきり見る事が出來なかつた。唯彼の髯が黑い横線となつて突き出してゐたゞけである。併し今朝以來彼はマルケーロフの心には觸れてはならぬ或物――ある漠然たる人知れぬ憤懣があるといふ氣づいてゐた。

『言つてくれ給へ、セルゲイ・ミハローキチ、』と彼は久しい沈默の後で口を開いた、『君は今僕に讀めと言つて渡したキスリヤーコフ君の手紙を心から感嘆してゐるのかね？　御承知だらうが――言方の粗略かも知れんけれど――あれは君全くくだらん事だよ！』

マルケーロフは反り返つた。

『先づ第一、』彼は忿然たる聲で始めた。『僕はその手紙に就いてはちつとも君と意見を共にしない。僕はその手紙を頗る注意すべき……忠實なものだと思ふよ！　第二にキスリヤーコフは苦心慘膽してゐる。更にそれ以上に彼は信じてゐる。彼は吾々の目的の存在を信じてゐ

る。彼は革命の到るを信じて居る！　僕は君に一言言つて置かなくてはならん事がある。アレキセイ・ドミトリエキチ、僕の見るところでは、君は――君は吾々の目的に對して頗る微溫いやうだぜ。君はそれについて信念を持つてゐない！』

『何うしてそんな事を思ふんだね？』

とネヅダーノフはゆつくりと明らかに言つた。

『何を？　だつて、君の發するあらゆる言葉と君の全體の態度がさうなのだ！　今日ゴリユーシユキンの家で、吾々が恃みとするに足る要素が分らぬと言つたのは誰かね？　君だ！　試みに數へ擧げて見せろと吾々に求めたのは誰かね？　君だ！　そして君のあの友達あの齒を剝き出す尾無し猿の幇間のパークリン君が眼玉を天の方へひつくり返して、吾々の中には一人も犧牲となり得るものがないと揚言し始めた時、彼の後押をしたのは誰れだ、贊成の意味で默頭いたのは誰れだ？　君ではなかつたか？　一體君は何が望ましいんだか言つて見給へ。そして如何な事を君が知つて居るのか自分に考へて見たまへ……つまり君の事件だ……併し僕は自己の信念に眞實なる爲めに、それに裏切しない爲めに、自分の生活を快いものにするあらゆるものを、戀の幸福までも抛つ事の出來る人間と知つてゐるよ！　あゝ、今日は、君は

それをする事が出來ないのだね、勿論！』

『今日？　何故今日と云ふんだね？』

『おい、瞞かしてはいかんよ、後生だから、ねえ、幸福なドンファン、挑金孃の冠を被つた戀男！』マルケーロフは前に馭者の居ることなんかすつかり忘れ果てゝ叫んだ。馭者は腰掛臺の上で振り返りはしなかつたが、一伍一什をはつきりと聽き取る事が出來たのである。が、實際はその瞬間馭者は彼の背後に座つてゐる紳士達の間に演ぜられてゐる口論よりも何よりももつと遙かに道路の事に氣を奪はれてゐた。そして彼は用心して寧ろびく〳〵もので中央の馬を急き立てたのである。馬は首を後ろへ打振り立てゝ馬車を、その邊に無かつた筈の岩鼻のやうなところから滑り落させやうとした。

『失禮だが、僕には君の言ふ事がさつぱり解らない』とネヅダーノフが言つた。

マルケーロフは不自然な、腹癒らしいせゝら笑ひを與へた。

『僕の言ふことが解らない！　ハッ！　ハッ！　ハッ！　僕はすつかり知つて居るよ、吾が好男子先生！　僕は昨日君が誰れと戀の一幕を演じたか知つてゐるよ。君の美貌と甘言とに迷はされた人を知つてゐるよ。君を自分の部屋に導き入れた女を知つてゐるよ……夜の十時過ぎ

に！』

『旦那！』と馭者は突然マルケーロフを呼んだ、『手綱を執つて下さい……私は降りて樣子を見ますから……路を脱したらしう御座います……そこに谷らしいものが見えます、それとも何か……』

馬車は眞實片一方へひつくり返りさうになつてゐたのであつた。マルケーロフは馭者が手渡した手綱を掴んだ。そして前のやうに聲高に續けた。『僕は君を責めるんぢやないよ、アレキセイ・ドミトリエヰチ！　君はうまくやつたよ……勿論。君は正當だつた、僕はたゞ吾々の目的に對して君が微溫いのは僕は怪しまないといふ事をだけ言つて置く。改めて言つて置くが、君は心の中に他の或る物を欲してゐるよ。そして更に改めて言つて置くが、僕一個の考では人は少女の心を惹きつけるものを豫め推量する事が出來るか、若しくは彼等の求むるところのものを了解することが出來るのだよ！……』

『君の言ふことがもう解つた、』とネヅダーノフが口を切つた。『君の煩悶が解つた。僕達を探偵して時を移さず君へ通告したものが誰かと云ふ事も僕は推量してゐる……』

『此の場合そんな事は何の手柄にもならない、』とマルケーロフはネヅダーノフの言ふことも

聞かない態をして、故意と考へ深さうに一語一語を引延しながら續けた。『何も精神上か肉體上の異常な性質だと云ふではなし……否！　それはたゞ……凡て純當でない子供の惡運なんだ……凡て……私生兒のね！』

最後の文句をマルケーロフは調子外れに口早に云つた。かと思ふと、急に死のやうな靜かさとなつた。

ネヅダーノフは闇の中で眞蒼になつたのを感じた。そして顏がピク〳〵と痙攣した。彼はマルケーロフに飛びついて頸を引掴まうとするのを辛うじて制することが出來た……『此の侮辱は血で洗はねばならぬ、血で……』

『路が分りました！』と馭者は右側の前の車輪のところへ姿を現はしながら叫んだ。『少し許り勘違へしてゐました、あんまり左の方へやり過ぎたのです……もう何でもありません！直ぐに着きます。一哩とは御座いません。どうぞ靜かにお坐り下さい！』

彼は馭者臺に攀ぢ上り、マルケーロフから手綱を執つて馬の首を向け直した。……馬車はがた〳〵と二度ばかり激しく搖れてから前よりは一層安らかに滑かに進んだ。闇は地を離れて上へ揚つて行くやうに見えた。烟の匂がした。前方には小丘らしいものが横はつてゐた。

やがて灯が一つぽつちりと瞬いて見えた……そして消えた……更に別の灯がちらついた……犬が吠へた……

『私共の小屋です、』と馭者が言つた、『ほら行け、可愛い奴共！』

燈火はいよ〳〵多く彼等の目に映じ來つた。

『あの侮辱の後で、』とネヅダーノフはとう〳〵口を開いた。『君は容易に解るだらう、セルゲイ・ミハーロヰチ、僕が君の家で一晩たりとも過ごす事は出來ないといふことが。だから僕にとつては不愉快ではあるが、餘義なく僕は君にお願ひするが、君が家へ着いたらば馬車を僕に貸してくれ給へ、町へ歸れるやうにね。明日は宿を見つける手段を講じやう。それから僕は君が期待してゐる通りの通知を君に送らう』

マルケーロフは直ぐには答へなかつた。

『ネヅダーノフ』と彼は突然低い、併し絶望的な聲で言つた。『ネヅダーノフ！　後生だから僕の宅へ來てくれ給へ、僕はたゞもう兩膝ついて君の赦を乞ふだけだ！　ネヅダーノフ！忘れてくれ給へ……アレキセイ！　忘れてくれ給へ！　あゝ誰でも好い僕の此の慘めさを感じてくれる人があつたならなあ！』マルケーロフは拳で胸を敲いた。そしてその胸から發す

るやうに思はれる洞な唸り聲で彼は云つた。『アレキセイ！　心を大きくしてくれ給へ！さ、握手だ！……まげて許してくれ給へ！』

ネヅダーノフは手を差出した――躊躇ひながらも――彼は手を差出した。マルケーロフはそれを握り緊めて、泣き出さんばかりであつた。

敵者はマルケーロフの家の石段に馬車を停めた。

『ねえ、アレキセイ』とマルケーロフはそれから十五分の後自分の部屋で彼に話してゐた。……『ねえ兄弟』彼は失張り此の親愛な言葉を用ゐて彼に話しかけてゐた。マルケーロフが彼の成功せる競爭者である事を發見して、たつた今それに手嚴しい侮辱を與へ、又それを殺して寸々に引裂かうと覺悟してゐたその相手の者に對する此の情愛深い親しさの中には、挽廻すべからざる拒否の色と謙讓な苦い歎願とそれから亦一種の要求とが含まれてゐた……ネヅダーノフは相手同樣な親しい態度でマルケーロフに話しかけ始めて、その要求を認め得たのであつた。

『ねえ、アレキセイ！　僕はたつた今戀の幸を排斥した。身を提して吾が信念の爲めに盡すためにそれを唾棄した……それは讒語だ、法螺だ！　僕は未だ嘗てさういつた事を持ち出した事がなかつたのだ、僕には何も今更棄てなければならぬものがなかつたのだ！　僕は何の賜物もなしに生れて來た、そして今に到るまで矢張同樣なのだ……が、恐らく、さうあるのが正當なのだらう。僕はそれを得る事が出來ないから、他の何事かをしなくてはならんのだ！君は由來二者を結合することが出來る……愛し愛される事が出來……又同時によく目的の爲めに盡すことが出來るんだから……まあ、つまり立派な人間なんだ！　僕は君が羨ましい……僕にはそれがないんだからね。僕には出來ない。君は幸福だ！　君は幸福だ！　僕には出來ない。』

マルケーロフは氣壓されたやうな聲で低い椅子に腰かけたまゝ、頭を下げ、腕を兩側にだらりと垂れながらそれだけの事を云つた。ネヅダーノフは彼の前に立つて夢見心地になつてゐた。そしてマルケーロフに幸福だと云はれたけれども、彼は幸福を見も感じもして居なかつた。

『僕は若い頃に欺された事がある』……マルケーロフは言續けた、『その女は立派な娘だつた、而も僕に寢返り打つた……そして誰の爲めに？　一人の獨逸人の爲めだ！　傳令使の爲めだ！　が、マリアンナの方は――』

彼は口を噤んだ……初めて彼は彼女の名を口走つた。しかもそれは彼の唇を燒くやうであつた。

『マリアンナが僕を欺いたのではなかつた。彼女は僕に氣がないといふことを正直に打明けた……又どうして彼の女が僕などを好くものか。まあ、彼の女は自分から進んで君に身を投じたのだ……ふむ、そんな事を何で心にかけやう。彼女の自由ぢやないか？』

『おい、君、君！』とネヴダーノフは叫んだ、『君の言つてるのは何だね？　その自分から投じたと云ふのは？　妹さんが如何な事を君に書き送つたか知らないが、僕は誓つて——』

『僕は肉體的の事を言ふんぢやない。彼女は道德的に身を投じたのだ、心から、魂から。』とマルケーロフは遮つた。彼はネヴダーノフが叫聲を發した事を何となく快く思つたことは明らかだ『兎に角彼女はうまくやつたのだ。が、僕の妹に至つては……勿論彼女は中傷しやうといふ意志は有つてゐなかつたのだ。……少くとも、彼女はそれに就いてはどの道意に介しては居なかつたのだ。が併し彼女は君を憎まなくちやならない筈なんだ。隨つてマリアンナをもさうなんだ。彼女は虛言をついてはゐなかつた……がそこには又彼女には彼女の理由が充分あるのだ！』

『さうだ』ネヴダーノフは獨り考へた、『彼女は僕等を憎む』

『萬事此上なく好都合』とマルケーロフは位地を變へすに續けた。『僕にはもう退却の道が絶えたんだ。今は僕を阻むものは何にもない！　ゴリユーシキンが阿呆者だとて心配は無用何も重大なことでもない。それからキスリヤーコフの手紙……あれは恐らく愚にもつかぬものであらう……それにしても吾々はあの主要な點だけは採つて考察せなくちやならない。彼に依ると、あらゆる事が到る處で準備されてゐるのだ。君は恐らくそれを信じまいがね。』

ネヴダーノフは返事をしなかつた。

『君が正しいのだ。恐らく。併しねえ君、若し凡ての事が、絶對に凡ての事が準備される時まで待つてゐるとしたら、吾々は決して着手することが出來ないだらう。凡ての關係を豫め考へて見た日には何か知ら面白くないことが出てくるに違ひない。例へば、吾々の先輩が農奴の解放を完成した時には、彼等は此の解放の一つの結果として金貸の地主共が擧つて蜂起するだらうといふ事を豫想する事が出來たか？　その地主といふのは一クオーターの黴臭いライ麥を六ルーブルで農夫に貸して居たのだ。そして先づ（こゝでマルケーロフは一本の指を折つた）勞働させて六ルーブル全部と、その上（マルケーロフは第二の指を又折つた）善良なラ

イ麥を一クオーターたつぷりと、それから(マルケーロフは第三の指を折つた)かて丶加へて利息まで強請り取るのだ――實に彼等は百姓共から最後の餘瀝まで絞りに取るのだ！　吾が解放者は彼等　蜂起を豫想する事が出來なかつた、これは君も承知しなくちやならぬ！　併し、よし彼等がそれを豫想し得たとしても彼等は眞直に百姓共を解放するやうにしたに違ひない。凡ての關係を顧慮しないやうにしたに違ひない！　それで僕も決心したのだ！』

ネヴダーノフは訝かしげに、もぢ〳〵しながらマルケーロフを諦視めた。併しマルケーロフは隅の方に眼を外らした。彼の眉毛は狹まつて彼の眼を覆ひ隱した。彼は唇を咬み髯を銜へた。

『さうだ、僕は決心したのだ！』と彼は腕を膝の上で一振り振つて繰返した。『僕は强情な人間だ、ねえ君……僕は決して半端な小露西亞人ではない』

それから彼は起ち上つた。そして脚が身にそぐはぬやうによろめきながら彼は寢室へ這入つて行つた。そして其處から硝子を嵌めたマリアンナの小さな肖像を持つて來た。

『これを取つてくれ給へ、』と彼は悲しげな併し確乎した聲で言つた。『いつぞや僕が拵へて置いたのだ。頗る不味い描き方ではあるが、見給へ、似てると思ふが』(そのスケッチは鉛筆で横

顏を描いたもので實際似てゐた。)

『これを受取つてくれ給へ、兄弟。これが僕の最後の讓物だ。此の肖像畫と同時に僕は凡ての僕の權利を君に捧げたい……僕は何物も所有してゐなかつた……併し君、アレキセイ、凡てのものだ！　僕は君に凡てを與へるのだ、アレキセイ……そして彼女を、ねえ、彼女は善良な……』

マルケーロフは口を噤むだ。胸の鼓動が人目にも見えた。

『それを受取り給へ。君は僕に對して怒つてはゐないだらう？　アレキセイ。ぢや受取り給へ。僕は今何物も有つてゐない……僕には要らないものだ。』ネヴダーノフは肖像畫を取つた。併し奇妙な感情が彼の胸を壓迫した。

彼には此の贈物を受取る權利がない樣に思はれた。マルケーロフにしてもし、彼れネヴダーノフの胸中を知つてゐたなら、彼は恐らく此の肖像を與へなかつたに違ひない。ネヴダーノフは金紙の臺紙に貼り付けられ、黑い枠の中に念入りに嵌められたその小さな丸い紙片を手には取つたがさてそれを何うしてよいか分らなかつた。『吾が掌中に一人の人間の全生命が握られてゐる』こんな考へが彼に起つた。後はマルケーロフが作つてゐた一つの犧牲を事實

にしたのだ。併し何故、何故それが彼に對して爲されたか？　彼はその肖像を返へさうか？　否！　それは一層殘酷な侮辱となるであらう…しかもつまりはその顏は彼にとつて懷かしいものではないか？　彼は彼女を愛してはゐないか？

ネヅダーノフは內心多少の疑懼の念を起しながら眼をマルケーロフの方へ向けた…彼はネヅダーノフの心を讀まうと思ひながら見守つてゐたのではないか？　ところがマルケーロフは矢張り隅つこを見入りながら髯を咬んでゐた。

老僕が蠟燭を手にして部屋の中に這入つて來た。

マルケーロフは喫驚した。

『もう寢る時間だ、アレキセイ！』彼は叫んだ。『朝になつたらいゝ工夫も出よう。僕は君に馬車を貸して上げるから家まで乘つて行き給へ、ぢやさよなら、兄弟』

『それからお前もさよなら、爺さん！』と彼は老僕の方を向いて彼の肩を敲きながら突然言ひ足した。『僕の事を親切に思つておくれ！』

老僕は驚きのあまり危ふく燭臺を取り落さうとした。そして主人に注いだ彼の眼はいつもの呆心とは別樣な――更にそれ以上の――或物を現はしてゐた。

ネヅダーノフは自分の部屋へ這入つた。彼は惘れむべき狀態にあつた。彼の頭は酒の爲めに猶も痛んでゐた。耳の中がわん〳〵言つた。眼を閉ぢても色々の光がその前に輝いてゐた。ゴリユーシキン、番頭のワシヤ、フオミユシユカ、フイミユシユカ、それらの人達が彼の前にぐる〳〵廻つてゐた。遠くにマリアンナの像がぼんやり見えたが近くへ來さうもなかつた。彼が自ら言つたり爲たりした事が凡て虛僞で矯飾で、餘計事で、瞞かしの讒語であるかのやうに思はれた…そして爲さねばならないこと、向つて努力せねばならぬ標的は何處にも見出されずに、錠と閂とに閉されて達せられずに、底もない坑の中に葬られてゐるやうに思はれた…

彼は起き上つて、マルケーロフの處へ行つて、『君の贈物を取り返してくれ給へ、これを取り返してくれ給へ！』と言ひたさの絕間ない慾望に惱まされてゐた。

『あゝ、ああ！　人生は何と云ふ忌はしいものなんだらう！』彼は最後にかう叫んだ。

翌朝早く彼は出發した。マルケーロフは既に百姓共に取り圍まれて石段の上に立つてゐた。彼が百姓共を呼び集めたのか、又は百姓共が自ら寄り集つたのかネヅダーノフには分らなかつた。マルケーロフは極めて簡單に而も素氣無く彼に暇を告げた…併し彼は或る重要

な通告を百姓共にしやうとしてゐるやうであつた。件の老僕は相も變らぬ顏容をして石段のほとりをぶらついてゐた。

馬車は速かに町を通り拔けた。そして猛烈な速度で驅けて間もなく豁かな田園へ出た。馬は昨日と同じであつたが、馭者はネヅダーノフが宏大な家に住んでゐる爲めかそれとも他に何か理由があるのか、ウオッカがしつかり飲めるものと思ひ込んでゐた……誰でも知つてゐることだが馭者がウオッカを飲ませられたか、又はそれを確信して期待してゐる時には馬は一生懸命に馳けるのが常である。爽快な好い天氣であつた。雲は空高く跳んでゐた。强く身に應へる微風が吹いて居た。路は昨日の雨に洗はれて埃も立たなかつた。柳の葉がさらさらと鳴り、きら〳〵と輝き、ざわ〳〵ともつれ搖いだ。あらゆるものが動いてゐた。飛び立ちさうにしてゐた。、、、たけりの啼く聲が綠の谷を越えて遠い傾斜から嘯くやうに聞えて來た。啼き聲に翼が生えてゐて飛んでゝも來るやうであつた。牡牛は日光を浴びて美しい光澤をしてゐた。遮るものもない地平線の彼方に黑い蚤の樣なものが動めいてゐた――それは休めてあつた畑に二度目の鋤き入れてゐる農夫共であつた。

けれどもネヅダーノフはそれ等を一々見もせずに過ぎた。シブヤーギンの領地へ乘り込んでゐるといふ事すら念頭になかつた。

彼は、、、しつこい物思ひに惱まされ切つて居た。

それでも、家の屋根と、二階と、マリアンナの部屋の窓とを見た時には彼は驚いた。『さうだ』彼は自分に言つた。そして心臟の邊が熱くなるのを覺えた。彼の男の言つたのは本當だ。後女は善良な娘だ。そして僕は彼女に惚れてゐる。』

二十二

ネヅダーノフは大急ぎで着物を着更へて、コーリヤに學課を敎へに出かけた。食堂でシブヤーギンに遭ふと彼は冷かな慇懃さを以てネヅダーノフに挨拶し、口の中で『愉快な訪問でしたらう』と呟きながら自分の書齋へと這入つて了つた。此の政治家はその外交官的な心の內に既に決する處があつた。

それは此の家底敎師は「あまりに極端な革命家であるから休暇が終り次第直ぐ樣ペテルブルグへ逐ひ歸さう、そしてそれと同時に彼を監視してゐやうといふのである……（Je n'ai pas eu la main heureus cette fois-ci"（流石の僕も今度と云ふ今度はうまくやり了せなかつた）と彼

はひそかに思つた。が併し"J'aurais pu tomber pire"（僕はもつと不幸な目に陷つたかも知れぬ）とも考へた。ネヅダーノフに對するワレンチーナ・ミハーロウナの感情はもつと〳〵手强く、而も決然たるものであつた。彼女はもう我慢がならなかつた。彼――此のちつぽけな、けちな書生つぽめ！が自分を辱かしめたのだ。マリアンナに對する圖星もちやんと當つた。廊下で彼女とネヅダーノフとの行動を嗅ぎつけたのは彼女、即ちワレンチーナ・ミハーロウナであつたのだ……この立派な貴婦人が斯樣な所爲に超然たり得る譯がなかつたのだ。ネヅダーノフの不在の續いた二日の間、彼女はその『無分別な』姪に對して何事もそれと明らかに言はなかつたけれど、自分は何事も知つてゐるのだといふ事を再三マリアンナに當付けた。若し自分がこのやうに半ば侮り、半ば憐れむやうな心がなかつたら、どんなに怒つたか知れないといふ事を當付けた。彼女の顏には抑へつけた內心の侮蔑が漲つてゐた。彼女の眉はマリアンナと顏を合せたり、話をしたりする度毎に多少の皮肉と同時に多少の憐憫とに釣り上つた。彼女の麗はしい眼は優しい當惑と痛ましい嫌厭とを含んで、その氣儘な少女の上に注がれた。その少女といふのはひたすら自分の「空想と非常識」とに驅られて取るにも足らぬ一人の大學生と……暗い部屋で……接吻するまでに立至つたのだ！　哀れなマリアンナ！　彼女の嚴正

な高慢な唇は未だ嘗て男の接吻の味を知らなかつたのだ！

とは云へワレンチーナ・ミハーロウナはその發見した事柄に就ては何等の暗示も良人に與へることはしなかつた。唯彼女は良人の面前で意味ありげな微笑を含みながらその事件とは全く無關係な事をちよい〳〵マリアンナに話しかけては自ら滿足した。ワレンチーナ・ミハーロウナは兄に手紙で知らせた事を實際どちらかと云へば後暗く感じて居た……併し大體から見て、彼女はその手紙を書かないで後悔の念を起さないよりも書いて後悔する方を寧ろ喜んだのである。

ネヅダーノフは中食の時、食堂でマリアンナをちらりと見たばかりであつた。彼には彼女が痩せて色褪めて居る樣に思はれた。兎に角その日は彼には彼女は美しくはなかつた。けれども彼が部屋へ這入つて來た瞬間彼を射た彼女の急劇な眼光は直ちに彼の心臟に突き入つたのである。が、一方ではワレンチーナ・ミハーロウナが心の內で、『お目出度う！　上出來！　頗る機敏！』とかう絕えず繰返してゐもゐるやうに彼を諦視めた。それと同時に彼女はマルケーロフが彼に手紙を見せたか否かを彼の顏容から見出さうとした。そして結極見せたといふ事に決めた。

シブヤーギンはネヅダーノフがソローミンの監督する工場へ行つたといふ事を聞いて「非常に顯著な特色を示してゐるその製造業」に就いて種々な質問を試みた。併し嘗てシブヤーギンは此の青年の應答に依つて彼は實際何物も其處で觀察しなかつたといふ事を信じたのでそんな未熟な人間から價値ある報告を得ようと期待した事を自ら責めるやうな態度をしながら再び莊重な沈默に陷つた。彼等が食堂を去る時マリアンナはネヅダーノフに囁いた。『あの古い樺の木の森の中に私を待つてゐて下さい、アレキセイ。脫けられたら私直ぐに行きますから』ネヅダーノフは『彼女も矢張りマルケーロフ同樣、僕のことをアレキセイと呼んでゐる』と思つた。その親しさは彼にとつては如何に懷かしいものであつたらう。それと同時にそれは又聊か怖しくもあつた。が、若し彼女が俄かにネヅダーノフさんと言つて改めて彼れに話しかけるやうな事をし、彼に對してもつと隔てを置くやうな事をしたら、如何に妙な、如何に訝しいことだらう！　彼はそれこそ自分にとつて慘めな事であらうと思つた。彼は自分が彼女と戀に陷つてゐるかどうか、それを未だに確め得ないのであつたが、併し彼女が彼にとつては貴く親しく、そして必要であるといふことは――さうだ、就中必要であることは――彼の心の奥底から感じてゐるところであつた。

マリアンナが指定した森といふのは年經た樺の木、それも大抵枝を垂れた樺の木が數百本集つて居るのであつた。風は吹き歇まなかつた。長い細枝が束となつて弛んだ擦髮が軟風に嬲られてゆもゐるやうに上下に搖れてゐた。雲は矢張り空の上高く、速かに飛んでゐた。そしてその一團が太陽の面を漂ひ去る時、あらゆる物象が暗ならぬ一樣の彩色を呈するのであつた。やがてそれが漂ひ去るとぱつと輝かしい光の斑點が再び到る處に波立ち動き、影は亂れて明暗の綾を織り出す……木の葉の囁きと動搖は依然として變りなく、祭りの日の歡喜のやうな感じさへ加はつた。丁度そのやうな烈しい歡喜を以て情慾の焰は煩悶の爲めに搔き亂され、暗くされた、胸の中に湧き上るのである……ネヅダーノフの胸の中に去來したところのものが丁度それであつた。

彼は樺の幹に凭れながら待つてゐた。彼には自分の感じてゐる事が實際に分らなかつた。彼は實際それを知らうとも欲しなかつた。彼はマルケーロフの家に於けるよりも尙一層の胸騷ぎと氣輕さとを感じた。彼は何よりも先づ彼女に遇ひたい、彼女と話がしたいと云ふ一念に燃えた。二個の生物を突如として結び付ける鎖の爲めに彼は今しつかと捕へられたのである。ネヅダーノフは船をしつかりと繫ぎ止める爲めに埠頭に投げられる綱の事を思つた：

……綱は一本の杭にぐる〳〵と卷き付けられる。そして船はその場に安定の位地を得る。

港の内！　神の惠み！

突然彼は身顫ひした。程遠い路の上に女の着物をちらりと見とめたのだ。それは彼女であつた。併し彼は彼女が此方へ來るのか彼方へ去るのかはつきり分らなかつた。けれども遂に彼は日向と影の綾模樣が下から上へと彼女の身邊を動き去るのを見た……彼女は近寄つて來るのだ。若し彼女が彼方へ歩み去るのであつたらそれは上から下の方へ動いたであらう。と瞬く間に彼女は彼の間近に、彼の前に立つてゐた。顏は喜びに輝き、眼には優しい光を宿し、唇には微かながらも華やかな微笑を湛へながら立つて居た。彼は彼女の差し出した兩手を握り緊めた。しかし最初は一言も發することが出來なかつた。彼女も亦何にも言はなかつた。彼女はひどく急いで來たので少しく息を切らしてゐた。それにも拘らず彼女は彼が自分を見て喜んだのを非常に嬉しく思つたらしい樣子であつた。

彼女から先づ口を切つた。

『さあ』と彼女は云つた。『貴方が何を決心なさつたのですか、それを早く言つて下さい！』

ネヴダーノフは驚いた。

『決心！……何うして、今の今僕達が決心しなければならぬことがあるんですか？』

『まあ、私の申すことが分つてらつしやるくせに！　何んな話をしてゐらつしたか言つて下さい。誰と會つてゐらしたの？　ソローミンと親しくおなりになつて？　皆話して下さい、皆！一寸待つて頂戴――もつと奥へ這入りませう。好い場所を知つて居りますの……此處の樣に人目に懸る樣な處ぢやありません』

彼女は先に立つて歩いた。彼は丈の高い疎らな枯草を分けながら從順に彼女に附いて行つた。

彼女は自分の思ふ場所へと彼を導いた。其處には暴風に吹き折られた巨大な樺の木が横たはつてゐた。二人はその幹の上に腰を下した。

『さア話して下さい！』と彼女は繰返した。

『ゝ、お目にかゝれて本當に嬉しう御座いますわ、貴方！　私はこの二日が長くて〳〵もう迚も此のまゝで過す事は出來ないかと思ひましたの。ねえ、アレキセイ、私ワレンチーナ・ミハーロウナは私共の話を立ち聽きしたに相違ないと思ひますわ』

『彼女はあの事をマルケーロフへ手紙で知らせてやつたんですね』とネヴダーノフが言つ

た。

『マルケーロフに！』

マリアンナは暫らく默つてゐた。そして次第に顏を赧くした。それは恥かしいと思つたからではない、もつと强い他の感情の爲めであつた。

『腹の惡い邪險な女だ！』と彼女は落ち着いて呟いた。『彼女にはそんな事する權利はない：：：でもそんな事何でもありませんわ！　さア話して下さい皆』

ネヅダーノフは語り初めた：：：マリアンナは化石した樣になつて傾聽した。そして彼が事件の細目を端折りながら大急ぎに話し過ぐるのに氣づいた時にのみ彼女は啄を容れた。しかし彼の訪問中の凡ての細かい出來事が彼女に採つても同樣に興味あるものであつたかといふにさうではない。彼女はフオミユーンユカとフイミユーシカの話には笑はされたが、併しそれを面白くは感じなかつた。彼等の生活は彼女とはあまり緣遠いものであつたのだ。

『丁度ネブカッドネザルの話を聽いてゐるやうですわ』と彼女は註釋を入れた。

けれども、マルケーロフの言つたこと、ゴリユーシユキンの考へたこと（彼女は彼が何ういふ人間であるかといふことは直ぐに悟つたのであるが）就中ソローミンの意見とその人物—

此等が彼女の聞き度いと思ふ事であり且自分に切實に感じられる諸點であつた。『何時？　何時？』——これがネヅダーノフの話してゐる間に絕えず彼女の頭にも起り又口にも上つた質問であつた。と、一方彼は其質問に對する確乎たる答を與へ得べき凡ゆるものを避けるやうに見えた。彼はマリアンナにとつては更に興味のない此等の枝葉の出來事に對して、明らかに手加減を加へて居るのだと云ふ事を自分に氣づき始めた：：：而も話は絕えずそれに歸り勝ちであつた。諧謔な叙述は彼女を戾かしがらせた。懷疑的な又は生氣のない調子は彼女の感情を害した：：：彼は絕へずかの『目的、』かの『問題』に關する事を言つてゐなければならなかつたのだ。その問題に就いてなら、如何に多くの言葉を費しても彼女を退屈させなかつた。ネヅダーノフは彼がまだ大學の學生である以前一夏數人の舊友と共に田舍で日を送つた時の事を思ひ出した。その時の事、彼はいつも小供等に話をして聞かせてゐたが、その小供等も矢張り一定の人物に關する描寫や表白に對しては風馬牛であつた：：：彼等も矢張り行動、事實をのみ要求したのである！　マリアンナは小供ではない。併し彼女の感情の卒直で單純な事は彼等と同一であつた。

ネヅダーノフは熱情と誠實とを以てマルケーロフを讃めた。そしてソローミンに對しては

特別な讃辭を呈した。ソローミンの事に就いて熱心に話してゐながら、彼は何故此の男に對して斯樣な高い讃辭を與へるかと自ら反問した。彼は何も特に優れた事を言つたのではない。實際彼の言說の或物には彼れ、ネヅダーノフの信念とは直接反對のものさへあつた……

『彼は……釣整のとれた人物だ』これが彼の結論であつた。『さうだ、フイミユシユカが言つた樣に事務家らしい冷靜な、堅實な男です。沈着な强固な人物です。彼は自分の必要とする事を知つてゐる。隨て自信を有つてゐるのみならず、人にも信賴の心を起させる。彼には興奮がない……一にも釣整！　二にも釣整！です……それは偉大な事です。僕に缺けてゐるものが正にそれなんですからね。』

ネヅダーノフは口を噤んで冥想に陷つた……と、忽ち彼は肩の處に優しい手先が觸れるのを感じた。

彼は頭を擡げた。マリアンナは氣遣はしげなやさしい眼付をして彼を諦視めてゐた。

『アレキセイ！　如何なすつて？』と彼女は訊ねた。

彼は肩から彼女の手を執た、そして初めてその力强い細い手に接吻した。マリアンナは何うして此の人がこんな優美な氣持を起したらうかと怪しんでゝもゐるやうにつゝこりした。

と、今度は彼女の方が思に沈んだ。

『マルケーロフが貴方にワレンチーナ・ミハローウナの手紙を見せまして？』彼女はとうとう訊ねた。

『さうです』

『そして……何う云ふ風でしたの？』

『彼の男！　彼の男は最も高尙な最も無慾な男です！　彼の男は……』ネヅダーノフは今にも肖像の事をマリアンナに話さうとした――併し彼は自ら抑へた。そしてたゞ『最も高尙な男』を繰返した。

『え、さうです、さうです！』

マリアンナは再び冥想に陷つた。と、突然彼女は二人が腰掛けにしてゐた材木の上に居るネヅダーノフの方へ振り向いて、ひどく興に驅られた樣子で訊ねた。

『では、結局、何う決斷なさいましたの？』

ネヅダーノフは肩をゆすつた。

『だつて、それはもう言つたでせう……何にも……未だですよ。吾々は今暫らく待つてゐな

ければならないでせう』

『暫らく待つんですつて？……何をです？』

『最後の命令を』（『勿論それは虚言だ』とネヅダーノフは獨りで考へた。）

『誰からの？』

『ワシリー・ニコラエキチからのですよ。さう〳〵、それから、オストロデューモフの歸來を待たなくちやなりません』

マリアンナは穿鑿するやうにネヅダーノフを諦視めた。

『貴方はそのワシリー・ニコラエキチと云ふ方とお會ひになつたことがありまして』

『二度會ひました……ほんの一瞥、それ丈けです。』

『何んな人です？……偉い人？』

『何う言つていゝか分りませんな。彼は現在吾々の首領で、凡ての事を指圖して居るのです吾々の運動には訓練がなくては行動することは出來なかつたのです。服從が必要です』（『それも譫語だ、』と彼は心の中で註を加へた。）

『何んな見かけの人です』

『それは、ぶんぐり肥つて、どつしりした陰氣な……カルミックのやうに頰骨の高い……粗末な顏の人です。たゞ眼だけは鋭くて光つてゐます。』

『そして何んな風な口の利き方をなさいますの？』

『あんまり口を利きません、命令するだけです』

『何うしてその人を首領にしたんですの？』

『そりあ、氣性の强い男だからです。何事にも尻込みしない、必要に應じては誰れでも殺してしまふと云ふ風な人間です。それで人に恐れられてゐるのです』

『それからソロームンは何んな方？』マリアンナは一寸息づいてから訊ねた。

『ソロームンも矢張り綺麗ではありません。たゞ小ざつぱりした、質朴な親切な顏をしてゐるだけです。善良な學生の中によく見出される顏ですよ』

ネヅダーノフはソロームンの事は詳かに語り聽かせた。マリアンナは長い長い事ネヅダーノフを見詰めて居た。それから彼女は獨語のやうに言つた。『貴方は善い顏をしてゐらつしやると思ひますわ。貴方と一緒に日を送つたらさぞ樂しいでせうね、アレキセイ』

この言葉がネヅダーノフを動かした。彼は又女の手を執つて唇に持つて行くのであつた。

『そんな儀式張つたことお止しなさいましな』とマリアンナは微笑しながら言つた――彼女は手に接吻される時にはいつも微笑した。

『貴方は御存じありません。私は貴方に白狀しなければならない罪を犯しました。』

『何をしました？』

『あの、お留守に私は貴方のお部屋に這入りました、そして卓の上にありました詩を書いた御本を拜見しまして……』――（ネヅダーノフは喫驚した。彼はその本を部屋の卓の上に置き忘れてゐた事を思ひ出した）――『そして私は白狀致します、私の好奇心を抑へることが出來ずとう〳〵それを讀みました。あれは皆貴方の御作ですの？』

『さうです。だがマリアンナ、私が貴女に對して何んなに忠實で貴方を何んなに信じてゐるかといふ最も強い證據は、貴女に對してどうも怒れないといふ事です』

『、、、どうもですつて？　それでは假令僅かでも兎に角怒つてゐらつしやるの？　それはさうと、貴方は私のことをマリアンナと仰有る――それはそれでよろしいと致しまして、私は貴をネヅダーノフとお呼びする事が出來ません、アレキセイと云はなくてはなりませんの。それはさうと『いとしきものよ。我が死に際しては、』といふ句で始まつてゐる詩も貴方のお作ですの？』

『さうです……さうです。併し何卒止して下さい……苦しめないで下さい』

マリアンナは首を振つた。

『ほんとに陰氣な詩ですわね――あの詩は……二人がお知己になる前にお書きになつたんだといゝんですけど。でも私にわかる限りではあゝ云ふのが本當の詩ですわ。貴方は文學者におなりになつてもよかつたかも知れませんのね。併し貴方は文學よりももつと善いもつと高尚な天職を有つておいでの事を確かに知つてゐます。でも以前のやうに他に何もなさる事のない時にはあゝいふ事にお耽りになるのは大層善い事ですわ』

ネヅダーノフは慌たゞしく一瞥を彼女に與へた。

『さう思ひますか？　さうです、私も貴女に贊成します。他で成功するより此で失敗する方が好いのです。』

マリアンナは衝動的に起ち上つた。

『さうですよ貴方、仰有る通りです！』と彼女は叫んだ、そして彼女の顏全體が歡喜の火と光明と、寛やかな情緒の優しさとの爲めに眞赤に輝いた。『仰有る通りです、アレキセイ！　け

れども私達はまだ直ぐには失敗しないでせう。私達は成功します、必度です――私達は役に立ちます、私達の生命を無益に費しは致しません、私達は人民の中に投じて生活致しませう……貴方は何か商賣の道を御存じですか？　いゝえ？　さう、大丈夫です、私達は働きませう、彼等の爲めに、私達の同胞の爲めに、私達の持つてゐる凡てのものを捧げませう。私は若し必要があつたら料理も致しませう、裁縫も洗濯も致しませう……屹度です、屹度です……そしてそれには何の報酬もありますまい――それでも幸福です、幸福です……』マリアンナは口噤んだ、そして彼女は眼を遠い地平線の上に、彼女の前に展開して居る地平線ではなく、他の見られざる知られざる、彼女にのみ認められる地平線の上に熱心に注いでゐた――彼女の眼は燃えた……

ネヴダーノフは彼女の前に屈んだ。

『おゝマリアンナ！』と彼は囁いた。『僕は貴女には何の價値もない人間です！』

彼女は突然身顫ひした。

『家に歸らなくちやならない時です、もう遲い！』と彼女は言つた。『でないと直ぐ又私達を捜しに來ますよ。ワレンチーナ　ミハローウナは私をもう見捨てゝしまつたのだと思ひます

けれどね。彼女の眼から見ると、私は荒み果てた人間なのですわ！』

此の言葉を發した時にマリアンナが晴やかな幸福な顏容をしたのでネヴダーノフも亦彼女を見て微笑せずにはゐられなかつた。そして同じ事を繰返した。『荒み果てゝゐる！』

『でも彼女は恐ろしく氣色を損じて居ます、』とマリアンナは續けた。『貴方が彼女の自由になりにならないので。併しそんな事は何でもありません。他に是非お話しなければならぬ事が一つあります……ねえ私はもう此處にゐる事は出來ないでせう……何處かへ逃げなくてはなりません』

『逃げる？』ネヴダーノフは鸚鵡返しに言つた。

『さうです、逃げますの……貴方も此處に止まらうとはしてゐらつしやらないでせう？　私達は一緒にまゐりませう――私達は一緒に働かなければなりません……貴方は私と一緒にゐらつしやる？　いらつしやらない？』

『地球の果までも』とネヴダーノフは叫んだ。そして彼の聲には急劇な情緒の響と一種の激烈な感謝の調子とがあつた。『地球の果までも！』その瞬間には彼は彼女の欲する處なら何處へなりとも後ろも向かずに屹度進んで行つたであらう。

マリアンナは彼を了解した、そして短かい幸福さうな溜息をほつと吐いた。

『では手を執つて下さい、アレキセイ、だけと接吻してはいけません。そして仲間のやうに友達の樣にしつかり握り緊めて下さい――さう、そのやうに！』

二人は物思はしげに、嬉しげに相携へて家路へ向つた。若草は二人の足を撫でた。若い木の葉は二人の身邊に搖れ動いて、光と影の綾模樣は二人の着物の上を速かにひらめき過ぎたそして彼等二人は目まぐるしい此の光の戯と樂しさうな風のさんざめきと、爽やかな木の葉の輝きとに微笑んだ。彼等自らの若々しさと、男は女に、女は男に互に微笑み合つた。

二十三

ゴリーシュキン邸の晩餐が果てゝから、ソローミンが四哩に近い道程を足早に歩き終へて、工場を取圍む高い塀の門を敲いたのは其夜の空も既に明方近くなつた頃であつた。

夜番の男は直ぐさま彼を入れた。三疋の飼犬がもぢや〳〵した尻尾を勇ましく振りたてながらついて來た。夜番の男は鄭重に彼をその小さな小屋へ導いた。そして自分の親方が無事に歸つて來たのを非常に喜んだ。

『何うして今夜此處へお歸りになりました？　ワシリー・フエドーチッチ、明日でなければお歸りがないと思つてました。』

『あ、さうだらうとも、ガブリラ。だが夜歩くのは氣持の宜いものだよ。』ソローミンと其配下の職工との間には、寧ろ異例に屬することであるが、美しい關係が出來てゐた。彼等は彼を先輩として尊敬し、同輩として、仲間の一人として待遇した。唯だ併し彼等の眼には彼は一個驚嘆に値する學者と見えて居た！　『ワシリー・フエドーチッチの言ふことは何でも、いつも正しいのだ！　そりやもう彼の人の通じてゐないといふ學問は一つもないし、彼の人の手におへないといふ英吉利人は一人もゐないのだからな！』事實、ある有名なイギリスの製造業者が此の工場を參觀に來たことがあつた。その時、ソローミンが彼に英語を以て話した爲めか、或は其事業に對するソローミンの智識に實際に感心した爲めか、それは分らないがその男はソローミンの肩を敲いて笑ひ通して居た。そして自分に會ひにリヴアプール迄來いと誘つた。それから其男は變則なロシヤ語で職工等に向つて公言した。『いやどうも、この人は大層物の解つた人だ。此處にゐる君達の仲間は！　どうも大層物の解つた人だ！』此に對して職工等は返禮のつもりで心底から笑つた。而もそれには多少の誇さへ含まれて居た。『さ

うだその通りだ！　俺達の仲間さ！」彼等はかう心に感じたのだ。

その通り彼は實際彼等の一人であつた。彼等の者であつた。

翌朝早くソローミンの氣に入りのバーウエルが彼の部屋に這入つて來て彼を起し、彼の爲めに洗水を注いでやつたり、さま〳〵の消息を彼に告げたり、そして又さま〳〵の質問をしたりした。それから二人は一緒に急いで茶を飲んだ。そしてソローミンは脂染みた鼠色の仕事着を引掛けながら工場へ這入つた。彼の生活は再び巨大な節動輪のやうに廻轉し始めた。

併し又しても一つの新らしい障碍がそれに向つて待構へて居た。

ソローミンが仕事場へ歸つてから五日目に、一臺の綺麗な小さい四輪馬車が蹔を並べた四頭の逞しい馬に牽かれて工場の庭へ這入つて來た。そして一人の白味がゝつた豌豆色の法被を着た馭者がバーウエルに導かれてソローミンの部屋へ這入つて來た。そして紋章の封印を押した『ポリス・アンドレーキチ・シブヤーギン閣下』からの一通の手紙を嚴かにソローミンの手に渡した。此の手紙からは一種特別な、噎せるやうなイギリス式の香――決して臭氣ではない！　が發散した。その手紙は第三人稱で、而も書記の手でなく、アルザー領地の開化した地主たる閣下自身の手で書かれてあつた。そしてその手紙は先づ第一にシブヤーギンが

豫て高名を承つてゐるが未だ親しく交際するの榮を得なかつたその人に一書を呈すると云ふ事についての失禮の申譯から始まつてゐる。それから、貴下の助言は製造業を多少大きくやつてゐるシブヤーギンにとつて非常に有益な事と思ふから『申上兼ねるけれど』拙者の田舍家まで來て貰へまいか、とあつた。更にソローミン君がそれを御承諾下さるつもりでシブヤーギンは貴下の爲めに馬車を差上げた。若しソローミン君が此日差支へがあつて脱けられぬ時にはシブヤーギンは何日でも御都合の宜い日を御自分で御指定下さることを最も熱心にお願する、さすればシブヤーギンは又喜んでその日に同じ馬車を差向けます。と云ふ事が書いてあつた。それから型の如く儀式張つた事が書いてあり最後に追白として次のやうな文句が第一人稱で書いてあつた。『何卒たゝあつさりと――夜會服など御着用無之――小宅の晩餐會へ御臨席下され度候』（『たゝあつさりと』の處へは圏點が打つてあつた）此の手紙と一緒に豌豆色の服を着た馭者は多少どぎまぎしながら一片の書付をソローミンに渡した。それはネヅダーノフからの手紙で、封じたまゝで封印も押してない。それには唯數言『何卒來てくれ給へ、君は非常に此處で待たれてゐる、それに非常に爲めになるだらうから。無論それはシブヤーギンの爲めではないといふ事は言ふまでもない。』と書いてあつた。

シブヤーギンの手紙を讀んでソローミンは考へた、『たゞあつさりと！　でなくて何うして行けるものか。夜會服なんか僕の生活に何で要るものか・・・一體何だつてそんな處へ僕を曳きずつて行かうと言ふのか・・・徒らに時間を費すだけのことだ！』併しネヴダーノフの書付を一寸見てから彼は頭を搔いた。そして決し兼ねると云ふ風で窓際へ歩いて行つた。

『何ういふ御返事を承りましたと申上げませう？』と豌豆色の法被を着た馭者は物靜かに訊ねた。

ソローミンは窓際に暫らく立つてゐたがとう〳〵、髮を後ろの方へ拂ひ除け、その手を額の處へ持つて行きながら言つた。

『參りませう。着物を着更へる迄待つてくれ給へ』

馭者は躾の宜い行儀で引退つた。ソローミンはバーウエルを呼びにやつた。彼と二言三言何か云ひ交はして、再び工場へ跳んで行つた。そして田舍仕立の長い〳〵胴衣を揃へた黑い上衣を着け、稍々汚れの見える高帽を被つた。と忽ち彼の顏はぱんやりした表情を呈した。やがて彼は馬車に乘つた。が突然手袋を忘れた事を思ひ出したので萬事拔目のないバーウエルを呼んだ。バーウエルは白い羚羊皮の手袋を持つて來た。それは近頃洗濯されたばかりの

で指が一本々々しやちこ張つてゐて細長いビスケットの樣に見えた。ソローミンはそれをポツケットに押し込んで出發の命を與へた。馭者は突然全く無用な身輕さで馭者臺に跳び乘つた。善く訓練された馬丁は耳を擧く樣な叱聲を發した。と馬は足早に驅け出した。

彼等がソローミンを次第にシブヤーギンの領地近くへと運んでる間、こちらでは彼の政治家は客間の椅子に腰掛けて頁を切つた政治に關する小冊子を膝の上に置きながら細君とソローミンの事を語つてゐた。彼は、自分の工場が甚だ不整頓で根本的な改革が必要である所から彼をかの商人の工場から自分の工場へ引き拔いて來る事が出來ないものかどうかを試してみる心算で彼に手紙を送つたのだと細君に打明けた。ソローミンが拒むであらうといふ考へ、又は他日を期するであらうといふ考へさへ、シブヤーギンは一時も抱いてゐる事は出來なかつた。その癖手紙の中には都合の宜い日を選定してくれるやうにと書いて置いたのだ。

『だけど此方は抄紙場で紡績工場ではございませんもの、』とワレンチーナ・ミハーロウナが言つた。

『ちつとも違やしないのだよ、お前。機械を使用して居る點ではどちらも同じなんだから・・・それに彼の男は機械師と來て居る』

『でも大方專門家なのでせうよ！』

『ねえー第一ロシヤには專門家はゐないよ。第二に私は繰返すが彼は機械師なのだ！』

ワレンチーナ・ミハローウナは微笑した。

『お氣をおつけあそばせ。一度若い男の爲めに不幸な目にお遭ひになつてゐるのですから。二度と失敗しない樣にお氣をおつけなさらなくては！』

『ネヅダーノフの事を云ふのかね？　でも私は兎に角私の目的を達したのだと思ふよ。彼の男はコーリアの爲めには兎に角立派な敎師だものね。それにねえ、お前、Non bis in idem！だよ。御免、學者氣取りなんかして。……それは、物事は自ら繰返される事のないものだといふことなのさ。』

『さうお思ひになつて？　併し私の考へでは世の中のあらゆる事が自ら繰返されてゐます：：わけても事物本來の性質上……特に若い人達にはね』

『Que voulez-vous dire？（お前は誰のことを言はうといふのか？）』

とシヴャーギンは閑雅かな身振で小冊子を卓の上に投り出しながら言つた。

『Ouvrez les yeux, et vous verrez！（眼をお開けなさい、そしたらお分りになりませう！）』と

シヴャーギン夫人は答へた。勿論二人は互にフランス語で話し合つたのだ。

『フム！』シヴャーギンは註釋を入れた。『お前はあの大學生のことを言つてゐるのか』

『あの大學生さんの事ですよ――えゝ』

『フム！　彼が何ぞ……？』（彼は手を額へ持つて行つて）……此處で仕出來したと云ふのかね、えゝ？』

『眼をお開けあそばせな！』

『マリアンナか？　エ、？（此『エ、？』は最初のよりは餘程鼻にかゝつてゐた）

『眼をお開けあそばせと申すのですよ！』

シヴャーギンは顏を蹙めた。

『よろしい、此事はいづれ後で又話すことにせう。今此處で言つて置きたいのはたゞこれだけだ……あのソローミンは多分どちらかと言へば不愉快な人間だらう……勿論それが、當り前だ、社交には慣れないからね、それで私等はどちらかと云ふと彼の男には親しくしてやらなくちやならない……驚かせないやうにしてやらなくちやならないのだ。これはお前のことぢやない、お前は全くのお寶だ、お前にはやらうと思へば何時でも誰でも擒にすることが出來

る。Je,en sais quelque chose, Madame!（私はそれに就てはいろんな事實を知つてますよ、奥さん！）で、此れは外の人の事だ、例へば彼れ――』

彼は棚架の上に置いてある流行の鼠色の帽子を指差した。それはその朝早くからアルザノーに來てゐたカルロミエーチエフの帽子であつた。

『Il est très cassant.（彼の男なんかは頗る粗暴の方だがねえ）何しろ一般の人民を滅法輕蔑してゐる・私はそれを大に非とするのだ！　それに近頃は何うも短氣で喧嘩腰になつてゐるやうだ……あの方面の（シブヤーギンはあらぬ方面へ向つて點頭いた、併し夫人はその意味を了解した。）彼の事件もうまく捗らないと見えるね、エ、？』

『眼をお開けはそばせ、私もう一度申しますわ』

シブヤーギンは起ち上つた。

『エ、？』（この『エ、？』は全く違つた性質の『エ、？』で、調子も違つて居て……前より非常に低かつた。）『そんなに云はなくても好いよ！　私の眼は廣過ぎる位開ける、だから寧ろ廣過ない樣に控目にした方が宜い位だ。』

『それは貴方の方の事ですわ。ですけれど今度新奇に來る若い人の事なら、たとへ今日見えたとて貴方は何もやきもきなさらなくとも宜しう御座いますよ――ちやんと用意は致して置きますから。』

とは云へ結局何の用意も必要でないと云ふことが分つた。ソローミンは少しも不愉快な樣子も困つた樣子もしてゐなかつた。下僕がソローミンの來着を告げるとシブヤーギンは直ぐ樣起ち上つた。態と玄關まで聞えるやうな大聲で、『御案内申上げろ、無論のことだ、御案内申上げろ！』と云つて、客間の入口へ行つて戸の前にちやんと立つてゐた。ソローミンが闕を跨いで這入るや否や、シブヤーギンは危く打突かりさうになつたソローミンに兩手を差伸べた。そして愛想よく笑ひ、頭をペン〳〵させながら恭々しく言つた、『是は眞に宜うこそお出で下さいました！……有難い仕合せです！』

それからワレンチーナ・ミハーロウナの方へ導いた。

『此れは私の妻です、』彼はソローミンの背中にそうつと手を當てながら、そして細君の方へ彼を押やる樣にして言つた。『このお方がお前・機械監督技師で製造業者のワシリー……フエドシエーキチ・ソローミンさんだよ』

シブヤーギン夫人は起ち上つた。そして長い睫毛を美しく上向にふるはせて、まづ第一に

――ほゝの知己に對するやうに微笑した。それから小さな手を、掌を上へ向けて差出した。肘は腰に押し付け、頭は手の方へ傾げて……哀願者のやうな態度をした。ソローミンは彼等夫婦の詰らぬ藝當を演じ終へさせてから、二人と握手した。そして乞はれるまゝに直ぐ樣椅子に腰掛けた。シブヤーギンは何かと彼の事で氣を燒いた。『何ぞ召上りませんか？』

併しソローミンは何も欲しくなく、旅行の疲れも更になく、全く氣樂である旨を答へた。

『では工場を見て頂く譯に參りますまいか？』とシブヤーギンはすつかり恐入つてしまつたやうに、そして客の方にもそれ丈けの謙遜が有るのを信じやうともせずに、かう叫んだ。

『早速に』とソローミンが應へた。

『あゝそれは忝けない！　馬車を申付けませうか。それともお歩き下さいますか？……』

『だつて、此處からさう遠くはないでせう。貴方の工場は？』

『半哩しかありません。』

『それぢや何で馬車なんか要りませう。』

『あゝ、それは結構、それでは！　ボーイ、私の帽子とステッキを、直ぐに！　そしてお前はねえ、奥さん、うんと奮發して御馳走を拵へておくれ。おい帽子だ！』

シブヤーギンは客よりも餘程興奮してゐた。『だが私の帽子は何うしたのだ？』と繰返して彼れ、堂々たる紳士なる彼は巫山戯好きの小學生のやうに部屋を飛び出した。彼がソローミンと話してゐる間、ワレンチーナ・ミハーロウナは偷目で而も念入りに此の『新來の青年』を諦視めてゐた。彼は膝の上に裸出の手をのせて（彼はつまり手袋を嵌めてゐなかつたのだ）安樂椅子の上へ穩かに腰かけながら、穩かにしかし好奇の眼を以て器具や繪畫などを見廻してゐた。『何うしたんだらう？』と彼女は考へた。『此の人は平民だ……紛れもなく平民だ……それだのにあの自然な振舞方は！』

ソローミンは事實頗る自然に振舞つてゐた。素よりつまらぬ人がする樣ではなく、一種の充實した樣子で振舞つて居た。それは丁度『俺を見ろ、立派な人間だらう』とでも言つてゐる樣であつた。その感情も思想も複雜でなくて、而も強い人の樣であつた。シブヤーギン夫人は彼と言葉を交はしてみたいと思つたが、併しわれながら驚いた事には、彼女は相當な話の端緒を直ぐには見出す事が出來なかつた。『おや〳〵！』と彼女は思つた。『こんな機械屋風情のために頭が何うかなつたのか知ら』

『ポリス・アレドレイチはどんなにも有難く思はなければならないので御座いますわ』と彼

女はとう〳〵口を切つた。『彼の人の爲めに貴方の貴い時間の幾分かをお裂き下さつた事に對しまして……』

『私の時間はそんなに偉い貴いものぢやありませんよ、奥さん』とソローミンが答へた。『それにさう永く此方にゐるつもりでもありませんから』

『Voilà où l'ours a montré sa patte』（そうれ此熊が足を現はして來た）と彼女は心ゝ内でフランス語で言つた。併し其瞬間彼女の夫は明け放つた入口から姿を現はした。

帽子を被つて、手にはステッキを持つてゐる。體軀を半ば振り向けながら、彼は自由な氣樂な態度で呼はつた、『ワシリー・フエドシエーキチ！　そろ〳〵參りませうか？』

ソローミンは起ち上つて、ワレンチーナ・ミハーロウナにお辭儀した。そしてシブヤーギンの後から出かけた。

『此方へ、此の道です、此の道です、ワシリー・フエドシエーキチ！』とシブヤーギンは、まるで森の中でも辿つてゐるやうにソローミンに案内の必要があるらしい樣子で言つた。『此の道です！　此處に段々があります、ワシリー・フエドーシエーキチ』

『私の父稱でお呼びくださるなら』とソローミンは徐ろに云つた……『私はフエドシエーキ

キチではありません、フエドーチッチです』

シブヤーギンは恐入つたと云ふ風で肩越しに彼を眺めた。

『あ！　御免下さい、成程、ワシリー・フエドーチッチ、』

『どういたしまして、何でもありません、』

彼等は廣庭へ這入つた。と、彼等はカルロミエーチエフに行き會つた。

『何處へお出かけかね。』と彼はソローミンを尻目にかけながら訊ねた、『工場へ？　C'est la l'individu en question?（件の一物かね？）』

シブヤーギンは眼を丸くして、警告のつもりで頭を少しく振つて見せた。

『さうだ、工場まで……此の方――機械技師の方に僕の罪業や曲事をお目にかけやうと思つてね。御紹介致さう。此は近處の人でカルロミエーチエフ君です。ソローミン氏……』

カルロミエーチエフは二度ばかり殆ど目立たぬ程に、それもソローミンの方へは見向きもせずに頭を下げた。併しソローミンはカルロミエーチエフを見た。彼の半眼に見開いた眼の中にはあるものゝ閃きがあつた。

『一緒に行つても宜しいですか？』とカルロミエーチエフは尋ねた、『私は教を受ける事が好

きでしてねえ』

『勿論、ゐらッしやい。』

彼等は廣庭を道へ出た。そして未だ二十歩と歩かぬ内に法衣を引裂げて帶に挿みながら、所謂『法王區域』の方へ辿り行く教區の僧侶を見かけた。カルロミエーチエフは早速二人の連から離れて僧侶の方へどしどし大跨に歩み寄つた。僧侶は全く意外のことに度膽を抜かれてゐた。カルロミエーチエフは彼の祝福を祈り、濕のある赤い手に音のあるほど接吻した。そしてソローミンの方を向いて挑戰するやうに眼光を投げた。彼はソローミンに就て明らかに『一二の事實』を知つてゐた。それで其の教育ある惡漢に對し輕蔑の意を見せつけてやらうと思つたのだ。

『C'est une manifestation, monsher?(此は一つの表彰かね、君?)』とシブヤーギンは齒の間から呟いた。

カルロミエーチエフは鼻息を吹いた。

『Oui mon cher, une manifestation nécessaire par le temps qui court.』(さうだ、君、短い時にとつての必要な表彰だ!)

彼等は工場の中に這入つた。そして非常に長い腭髭を生やし、義齒をした小露西亞人と遭つた。これはシブヤーギンが先の工場監督たる獨逸人をとう〳〵解傭する事にした時に傭ひ入れた後任者であつた。併し彼はたゞ當座の代理たるに過ぎなかつた。彼は仕事に關して何の智識も有つてゐなかつた。そして唯だ溜息する事と、始終『多分』とか『其通り』とかを繰返すことより外何も能がなかつた。組織の檢分が始まつた。職工の或物はソローミンの顏を見知つてゐたので彼に挨拶した…剩へソローミンは彼等の一人に向つて、『やア、グリゴリイ! 此處にゐたのか?』とまで云つた。彼は業務の整理が宜しくない事に氣がついた。金錢は大ざつぱに而も無暗に撒き散らされて居た。機械は粗末なものに過ぎない事が解つた。多くの物が不要で無益で、而も必要なものゝ多くが缺乏してゐた。シブヤーギンはソローミンの意見を觀測する爲め彼の顏を絶えず見守つて居て、二三の臆病な質問さへ試みた。彼は此の遣り方に兎も角も彼が滿足してゐるか何うかを知り度いと思つた。

『組織は結構です』とソローミンは答へたが『併し此れで利得がありますか? 疑はしいですよ』

シブヤーギン許りではなく、カルロミエーチエフが、ソローミンの工場通であつて、その中

の凡ての事物が手に採る如く至極些細な事まで了解してゐるらしい事――即ち彼は恰も此處の主人でゝもある樣だと云ふ事を思つた。彼は丁度騎手が馬の首に手を當てる樣な鹽梅に、機械の上に手を置いた。彼が車輪の中に指を突込むと、或は廻轉を止めたり或はぐる〳〵廻り始めたりした。彼は桶の中から紙の原質を少し許り掌に抄ひ出して見た。とそれには凡ての缺點が表示されてゐる事が直ぐに分つた。ソローミンは餘り口を利かなかつた。

小露西亞人などにはてんで目もくれなかつた。彼は矢張り默つて工場を出た。シブヤーギンとカルロミエーチエフとは彼に續いた。

シブヤーギンは彼に誰れも伴はせなかつた……彼は地面を踏みつけて、切齒した。彼は非常に心をかき亂されてゐた。

『貴方の顏容で解りました』と彼はソローミンに向つて言つた。『貴方は私の工場に滿足されてゐない。それは私自身にも不滿足な狀態で且つ不生產的だといふことが解つてゐます。併し御遠慮なく言つて下さい……一番肝要な缺點は實際に何でせう？　そしてそれを改良するには何うしたら宜いでせうか』

『製紙の事は私の專門ではありませんが』とソローミンは答へた。『併したゞ一つ丈け申上げ

る事が出來ます――それは一體貴族には實業が出來ないと云ふ事です』

『さういふ職業は貴族の體面に關ると被仰るんですか』とカルロミエーチエフが口を挿んだ。

ソローミンは例の微笑を湛へた。

『いやどうしまして！　そんな事が！　何の體面に關はる樣な事があるものですか、よしあつたにしても貴族が何もそれに對して胸惡くする事もありませんからねえ』

『えゝ？　それは何の事ですか？』

『私の意味はたゞ』ソローミンは平靜を裝つた『貴族はさう云ふ事業には役に立たぬといふ迄です。それには商賣的な先見が必要です。凡てが異なる立場の上に置かれねばなりません。貴族にはそれに對する修業が缺けてゐます。貴族はそれを悟らない。私達は彼等が到る處にやれ織物製造所だとか製毛所だとか、それからあらゆる種類の工場を始めてゐるのを見ますが、併しあれは皆、結局は商人の手に落ちてしまふのです。それや慘めなものです。商人といふものは、まるで生血吸と同樣ですからねえ。と云つてそれには救濟の法もありません。』

『御說によりますと』とカルロミエーチエフが叫んだ。『經濟の問題は吾々貴族を超越したもののやうに聞えますな！』

『おゝ、全く反對です！　貴族はそれには第一流の名人です。鐵道敷設の認可を得る事や銀行を建てる事や、彼等自らに對する租稅の幾何かを免除して貰ふ事や、その外あらゆるさう言つた事にかけては貴族に及ぶべきものはありません。彼等は巨額の財產を蓄め込む。私は唯今それを仄めかしたのですが、貴族方の不興を招いた樣でした。併し私は正當な殖產事業の事を考へて言つてゐたのです。敢て正當なといふ理由は、個人經營の料理店や詰らぬ小間物店を開いたり、吾が地主の多くが現にやつてゐるやうに十割或は十五割の利子で小麥や金を農民に貸し付けたりする――さういふ商賈は純粹な職業として私は認めることが出來ないからです』

カルロミエーチエフは何の返事もしなかつた。彼は正に、マルケーロフが最近にネヅダーノフと相語つた時說き及んだ、かの金貸地主の新種族に屬してゐたのだ、そして彼の絞り方は一層非人情的で、決して百姓を人間扱ひするやうな事はしないのである。彼は百姓をば彼の香氣の高い歐羅巴風の書齋に這入らせない、彼等との交涉は凡て是を差配にさせた。でソローミンの考深い、云はゝ偏頗な議論を傾聽しながら彼は內心大に奮激してゐた……併し彼はその時は默つてゐた。たゞ彼の顏面筋肉の運動が心內の衝動に裏切してゐたゞけだ。

『併しワシリー・フエドーチッチ、失禮ですが――失禮ですが』シブヤーギンが始めた。『貴方の言つてゐられる事は皆、貴族が全然違つた特權を握り、全然今とは違つた地位にゐた時代の批評そのまゝです。併し凡ての有益な改革がなされた……吾が殖產時代の今日では、貴族と雖もその精力と能力とを斯樣な事業に傾注する事が出來ないといふことが何でありませう？　それから又單純な、時として無學な商人等に了解される事が貴族に了解されないといふやうな事が何でありませう？　彼等は敎育に不足はない、のみならず、彼等は或る意味に於て開化と進步の代表者である、といふ事を思ひ切つて主張しても宜いのです。』

ポリス・アンドレーキチは頗る上手に喋舌つた。彼の能辯はペテルブルグでは――彼の省內に於ても、非常な効果を納めて來たに違ひない。が併しソローミンには何等の印象も起させなかつた。

『さう云ふ事を處理する事が貴族には出來ないのです』と彼は繰返した。

『では何うして出來ないのでせう、何うして？』カルロミエーチエフは殆ど怒鳴らんばかりに云つた。

『何故なれば彼等は單に官吏たるに過ぎないからです』

『官吏？』カルロミエーチエフは意地悪く笑つた。『君は恐らく君の言つてることを全く實證してゐないのでせう、ソローミン君』ソローミンは矢張り微笑してゐた。

『何うしてそんな事が考へられるのです、コロメンチエフ君』(カルロミエーチエフは自分の姓がかく『毀損』されたのを聞いて全く戰慄した)『いや、私は常に私の言つてゐる事を完全に實證してゐます。』

『それでは君が只今言はれた事の意味を說明してくれ給へ』

『宜しい。私の考では有ゆる官吏は門外漢です、過去に於て常にさうでした。ところで今では貴族が矢張門外漢となつたのです』

カルロミエーチエフは一層聲高に笑つた。

『失禮ですが君、僕には薩張り分りませんよ！』

『愈々以て惡い。一大努力をなさらなくてはいけません…多分それはお解りでせう。』

『君！』

『兩君、兩君、』とシブヤーギンは自分の周圍に何人かを熱心に搜し求める樣な風で急いで遮つた。『何卒、何卒　Kallomyetsev, je bous prie de vous calmer.（カルロミエーチエフ、賴むか

ら落着いて下さい。）それに晩餐が程なく出來るでせう、慥かにもう。では何卒皆さん、こちらへ！』

『ワレンチーナ・ミハーロウナ！』とカルロミエーチエフは、それより五分の後、彼女の私室に驅け込みながら泣聲を出して云つた。『貴女の御主人のなさる事は實に無類突飛です！　一人の虛無黨が既に此處に浸入して來てゐるかと思ふと今度は又他の奴を引張つて來やうとしてゐる！　而も此奴は最もいけない奴だ！』

『何う致しまして？』

『確かに、彼奴は惡魔を擁護してゐる。そして加之――どうです。奴は貴女の御主人に向つて喋舌り續けだ。そして一度ならず一度處ぢやない、御主人に向つて閣下だと言ひ居つた！ la vagabond.（あの無宿者め！）』

二十四

晩餐會が始まる前、シブヤーギンは夫人を書齋に呼び寄せた。二人きりで話さうと思つたのである。彼は煩悶してゐる樣であつた。彼は、自分の工場が見す〳〵悲しい狀態に陷りつ

つある事、此のソローミンは聊か不作法ではあるが大に有爲な人間と思はれる事、それから自分達は彼を引續き優遇しなければならない事等を彼女に語つた。『あゝ！　あの男を當所へ來る樣に說付ける事が出來たらほんとに宜いがなア』と彼は二度も繰返し言つた。シブヤーギンはカルロミエーチエフが來てゐるので酷く苛立つてゐた……『いやな奴だ！　彼奴は到る處で虛無黨を見つけては壓服しやうとかゝつてゐる。自分の家でなら勝手にするが宜い。彼奴は何うしても口を噤む事が出來ない男だ！』

ワレンチーナ・ミハーロウナは喜んで此の新來の客を aux petits soins（優遇）しやう、唯併し此客人はその優遇を欲しない、又それを氣にも止めないやうに見るではないかと云つた。それも彼が無作法な人間な爲めでなく、儀式張つたことに對して頗る無頓着であるが爲めだこの樣なのは du commun（平民社會）の人には誠に珍らしい例だ。彼女はそんな事も云つた。『心配しなくても好い……何でもまあ全力を盡してやつて見るんだね』とシブヤーギンは彼女に賴んだ。ワレンチーナ・ミハーロウナは全力を盡す事を約束した、そしてその約束を遂行した。先づ手初めとして彼女はカルロミエーチエフに向つて tête-à-tête（密談）を試みた。彼女の言つたことは分らないが、併し彼は自分の耳に容れた事は例へ何ういふ事であつてもそ

れを愼重に且つ柔順に守る事を『うけ合つた』と云ふ樣な態度で食卓に就いた。

此の、時にとつての『諦め』は彼が全體の態度に聊か憂鬱な影を投げて居た……併し何といふ威嚴……あゝ何といふ威嚴が彼の動作の凡てに現はれたであらう！　ワレンチーナ・ミハーロウナは家族中の者にソローミンを紹介した。（ソローミンは最も注意してマリアンナを見た。）そして食卓では彼女の右隣りに彼を坐らせた。カルロミエーチエフは彼女の左隣に坐つた。彼はナフキンを廣げるや否や『さアさア俺達の狂言を初めやうか』とでも言はんばかりの微笑を顏中に浮べた。シブヤーギンは彼と向ひ會つて坐つてゐたが、幾分心配げに彼を見守つた。シブヤーギン夫人の取極めでネヅダーノフはマリアンナの側ではなく、アンナ・ザハローウナとシブヤーギンとの間に坐らされた。マリアンナは自分の名札が（儀式張つた晩餐であつたから名札まで備へてあつたのだ）カロミエーチエフとコーリアとの間のナフキンの上に置かれてあるのを見出した。晩餐は甚だしい物々しさで行はれた。獻立までアつた――彩色を施した名札が各自の小刀とフォークとの側に橫はつてゐた。

スープが濟むと直ぐ、シブヤーギンは話題を彼の工場の事とロシヤに於ける製造業全般の事に引戻した。ソローミンは例の通り極めて簡單に受け應へした。彼が口を利き初めるや直

ぐにマリアンナの眼は彼の顏に注がれた。

カルロミエーチエフは彼女の側に坐つてゐたので、彼女に種々〳〵な御愛想を言ひ初めた。彼は『議論を惹起さない樣に』特に賴まれた事を充分飲み込んで居たのだ。併し彼女は彼の言ふ事を聽いてゐなかつた。實のところ彼とても自分の良心を滿足させたいばかりに不本意ながら此等の愛想を振り撒いてゐたのだ、彼は此の娘と自分との間には取り除く事の出來ない或る障壁の橫たはつてゐる事を悟つた。

ネヴダーノフは何うかと言ふに、彼と此の家の主人公との間には一層面白くない或物が釀されてゐた……シプヤーギンにとつてはネヴダーノフは唯單に家具の一片か、又は彼の念頭には全く――全くと云つても好い――浮んで來る事のない一つの空處たるに過ぎなくなつてゐた……此等の新らしい關係は迅速に、且つ明白に有形の事實として現はれた。それは食事の間にネヴダーノフが隣のアンナ・ザハローウナの話に應へて二言三言何か云つた時シプヤーギンは『何處からあんな音が聞えてくるだらう』とわれと我身に訊ねる樣な風で驚き乍ら周圍を見廻してゐた。

シプヤーギンは、最高の地位にある露西亞人をして異彩あらしめる所以のさま〳〵な特性

を明らかに有つてゐた。

魚肉の料理が出てしまふとワレンチーナ・ミハーロウナは――自分の役目として有ゆる技巧と愛嬌とを彼女の右に居る人――即ちソローミンに對して亂費してゐたが、ふいと卓越しに英語で主人に話しかけた『お客樣は酒を召上りません、大方麥酒ならよろしいのでせう……』シプヤーギンは聲高に『强麥酒』を命じた。と、ソローミンは徐ろに夫人の方へ向き直つて『多分御存じないのでせうが、奥さん、私はイギリスには二年以上ゐましたので英語は解ります又話す事も出來ます。私の前で何か內密なお話でもなさるといけませんから御注意までに申上げて置きます。』と云つた。

ワレンチーナ・ミハーロウナは笑つた。そして善い事ばかりしかお耳に容れないからその御注意は全く御無用だといふ事を斷言した。

彼女は內心ソローミンの行爲はどちつかと云へば少し妙ではあるが、併し實はいかにも行き屆いたものだと思つた。

此處に至つてカルロミエーチエフはとう〳〵默つて居られなかつた。

『それでは貴方はイギリスに居られたんですね』と彼は始めた。『では多分其處の風俗習慣を

御研究になつたでせう。失禮ですが、貴方はそれを眞似る價値のあるものとお思ひでしたか』

『或物は然りです、或物は然らずです』

『簡單だが明瞭でないやうですな』とカルロミエーチエフはシブヤーギンが自分に行つてゐる合圖を努めて見ない樣にして云つた。『併し貴方は今朝貴族の事に就て語つてゐられた……貴方には屹度英國の所謂地所持の紳士社會を現場で研究される機會があつたに違ひない』

『いや、私にはそんな機會なぞありませんでした。私は全然違つた區域に起臥してゐました。併し私は其等の紳士に就ては私一個の意見を構成したのです』

『では、貴方は斯樣な地所持の紳士社會は吾々の間では無能なものであつて、何んな場合でも吾々はそれを欲してはならないと云ふ御考なのですか』

『第一、私は確にそれを無能だと考へます。第二に私はそれを欲する價値のないものだと思ひます』

『何うしてゝすか、貴方？』とカルロミエーチエフが言つた。特に此の丁寧な敬語を用ひたのはいかにも心配らしく、凝として椅子に落ち着いてゐられないやうなシブヤーギンの心を和げる積りであつた。

『何故なれば二十年か三十年の内には貴方の所謂地所持の紳士社會はどの道影を納めるでせうから。』

『だが、全く、何うしてゝせう、貴方？』

『何故なればその時分には土地といふ土地は皆、何等階級の差別なき所有主の手中に落ちるでせうから』

『商人ですか？』

『恐らく商人です、大部分は』

『何うしてさうなるでせう。』

『彼等がそれを買占めるからです――土地を。』

『貴族から？』

『さうです貴族から』

カルロミエーチエフは卑下する樣な作り笑を洩らした。『私は思出しましたが、貴方は前に水車場や工場の事に就て言れたとそつくり同樣な事を今土地に就て言て居られるのですね』

『さうです、私は今は土地全體に就て同樣な事を言つてゐるのです』

『で貴方はそれを大に滿足に思はれるでせうな？』

『ちつとも。既にお話した通りに。人民はそれが爲めに少しも境遇が善くはなりません』

カルロミエーチエフは微かに片手を揚げた。『人民の安寧によつて何たる憂ふべき事でせう、まあね！』

『ワシリー・フエドーチッチ！』シブヤーギンは聲の限りに呼はつた。『貴方の爲めに麥酒が來ましたよ！ Voyons, simgon』 彼は低聲で云ひ足した。

併しカルロミエーチエフは中々靜まらなかつた。

『貴方は』と彼はソローミンに向つて初めた。『商人に就いては大して心持の好い考は有つてゐらつしやらないやうですね、ですが彼等とてもつまり人民の一部に屬するものです、さうぢやないですか』

『さうしますと？』

『人民に關する凡ての物、又は人民から出た凡てのものは貴方の眼には善良に見える筈だと思ひますが。』

『否、否！ 貴方の御想像は間違つてゐます。吾が國の人民は常に惡いといふのではないけ

れども、非難に價する多くの缺點を持て居ます。私共の間にあつても商人と云ふ奴はまるで盜賊です 彼等はその私財をば掠奪の爲めに使ふのです……どんな事をするか？ と云ひますと、つまり彼等は利用されつ、利用しつして居るのです。それで人民は何うかと云ふと――』

『人民は？』カルロミエーチエフは假聲を張上げて訊ねた。

『人民は……眠つてゐます。』

『それで貴方は彼等を覺醒しやうと被仰るんですね？』

『不當な事ではないでせう』

『あ、ハ！ あ、ハ！ それはその――』

『兩君、兩君』とシブヤーギンは横柄な口の利き方をした。彼は、今や線を引くべき時……換言すれば議論を中止せしむべき時が到來したと感じたのだ。で彼は線を引いたのだ！ 議論を中止せしめたのだ！ 彼は卓に右の肘を着けたまゝ手頸丈けを振つて、長い念入りな一場の演說を試みた。一方に於て彼は保守黨を稱讃し、他方に於て彼は自由黨を是認した。尤も後者に對しては多少の優先を許し與へ、且つ自分もその黨の一員として數へた。彼は人民を稱揚した。併し彼等の弱點の或物を擧げた。彼は政府に對する絕對の信賴を表示した。併し

その凡ての屬僚が果してその仁慈なる法案を完全に遂行してゐるか何うかを自ら疑ひ問ふた。彼は文字の必要と權威を認めた。併し最も嚴密なる警戒がなければそれは危險だと揚言した！　彼は東方を向いて、初めは喜び、後に疑はしげな樣子をした。彼は西方を望んで、初めに冷淡を裝ひ、次に突如として奮起した。最後に彼は宗教、農業、工業、の三位一體を祝せんが爲め祝盃を擧げん事を提議した。

『權力の保護の下に！』とカルロミエーチエフが言ひ足した。

『賢明にして寛大なる權威の保護の下に！』とシブヤーギンが訂正した。

祝盃は沈默のまゝ飲み乾された。シブヤーギンの左側のネヴダーノフといふ『空處』は確かに不贊成の數音を發したのであるが、併し何等の注意も惹起すことなしに再び沈默に陷つた。そしてこの晩餐會は何等論戰に亂さる事なく滿足な終結に到達した。

ワレンチーナ・ミハーロウナは最も愛嬌ある微笑を洩らしながら、珈琲をソローミンに渡した。彼はそれを飲んだ。が、その時既に彼は自分の帽子を搜し求めてゐた……併しシブヤーギンの爲めに柔かく腕を捕へられて、さつさとその書齋の中に引き入れられた。そして先づ第一に最も結構な卷煙草とそれから、最も有利な條件付きでシブヤーギンの工場に這入つて

貰ひたいと言ふ申出を受けた。『絕體的に長の全權を握つていたゞきませう。ワシリー・フエドーチッチ、絕體的に長の全權を！』ソローミンは卷煙草は受取つたが、その申出は退けた。彼はシブヤーギンが何んなに言張つても斷乎としてその辭退を固執した。

『さう無下に「否」と仰有らずに、ワシリー・フエドーチッチ。少くとも明日まで考へて見やうと言つて下さい！』

『併し同じ事ですよ。どうしてもお受けする事は出來ません。』

『明日まで！　ワシリー・フエドチッチ！　貴方の決定を延ばして何の差支ないでせう？』

ソローミンは延ばしても差支へないとした……併し彼は書齋を出て、再び彼の帽子を搜しに行つた。が、その時まで彼と一語も交へる事も出來なかつたネヴダーノフは、側に近寄つて行つてあわたゞしく囁いた。『後生だから歸らないでくれ給へ、でないと吾々は話が出來ないから。』

ソローミンは帽子から手を引いた。彼が決し兼ねるといふ風に客間の中を彼方此方へ動き廻つてゐるのを見てシブヤーギンは一層快活に叫んだ『お泊り下さるでせうね、勿論。』

『どちらでも宜しう御座います、とソローミンが應へた。

客間の窓の處に立つてゐたマリアンナが彼に投げ與へた嬉しさうな眼光が彼を考へに沈めた。

二十五

ソローミンが來る迄は、マリアンナは彼を全く違つた人間として心に描いてゐた。彼の與へた第一印象は、何となく瞭然しない、個性を缺いた人物のやうであつた……私は是迄あの樣な髪の毛の立派な筋張つた痩せた男を澤山見た事がある、かう彼女は自分に言つた！　併し彼女は見守れば見守る程、話を聽けば聽く程、いよ／＼彼に對する信頼の念を強くしたのである——彼が彼女に吹込んだものは正しくこの信頼の念であつた。

穩やかな、重々しい、それで居て無樣と云ふところのない此の男は虚僞を言つたり、法螺を吹いたりする事の出來ないのみならず、他人に石垣のやうに信頼され得る人間であつた……彼は人を裏切るやうな事をしないのみならず、更に／＼彼は人を了解し人を扶助した。

マリアンナは斯うも考へた。此は自分一個の感じばかりではなく、ソローミンは遇ふ人毎

にこれと同樣な感じを起させてゐるのだと。彼の言つた事に對して彼女は何等特別な意味を附する事が出來なかつた。商人や工場につい ての凡ての談話も、彼女に取つては彼の物の言ひ振り、話をする時にあたりを見廻したり微笑したりするその樣子、彼女はそれを非常に喜んだ……

信用するに足る人間……それは偉大な事だ！　それが彼女の心を動かした處のものであつた。どう云ふ譯だか解らぬが、一體ロシヤ人は世界中で一番の虚言家だと云ふ事は紛れもない事實である。而も眞理ぐらゐ彼等の間に尊重されるものはない——眞理ぐらゐ彼等に切實なものはないのだ。が、ソローミンはマリアンナの眼には全然特種な型に屬する人間に見えた。彼にはワシリー・ニコラエーヰチその人によつて其の從屬者に推擧せられた人の光輝が付き纏うて居た。食事の間、マリアンナはソローミンの事で數回ネヴダーノフと視線を交したのであつた。が、彼女はとう／＼知らず識らずの間に、その二人を比較する樣になつてゐた。而もそれはネヴダーノフを不利の地位に置いた比較であつた。ネヴダーノフの容貌はソローミンよりは遙かに立派で、そして氣持の好いものであつた。併し彼の顔は屈託と、當惑と、焦燥と……それに喪心の趣さへ加はつて、激しく内心の騷擾して居る樣を示して居た。彼は荆

棘の上に坐つて居る樣であつた。彼は何か話さうとしたが、神經的に笑つて調子を破つてしまつた……之れに反してソローミンは多少の惱みはあるのであらうが、兎に角、すつかり打ち寛いで居るやうな、そして他の人々の行つたり感じたりする事に常に關係なく行つたり感じたりして居る人のやうな印象を與へた。『確に私達は此の人の忠告を求めなくつはならないのだ』とマリアンナは思つた。『彼の人は屹度私達に有益な忠言を與へてくれるに違ひない。』こんな風で食事の後に彼の處へネヅダーノフを差向けたのは實にマリアンナであつた。

その夕方は、どちらかと云へばわびしく過ぎた。幸にも晩餐は遲くまでかゝらなかつた。そして夜になるまでにはさう多くの時間もなかつた。カルロミエーチエフは行儀よく鹿爪らしい顏をして、何もしやべらなかつた。

『どうかあそばして？』シブヤーギン夫人は冷かし半分に彼に訊ねた。『何かお無くなしになつたものでもありまして？』

『それにちがひありません』とカルロミーチエフは答へた。『わが國の守備隊の指揮官の一人が、兵卒共のいつも靴下を無くするのをこんな風に呟やき通しにして居たと云ふ話があります。「おい靴下を搜して來い！」つてね。ところで私は「貴方」と云ふ言葉を搜してるのですよ。

「貴方」と云ふ尊稱が路に迷つてしまつたのです。そして階級に對するそれ相當な尊敬と威信が凡てそれと一緒に無くなつてしまつたのですよ！』

シブヤーギン夫人は、その搜索ならお手傳ひすることは御免被ると明言した。

シブヤーギンは食事の時にした「演說」が成功したので、その勢に乘じて又しても二條の長談義を演じた。その演說で彼は緊急方策に關して、政治家らしい二三の考案まで提出した。彼は又彼が特にペテルブルグで使ふために用意して置いた、機智に富んだ、と云ふよりは寧ろ重々しい若干の名言――Des mots（格言）――を振り廻した。その諺めいた文句の一つなどを、彼は「さう云ひ得べくんば」と云ふやうな文句を前置にして二度以上も繰り返した。それは現在の大臣の或る一人に對する批難であつた。彼はその大臣が輕佻浮薄な精神を持つて居て、架空的な目的にのみ驅られ勝ちであると云ふ事について述べた。更に一方に於てシブヤーギンは聽衆の中には一人のロシヤ人――平民の一人――が居ると云ふ事を忘れずに、機を見ては若干の名言を即席に製造したりして、彼自身も亦單に血統上のロシヤ人であると云ふばかりでなく、徹頭徹尾眞のロシヤのロシヤ人で、國民生活の精髓にまでも觸れて居ると云ふことを說き明さうとまでした！　かくして例へば雨は枯草の取入れを遲れさせると云ふカル

ロミエーチエフの觀察に對して、彼は直にそれに應じて『乾草をして黝からしめよ、さすれば蕎麥は白かるべし。』と云つた。それから彼は又『主なき倉庫は父なき子なり』とか『一度栽たんと欲せば十度驗さゞるべからず』とか『穀物のある處、常に桝あり』とか『若し樺の樹の葉が聖エゴールの日に一錢銅貨の大きさあらば、「わがカザン夫人」の祭日には穀物は納屋に在るべし』とか云ふやうな諺を製造した。しかも彼は時々その諺をはき違へて、『大工をしてその最後を固守せしめよ』とか、『華美なる家〻は滿腹なす』とかいふ樣な事を言つた。けれどもそれ等の過誤を聞いて居た此の社會の大半は此の Notre bon Russe(わが善良なロシヤ人)の大間違をした事を、別に訝りもしなかつた。實際のところ彼等はコヴリーヅキン公の御蔭で、かやうなロシヤ流の間違にはよく慣らされてゐたのだ。シブヤーギンがかう云つた風な格言や諺めいた事を言ふ時には、一種特別な力强い、心の底から出るやうな濁み聲に近い聲——d'une voix rustique(ぞんざいな聲)を發するのであつた。斯樣な諺めいた文句は、ペテルブルグの相當な場處と時とを選んで吐き出されると、最も高い地位にゐる、羽振の好い貴婦人達から Comme il connaît bien les mœur de notre peuple!(あの方はよくまアあんなに下々の者の習慣を御存じでゐらつしやること!)と云ふ感嘆の言葉を買ふ事が出來るのだ。そしてそれと

同時に同じ地位に居る羽振の好い顯位高官の人達が、それに和して Les moeur et les besoins (習慣と要求!)と云ふ事まで云ひ添へるのだ。

ワレンチーナ・ミハーロウナはソローミンに對しては、實に出來るだけの事をした。併し其の努力も目に見えて失敗に歸したので、彼はがつかりして居た。カルロミエーチエフと行き合つた時、彼女は思はず知らず低聲でかう囁かないでは居られなかつた。『Mon Dieu, que je me sens fatigue!』(あゝ本當に私疲れてしまひました!)

それに對して後者は、皮肉なお辭儀を一つして答へた。Tu l'as voulu, Georges Dandin!』(貴女はそれがお望みだつたのでせう、お馬鹿さん!)

その怠屈な會合に於ける凡ての人の顏容が、一時に吾れ劣らじと、おきまりの御愛想を現はして、思ひ出したやうな握手や微笑や御世辭笑ひが交換されてから、疲れた客と主人とは漸く別れを告げた。

ソローミンは英國製の化粧道具と浴室とを備へた二階の一番上等の寢室へ案内された。が、やがて彼はネヅダーノフの處へと足を運んだ。

ネヅダーノフは何よりも先づ泊る事を承諾してくれたソローミンの厚意を感謝した。

二十六

ソローミンの謝絶は大にシブヤーギンの機嫌を損じた。果ては忽ちソローミンに對してかういふ鑑定を與へて了つた程である、此の教養のないスチイーヴンソンは要するにそれ程大した機械師ではない、彼は全然假面を被つてゐるのではないかも知れないが確かに本式の平民氣取りでゐる一のだ、と。『凡て露西亞人と云ふ奴は、彼等が一事を知つてゐると思ふともう萬事始末に終へないのだ。Au fond(要するに) カルロミエーチエフの云ふ通りだ。』斯樣な腹立たしい毒々しい感情の餘波として此の——en herbe(まだ雛子の) ——政治家がネヅダーノフに對する態度はもつと〳〵冷淡に且つ隔意あるものとさへなつた。彼はコーリアに今日はあの家庭教師に授業して貰ふ事は要らないといふ事——自恃心を養成しなければならないといふ事を告げた。‥‥とは言へ、彼はその家庭教師に、本人が覺悟してゐる解傭の命を直接與へる事はしなかつた。彼は矢張り家庭教師を不問に附してゐた。併しワレンチーナ・ミハローウナはマリアンナを見通してゐる事が出來なかつた。怖るべき一幕が彼等二人の間に演じられた。

午後二時頃彼女等はどういふものか偶然にも客間の中に二人きりでゐるやうな事になつた。二人とも避く可らざる衝突の時期が到來したなと直ぐ悟つた。それで一寸逡巡してから二人は互に次第に歩み寄つた。ワレンチーナ・ミーハローウナは仄かに微笑してゐた。マリアンナの唇は引き結ばれてゐた。二人とも蒼くなつてゐた。部屋を横ぎりながらワレンチーナ・ミハーローウナは眼を右や左に轉じた、そして天笠葵の葉を一つ摘み取つた‥‥マリアンナの眼は自分に近寄つて來る微笑を含んだその顏を眞正面に見守つてゐた。

シブヤーギン夫人が先づ立ち止まつた、そして指先で椅子の背中を敲きながら、『マリアンナ・ウイケンチエウナ』と無造作な聲で呼んだ。『私達はお互に敵對の地位に立つた樣な氣がするのね‥‥斯うやつて一つ家に住まつてゐながら、さういふ事は何ちらかと言へば變な事です、そして私が變な事と言つたら何でも大嫌だといふ事は貴女は承知の筈です。』

『その敵對を初めたのは私ではありません、ワレンチーナ・ミハーローウナ。』

『えゝ‥‥成程さうです。此度の變な事に對しては私に責があります。併し貴女に‥‥あの感情を起させるには他に手段が見つかりませんでしたの——何う言つたら宜いか‥‥あの感情——』

『言つて了つてください、ワレンチーナ・ミハーロウナ。さう御遠慮なさらずに――私の氣に障る事など御心配に及びませんわ。』

『威情……禮儀の。』

ワレンチーナ・ミハーロウナは口を噤んだ。椅子の背中を敲く彼女の輕い指の音より外何にも室内には聞こえなかつた。

『私が禮儀を無視してゐるなんて何うしてお考へになりましたのです？』とマリアンナが訊ねた。

ワレンチーナ・ミハーロウナは肩を聳かした。

『ma chère, vous n'êtes plus une enfant』（マリアンナ、貴女はもう子供ぢやありません）だから貴女には私の言ふ事がよく解つてゐる筈です。貴女の振舞は私にも、アンナ・ザハーロウナにも家族中の者にも何時までも解らずにゐると貴女には想像へるのですか。その上貴女は夫れを祕して行かうと大して骨も折らない。貴女は却つて此れ見よがしに振舞つてゐます。ボリス・アンドレイチ丈けが大方それを氣づかずにゐませう……彼はもつと興味のある、もつと重大な他の事で夢中になつてゐますから。併し彼を除いては皆が貴女の行ひを知つてゐ

ますよ――皆が！』

マリアンナの顏色はだん〳〵と蒼く蒼くなつてきた。

『お願ひですから、ワレンチーナ・ミハーロウナ、もつと瞭乎言つて下さい。一體何が本當に御氣に障つてゐるのでせう？』

『L'insolente！』（强情者！）かうシブヤーギン夫人は思つた。が矢張り自分を制してゐた。

『貴女は何で私が氣を惡くしてゐるか知り度いといふんですね、マリアンナ。よろしい。私は貴女があの生れも、敎育も又社會上の地位も遙か貴女の下にある若い男と長い時間過つてゐたのが氣に入らないのです。夫れに又氣に入らないのは……いゝえ！　氣に入らない丈けぢや云ひ足りない私は貴女が夜遲く……眞夜中にあの若い男の部屋へ訪ねて行くのが氣持が惡いのです。してそれがまあ私の家の內で！　貴女は、それがもう當り前な事で、私はそれを默つて大目に見て、そしていはゞ貴女の浮々して居るのを庇つて上げなければならないとでも思ふのですか？　何一つ非難のない品行方正な婦人として……　Oui, mademoiselle, je l'ai été, je le suis, et le serai toujours（さうです、貴女、私は今迄だつてさうでした、今もさうです、そして是からもずつとさうでせう）――私は腹を立てなくてはゐられないんで

す。』

ワレンチーナ・ミハーロウナは安樂椅子に身を投げ入れた。自分の憤りの重さに壓潰されたとでも言つた風に。

マリアンナは初めて微笑した。

『私は貴女の御德を疑ひはいたしません。過去も現在も又將來も。』と彼女は初めた、『そして私は全く眞面目にさう申上げます。併し貴女のそのお憤りは不必要です。私は貴女のお宅へ何の不名譽も運び入れはいたしませぬ、貴女の仰有るあの若い人は……さうです、私は確かに……彼の人を愛するやうになりました……』

『貴女がネヅダーノフさんを愛する？』

『はい、私は彼の人を愛します。』

ワレンチーナ・ミハーロウナは椅子に掛けたまゝ身を擡げた。

『まア驚いた、マリアンナ！　まあ、彼は家柄も家族もない書生ですよ——まあ、彼は貴女よりは年下ですよ！』（かう言ふ文句を口にするには或る苦々しい喜びが含まれてゐた）『一體此の果はどうなるのですか。それに悧發な貴女は彼の人から何んな善い處を見つけ出したので

す。彼の人はたゞ淺墓な子供ですよ。』

『貴女は彼の方の事をいつもさうと計り仰有いませんでした、ワレンチーナ・ミハーロウナ。』

『おゝ後生だから貴女、私のことはうつちやつといて下さい……Pas tant d'esprit que cela, je vous prie.　どうかさうかつとならないで下さい。私達が議論してゐるのは貴女のことですよ——貴女と貴女の將來のことですよ。考へて御覽なさい！　貴女にとつては何んな配偶者だか』

『私は打明けて申上げなければなりませぬ、ワレンチーナ・ミハーロウナ、私はさういふ方面からそれを考へては居りません。』

『エッ、何ですつて？　それは又一體どう云ふ譯ですか。貴女は貴女の心の指圖に從つたと言ふんでせう……だけどそれは皆結婚といふ事に終るに決つてゐるでせうがね』

『存じません……私はそんな事に就ては考へませんでしたから。』

『貴女はその事は考へなかつた？　まあ、貴女は氣違に相違ない！』

マリアンナは少しばかり顏を反けた。

『もう此の話は止しに致しませう、ワレンチーナ・ミハーロウナ。何の益にもなりません。お

互に了解のしつこはありませんから』

ワレンチーナ・ミハーロウナは衝動的に起ち上つた。

『さうはなりません、此の話は止めにする事はなりません！　大變重大な事柄です……私は貴女の爲めにあの何に對して辯じなければならない。』ワレンチーナ・ミハーロウナは『神に對して』と言ふつもりであつたが、口訥つた、そして言つた。『全世界に對して、私はあんな戯けた事を聞いた以上默つてはゐられない！　そして何だつて私が貴女を了解する事が出來ないのです？　何といふ鼻もちもならない自惚根性を若い人達つて者は有つてゐる事だらう！いゝえ！……私はよう〳〵貴女を了解してゐます。自分で自分の身を破滅の淵に導くに決つてゐるあの新思想にかぶれてゐる事を知つてゐます！　併しさうなればもう取返しがつかない。』

『大方さうでせう。併し貴女は一事だけ信じてゐらつしても宜しう御座います。私が破滅の淵に陷つても私は貴女のお助けを求める爲めに指一本だつて決して差出しは致しません。』

『又自惚だよ、まあ恐ろしい自惚！　さアお聽きなさい、マリアンナ、お聽きなさい』と彼女は急に調子を變へて續けた、……彼女はマリアンナを自分の方へ引き寄せんばかりにした、

併しマリアンナは一歩後退りした。

『Foutez-moi, je vous en conjure.（お聽きなさい、後生だから）詰り、お互に了解し合ふのが六ケ敷いといふ程に私は老ぼれてもゐなければ馬鹿でもありません。Je ne suis pas une encoûtée.（私は泥人形ではありません）私だつて若い時分には共和黨だと認められてゐました……丁度貴女の通り。お聽きなさい、私は心にもない事は言ひ度くはありません、私は貴女に對して母の樣な優しさを感じた事は決してありません。そして又貴女はそれを嘆くやうな性質の人でもありません……併し私は貴女に對してはいつも責任を感じてゐました、今だつて感じてゐます、そして私は始終それを果さう〳〵としてゐました。大方私が貴女の配偶者として空想してゐたその人は――それに對してボリス・アンドレイチも私も、二人とも、何んな犧牲でも爲ようとしてゐたのに――その候補者は大方貴女の思想には全く當て嵌らなかつたでせう……併し私の心の底から――』

マリアンナはワレンチーナ・ミハーロウナの素晴らしい眼や薄紅いほんのり紅をさした唇や、白い手やを諦視めた。指環で飾られたその指は少しばかり開かれてゐたが夫れを此の優美な貴婦人はこれ見よがしに絹の長上衣の胸着にしつかと壓しつけてゐた――そしてマ

リアンナは唐突に彼女の言葉を遮つた。

『配偶者ですつて、ワレンチーナ・ミハーロウナ？　「その配偶者」と仰有るのはあの無情で下卑た貴女のお友達のカルロミエーチエフさんの事ですか』

ワレンチーナ・ミハーロウナは胸着から指を除いた。

『さうです、マリアンナ・ヴイケンチエウナ、カルロミエーチエフさんの事です――あの教育のある立派な若者です。あの人は屹度奥さんを大事にする人です。そして氣違ひ女でなければあの人を拒む者はありません――氣違ひ女でなければ！』

『何うしませう、matante（叔母さん）私も其のお仲間らしいのですものね。』

『だつて、何んな缺點が――何んな重大な缺點が――彼の人にありますか。』

『まあ、ちつともありはしません。私は彼の人を輕蔑致します……唯だそれ丈けです』

ワレンチーナ・ミハーロウナは我慢もならぬといふ風に頭を彼方此方へ打振つた。そして再び安樂椅子に腰を落した。

『彼の人は彼の人として置いて、Retournons à nos moutons（今度は私達の問題の事に歸りませう。）それで貴女はネヴダーノフさんを愛する？』

『はい。』

『そして貴女は彼と……媾曳をつゞけやうと思つてゐる？』

『はい、思つてます。』

『まあ……そして私がそれを禁じたなら？』

『私は貴方の仰有る事は聽きません。』

ワレンチーナ・ミハーロウナは椅子から彈ね起きた。

『まあ、貴女は私の言ふ事を聽かない！　まあ、本當に！　そしてそれが私の大恩を被つてゐて、そして私に私の家で面倒見て貰つてゐる娘が私に言ふ言葉――それが私に言ふ言葉ですね……私に言ふ……』

『不名譽な父の娘が言ふ』とマリアンナは物悲しげに口を容れた『お後を御遠慮なくさう仰有いまし。』

『ce n'est pas moi qui vous le fais dire, mademoiselle,（それを貴女に言ふのは私ではありません）併し何方にせよ其事にはね、ちつとも誇になるところはありませんよ。私費用で生活してゐる娘の分際で――』

『その事で私を辱しめて下さいますな、ワレンチーナ・ミハーロウナ！　コーリアの爲めに佛蘭西人の女教師をお雇ひになればもつと費用がかゝります……私は彼の方に佛蘭西語を敎へ上げて居りますものね。』

ワレンチーナ・ミハーロウナはイランイラン（香油）の香を滲み込ませた、そして一隅に白絲で大きく組み合文字を刺繍した白麻布のハンケチを持つて居る片手を揭げて何か云返をしてやらうと試みた。併しマリアンナは激烈に言ひ續けた。

『若し貴女が只今のやうに種々と列べ立てずに、あんな僞りの恩惠や犧牲の代りに、「私が愛してゐた娘」と仰有れる立地に立つてゐらつしやるなら、何を仰有つても一々道理がありませうに、いえどこ〳〵までも仰有る通りでしたらうに……併し貴女はさういふ嘘を仰有るには餘り正直過ぎました。』マリアンナは瘧を振ふやうに顫えた。『貴女は始終私を憎んでゐらつしやいました。今の今でさへ、貴女の心の底には、唯今仰有つたやうに　私が貴女の相も變らぬ豫言を證據立てゝゐることを、私が汚辱と不名譽の着物を着てゐることを貴女は喜んでゐらつしやいます――はい喜んでゐらつしやいます。貴女のお氣に障る事と云つたら其の不名譽の缺片が貴女の貴族的なお立派な御家敷へ落つこちて來はしまいかと云ふ事ばつかしな

のです。』

『貴女は私を侮辱してゐます、』とワレンチーナ・ミハーロウナは口訥つた。『とうぞ部屋を出て行つて下さい。』

併しマリアンナは自分を制することが出來なかつた。

『貴女の御家族が、御家族中とアンナ・ザハローウナと皆が私の行爲を知つてゐると仰有るんですね、そして皆が怖れ憤つてゐると……併し私が貴女や、御家族の人達や、又はあの人達の誰にでも何物かを求めるとでも御考へになりますか。私が皆の評判を重んずるとでも御考へになりますか。貴女の仰有る通り貴女の費用で生活してゐるのが、私には氣持のいゝ事とでも御考へになりますか。私はこんな贅澤な眞似ならたとへ何んなでも寧そ貧乏の方がましです。貴女の御家族と私との間には完全な灣が、何んな物でもそれを蔽ひ隱す事の出來ない灣が横はつてゐるといふ事がお分りになりませぬか。貴女もお憐憫な御方ですのに――それをお氣づきなさりませぬか。そして若し貴女が私に憎惡を抱かれますなら　私が貴女に對して抱かなければならない感情といふものは何でせう。それはもう逐一申上げます　まい、分り過ぎてゐる事ですから。』

『Sortez, Sortez, vous dis-je！（出ておいで、出ておいでと云へば！）…』とワレンチーナ・ミハーロウナは繰返した、そして可愛らしい細りした足で床の上を踏み付けた。

マリアンナは一歩戸口の方へと踏み出した。

『今直ぐに引退ります。でも御存じですか、ワレンチーナ・ミハーロウナ？ラシースのBojazetではラチエルの口でさへその「Sortez！」（出て行け！）では効果がなかつたと言ふ事で御座います、まして貴女はその女優の足下にも寄りつけない！　そして、もつと何とか仰有いましたね？『je suis une honnête femme, je l'ai été et la serai toujours』（私は正直な女です、過去もさうでしたが將來もいつもさうです）ですつて？　併しねえ、私は貴女よりは遙かに正直な女だと確信して居りますよ！　さやうなら！』

マリアンナは急ぎ足に出て行つた、ワレンチーナ・ミハーロウナは椅子から跳ね起きた。彼女は叫びたかつた、泣きたかつた…併し何を叫んで宜いか分らなかつた、そして涙が思ふさま出て來なかつた。

彼女はハンケチで自分を煽ぐより慰める道はなかつた、併しながらそのハンケチに滲み込んだ香が益々彼女の神經を昂らせた。彼女は慘めさと屈辱とを感じた。彼女が今し方耳にした言葉の中には眞理の分子が含まれてゐる事を悟つた。併しながらあゝも無體に自分を判き得るものが又と他にあり得ようか？『私はそんなに邪慳な女だらうか』と彼女は考へて見た、そして闘らずも彼女の眞正面の窓と窓との間に懸けてあつた鏡に對して自分の姿を諦視めた。その鏡は恍惚するやうな一つの顏を映してゐた。稍々取り亂してゐて、叢消の血汐の色を殘してはゐたけれども、その顏は矢張り人を魅するに足るものであつた。いみじく、優しい、天鵞絨のやうな眼…『私が？　私が邪慳？』と彼女は再び考へた…『此のやうな眼眸をしてゐて？』

併しながら此の瞬間、彼女の良人が部屋に這入つて來た。彼女は再びハンケチで顏を蔽ひ隱した。

『何うかしたのかい？』と彼は心配さうに訊ねた。『何うした、ワーリア？』（彼はかういふペットネームを發明した、併しこれは、全く差し向ひでゐる時の外は、殊には田舍にゐる時の外は決して用ひなかつたのである）

最初の程は彼女は默つてゐた。何うもしないといふ事を明言した。併し果ては極めて淑やかな哀つぽい態度で、椅子のまゝ振り返つて、兩腕をば良人の肩に投げ掛け、（良人は彼女の方

へ身を屈めながら立つてゐた。彼の胴衣の前開きに顔を押し隱しながら何もかも打ち明けて了つた。何等の矯飾も又此れと云ふ目算のあるのでもなく、彼女は、マリアンナを全然恕しはしなくとも少くともある程度までは是認してやらうと努めた。彼女は凡ての咎をマリアンナの若さと、熱し易い性質とそして彼女の子供の時分の教育の缺點とに歸した。彼女は亦或度までは、そして矢張り何等他意あるのでもなく、自分にも罪ありとした。『私の娘でしたらこんな事は決して起りはしませんでしたらうに！　私は、あれとは餘程違つた風に盛督したでせうに！』シプヤーギンは音無しく優しく落ちついて聽いてゐた。彼は、彼女が兩の腕を肩から離さず頭を動かさないので矢張り屈んだまゝ立つて居た。彼は彼女を天使と呼んで、彼女の額に接吻して、そして彼は自分の立場として、家長の立場として採るべき前後策を今承知したと告げた。そして慈悲深い、併しながら精力的な人の足取りを以て部屋を出て行つた。彼は不愉快ではあるが止むを得ぬ一個の責務を果たすべく心に決する處があつた。

午後八時頃、晩餐の後（ネヅダーノフは自分の部屋で友人シーリンに送る手紙を認めてゐた）

『なつかしきウラジミール、僕は今將に僕の生存上死活にかゝはる變化に際して君に此の手紙を認めつゝあるのだ。僕は此家を追はるゝ事になつた。僕は今此處を去らうとしてゐる。

併しさうなつた處で何でもない事だ。僕は只一人で去らうとしてゐるのではない。何時か君に知らせた事のあるあの少女と一緒だ。僕等二人は此の世に於ける運命が似て居る事によつて、見解と努力とを等しくせる事に由つて、又相互の感情に由つて互に結合したのだ。二人は互に相愛してゐる。少くとも僕は、今現に僕に生じてゐる外のどんな形に於ても愛の情熱を感ずる事は不可能だと信ずる。併しながら若し僕が、胸中人知れぬ恐怖も又一種の奇異なる疑懼の念すら感ぜずと言はうなら君に對して僕は嘘言を吐く事になる。未來は眞の闇夜だ。そして僕等は此の闇の中を一緒に突き進まうとしてゐる。僕は僕等二人が何に對して進まんとしてゐるか、又如何なる仕事を選び定めたかは説明を要しない。マリアンナと僕とは幸福を求めてゐるのではない、僕等は享樂したくはない、肩を並べて互に助け合ひながら一緒に奮鬪せん事を是れ欲してゐるのだ。僕等の目的は僕等には明瞭である、併しながら如何なる道がその目的に通じてゐるかは知らない。僕等は同情や救助ではなくとも、少くとも努力すべき自由を見出すであらうか。マリアンナは立派な正直な女である。若し僕等が斃るゝの已むなきに至るとも僕は、彼女を破滅に導いた事に對しては良心の苛責に遇はないであらう。何となれば今の處、彼女にとつては此のライフより他にあり得ないからである。併しながらウ

ラヂミール、ウラヂミール！　僕の心は重い。僕は懷疑の爲めに苦しめられてゐる。勿論彼女に對する僕の感情に關して〻はない、併し……僕は分らない。ともあれ、後戻するには早や時期は遲れた。遙か彼方より僕等二人の爲めに手を差し伸し給へ、そして忍耐と自己犧牲の力とそして愛と……就中愛を得せしむるやう僕等の爲めに祈つてくれ給へ。そして未知なれども吾等の全精神を傾け吾等の心臟の血汐を盡してまでも愛する汝等、露西亞人よ、僕等を餘り冷遇してはくれるな。そして汝等が期待せる處のものを僕等に敎へてくれ！　さやうなら、ウラヂミール、さやうなら！」

此等の數行を認めてから、ネヅダーノフは村へ出かけた。翌る晩、まだ空には東雲の色も呈せぬ頃、彼はシブャーギン家の庭からは程遠からぬ白樺の森の儘頭に佇んでゐた。彼の少し背後には小さな農夫の馬車が韁のない二頭の馬に附られて、廣い榛の茂りの濃綠の蔭に横つてゐた。馬車の中には組繩の座席の下に小柄の白髮頭の老百姓が一束の枯草を褥に、補綴の外套を枕にして眠つてゐた。ネヅダーノフは絕えず道路の方を、庭園の端に植ゑられた柳の茂りの方を見守つてゐた。灰色の夜の靜寂がまだ凡ての物を蔽うてゐた。弱々しくも光りつくらしてゐた小さな星が空の荒寥たる深みに消え去つた。おつ擴がつた雲の下の方の丸つこい

緣に沿うて青白い光が東から迸り出た。そこからは又曉の冷い呼吸が通つて來た。忽ちネヅダーノフはびくつとなつた、そして身構へした。何處か間近な處で先づ鋭い物の軋る音、次にドシンといふ扉の音が聞えた。肩掛でくるまつた小さい女の姿が素手に包を抱へながら用心深い足とりで靜かな柳の影から柔かい路の埃の上に歩みでた、そして爪立ちしながらだら〳〵とそれを横ぎつて白樺の森の方へ曲つた。ネヅダーノフは飛び出した。

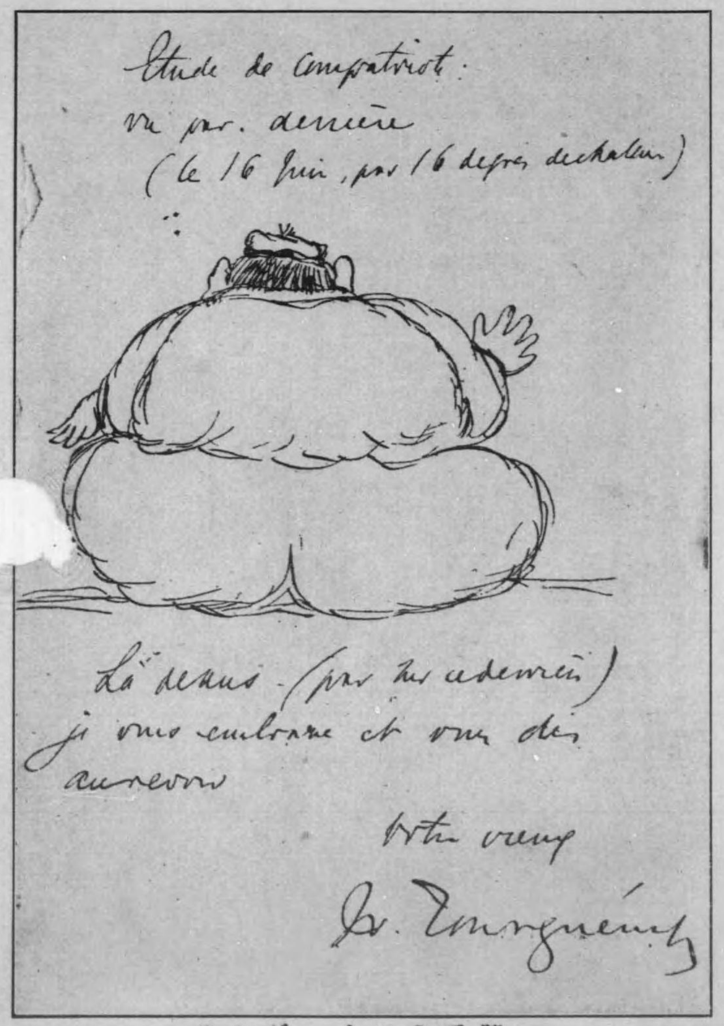
「マリアンナ？」と彼は囁いた。

「私ですよ！」といふ優しい答が顏を包んで居る肩掛の中から聞えて來た。

「さアどちらへ」とネヅダーノフは應じた。包を差出した彼女の手をきまり惡さうに握りしめながら。

彼女は寒さの爲めにぞつとしたらしく體軀を縮めた。ネヅダーノフは彼女を馬車へ導いて行つた、そして百姓を起した。百姓は素早く跳び起きて早速馭者臺に攀ぢ上り、大外套をはらりと引つ掛けた。そして手綱の代用をしてゐる繩を掴んだ。馬は胴震ひした。百姓は熟睡の後なのでまだ寢ぼけたやうな聲を出して、あたりを憚り乍ら馬を勵ました。ネヅダーノフは自分の上衣を繩の腰掛の上に敷いてからマリアンナをそれに坐らせた。彼は又彼女の足を毛

露光量違いの為重複撮影



蹟手のフネーゲルツ

（の里巴りより里郷のヤシロ月六年四七八一）
（節一の輸書るたせ寄に人夫オドルアルヴィ）

布で包んでやつた――馬車の底に敷かれた枯草は濕つてゐたのだ――自分は彼女の傍に坐つた、そして百姓の方へ身を屈めながら靜かに言つた『お前の承知な處へ馬車を進めておくれ』百姓は手綱をぐいつと引張つた、と馬は鼻嵐を吹いたり胴震したりしながら矮林を驅け拔けた。そして幅の狹い古い轍の上で、がたぴしと動搖しながら、馬車は路の上を走つた。ネヅダーノフは一方の腕をマリアンナの腰へ廻して彼女を支へた。彼女は冷い指先で肩掛を少しく引き上げた。そして彼の方に向き直つて莞爾しながら言つた、『何てせい〳〵と氣持のいゝ事でせうね、アリヨーシャ！』

『左樣で御座います』と百姓は應へた、『露がどつさり降りてゐるんでがせうよ！』

露は既に深く、轍の心棒が路の邊の丈高い雜草の頂に觸れると、美しい水の玉が夕立の降り注ぐやうであつた。そして草の緣は青みがゝつた灰色を呈してゐた。

マリアンナは再び寒さの爲めに身を顫はした。

『何て清々する事でせう、何て清々することでせう！』と彼女は浮々した聲で繰返すのであつた。『それに自由ですわ、アリヨーシャ、自由ですわ！』

露光量違いの為重複撮影

ツルゲーネフの手蹟

（一八七四年六月十六日巴里より郷里のヤシロヤの書翰の一節）
（ヴィアルドオ夫人に寄せたる書翰の一節）

布で包んでやつた――馬車の底に敷かれた枯草は濕つてゐたのだ――自分は彼女の傍に坐つた、そして百姓の方へ身を屈めながら靜かに言つた、『お前の承知な處へ馬車を進めておくれ』百姓は手綱をぐいと引張つた、と馬は鼻嵐を吹いたり胴震したりしながら矮林を驅け拔けた。そして幅の狹い古い轍の上で、がたぴしと動搖しながら、馬車は路の上を走つた。ネヴダーノフは一方の腕をマリアンナの腰へ廻して彼女を支へた。彼女は冷い指先で肩掛を少しく引き上げた。そして彼の方に向き直つて莞爾しながら言つた、『何てせいせいと氣持のいゝ事でせうね、アリョーシャ！』

『左樣で御座います』と百姓は應へた、『露がどつさり降りてゐるんでがせうよ！』

露は既に深く、轍の心棒が路の邊の丈高い雜草の頂に觸れると、美しい水の玉が夕立の降り注ぐやうであつた。そして草の綠は青みがゝつた灰色を呈してゐた。

マリアンナは再び寒さの爲めに身を顫はした。

『何て清々する事でせう！』と彼女は浮々した聲で繰返すのであつた。『それに自由ですわ、アリョーシャ、自由ですわ！』

二十七

貴婦人を伴うたある紳士が小さな馬車でやつて來て面會を求めてゐるといふ事を聞いて、ソローミンは直ちに工場の門を馳け出して行つた。その來客に對してお早うの挨拶もせず、たゞ二三度頭を下げた丈けで、彼は、直ぐ樣馬車を構内へ入れるやうに其の百姓に告げた。そして自分の小さな住居へ眞直ぐに行くやうに百姓に命じながら彼はマリアンナを馬車から助け下ろした。ネヅダーノフは彼女の後から跳び降りた。ソローミンは狹くて長いそして暗い廊下傳ひに彼等二人を導いて行つた。そして建物の後部にある狹い迂つて居る小さな階段を二階へと上つた。とある低い戸を彼が開けると彼等二人は、窓の二つある小さな、綺麗に掃除の届いた部屋に這入つた。

『ようこそ！』とソローミンは例の微笑を今日はいつもよりは一層にこやかに、一層はれやかに現しながら言つた。

『此處が君方の宿處だ、此の部屋と此の隣にもう一つあるから見給へ。見るに足らない部屋ではあるが夫りや構はん。大丈夫住めない事はない。そしてこゝなら誰れも探索に來る者も

あるまい。此處の窓の下は地主が花園と言つてゐる處だ。併し僕はこれを野菜園と呼びたいのだ。眞向うが壁で右と左に籬がある。實際閑靜な小さなひつこみ場處だ！　さア、改めて、ようこそ、お嬢さん、それから君も、ネヅダーノフ、ようこそ！』

彼は二人と握手した。彼等は二人ともまだ外套を脱かずに凝と佇んでゐた。そして半ば困惑したやうな、半ば喜ばしいやうな感情を抱いて默つて眞正面を見詰めてゐた。

『はて、何うした？』ソローミンが又始めた。『さう云ふ物をお脱ぎなさい！　何んな荷物を持つて來たかね？』

マリアンナは未だ手に持つたまゝでゐた包を彼に見せた。

『此れが皆で御座います。』

『それから僕の鞄と手提がまだ馬車の中に置いてある、僕が行つて直ぐ持つて來よう。』

『そのまゝ〳〵』ソローミンは戸を開けた。『バーウエル！』と彼は暗い階段に向つて叫んだ。『馳けて行くんだ、おい。馬車の中に這入つてる物があるから……それを持つてお出で。』『只今。』呼べばいつも應せざる事なきバーウエルの聲が聞えた。

ソローミンはマリアンナの方を振り向いた。彼女は肩掛を投げすてゝ外套の釦を外してゐ

た。

『で何もかも首尾よくまゐりましたかね』と彼は訊ねた。

『何もかも……誰れにも見つかりませんでした。私は手紙を一本シブヤーギンに殘して來ました。でも着物は何にも持つて參りませんでしたの、ワシリー・フエドーチッチ、どうせ直ぐ貴方が私達をお遣り下さるのですから……』（マリアンナは何ういふものか「民衆の中へ」といふ文句を入れる事が出來なかつた）『なに、いづれにしてもあんなものは要りません。併し私は必要なものを買ふ丈けの金は持參して居ります。』

『その事は皆後程取極める事にしませう……で此れは、』とソローミンはネヅダーノフの荷物を運んで來たバーウエルを指して言つた。『僕の最も善良な友達を紹介します。お二人とも彼を十分に信用なさつても宜いのです……私を信用なさる通りに。お前は湯沸の事をタチアナに話してくれたかね』と彼は低い聲で附け加した。

『直ぐに持つてまゐりますでせう、』とバーウエルは答へた、『そしてクリームも何もかも。』

『タチアナといふのは彼の妻です』とソローミンは言葉を續けた、『そしてこれも彼と同樣に信用するに足る人間です。貴女が……さうだ……少しお馴れになるまでは、その女をお側に

置きませう、ねえお孃さん。』

マリアンナは外套を脱いで部屋の隅にある革の小さいソーファに投げ掛けた。『マリアンナと呼んで下さい、ワシリー・フエドーチッチ――私はお孃さんであり度くはありません。それに私は誰にも側使などして貰い度くは御座いません……私は下婢を使はうとて此處へまゐつたのではありませんの。私の着物を御覽なさいますな、私は――あちらで――これつきりしか持つて居りませんでした。夫れも皆變へなくちやなりません。』

彼女の綺麗な肉桂色の着物は頗る單純なものであつたが併しペテルブルグの仕立屋が仕立てたもので、マリアンナの胴や肩から意氣な襞を成して垂れて居た。それはすつかり流行の型に出來てゐた。

『では下婢ではない、先づアメリカ風の手傳ならいゝでせう。そして兎に角お茶を喫らなくちや。まだ早いのですから、それにお二人とも疲れてゐらつしやるに違ひない。私は工場を見廻つてまゐります。後程又會ひませう。何でもバーウエルかタチアナに仰有るが好い。』

マリアンナは兩方の手を素速く差し出した。

『何う御禮を申上げたらいゝでせう、ワシリー・フエドーチッチ』彼女はすつかり感動しながら彼を視た。

ソローミンは彼女の一方の手を優しく摩りながら言つた、『何の、御禮を言はれる程の事でもありません……併しさう申すのは本當ではない。貴女の御禮の言葉は私に非常な喜びを與へる、と、こう言つた方がいゝのです。それで互に對等になります。それでは一寸失禮！　バーウエル行かう。』

マリアンナとネヅダーノフとは二人ぎりになつた。

彼女はネヅダーノフの處へ馳け寄つた。ソローミンを見詰めた時と同樣な、併し一層の樂しさと一層の感激と喜悅の表情を以て彼をながめながら言つた『おゝ、あなた！　……私共の新生活が初まります……やうやく！　やうやく！　あなたは、私達がほんの二三日を過ごさうといふ此の哀れなちつぽけな部屋があのむか〳〵させるやうな邸宅に較べて何んなに懷しく喜ばしいものだか御存じないでせう。ねえ、嬉しくはなくつて、あなた。』

ネヅダーノフは彼女の手を取つて自分の胸に壓しつけた。

『僕は嬉しい、マリアンナ、貴女と此新生涯を始めるのが！　貴女は僕の目標の星だ、ねえ、僕のたよりだ、僕の力だ……』